IRUNA™
AIRUNA™

モビルスーツは、UC 0079に勃発した一年戦争において、衝撃的に歴史の表舞台に登場した兵器体系である。それはあの忌まわしいコロニー落としによって、全人類に忘れようのない恐怖の記憶を刻み込んだ ブリティッシュ作戦において地球の各地に落下したコロニーの破片は、一次被害だけでも数億の人口を死に追いやったが、作戦に使用されたサイド2〈ハッテ〉8バンチ「アイランド・イフィッシュ」の市民はその直前に毒ガスにより一人残らず虐殺されていた。

無論、当時は詳細についてほとんど報道されていなかったが、同じラグランジュ4に隣接するコロニーに暮らす者として、住んでいる場所そのものが大量虐殺の兵器となり得ることを知った時の言いしれぬ恐ろしさは、当時を味わった人間ならよく記憶されていることだろう。ほんの子どもに過ぎなかった筆者でさえ、不安に眠れぬ夜を過ごしたことを未だに忘れ得ない。

動くことのないようラグランジュ・ポイントに据えられた巨大な人の巣。だが、あの短い一週間戦争の戦いだけで、そんなものがあまりにも脆い幻想に過ぎないことを知らしめるには充分だった。大地が不動のものであると当たり前のように考えているアースノイドには、我々が抱くこの底知れない恐怖は恐らく理解されまい。

幸いにして、我がサイド6〈リーア〉は親シオン派のランク・キブロードンによる政権が中立を宣言し、直接の戦火からは無縁でいることができた。それでも一年戦争後期には、その中立コロニーであることを利用するべく両軍が兵力を持ち込み、結果サイドの内外で戦闘が繰り広げられるのを目の当たりにすることとなった。

ここに、我々リーアの住人の、特異性の発祥を見ることができる。

弊社既刊「マスター・ゼータ・ガンダム」においても触れられているが、リーアの住人は、ガンダムに対しての特別の感情を持っている。バルダコロニーに寄港したホワイトベースが乗せてきたRX 78 ガンダムは、TV中継を通して戦争の現実を改めてリーア住民の眼前に叩きつけると同時に、今となっては伝説となったあの白い機体の雄姿をまざまざと意識の底に植え付けた

戦争そのものの有り様を、ルウム戦役というわずか一度の戦闘で塗り替えるに至ったモビルスーツの登場は、いわゆる軍事マニアたちに新たな研究ジャンルを開拓させた 飛躍的な設計ツールの進化、そして宇宙時代の熟成とともに誕生した様々な新素材の台頭により、モビルスーツの数と種類は一年戦争以降、爆発的に増え、そうしたマニアたちでさえ悲鳴を上げるほどの研究テーマが提示されて今日に至るのである。

が、リーア住民はその中でもとりわけ、ガンダムという固有の名称を持つモビルスーツに対して、憧憬とさえいえる感情を培ってきた。戦争の中で平和を享受し続けたリーア市民にとって、ガンダムこそが"リアルな"戦争との接点であったことは皮肉ではあるが、それゆえにガンダム研究にかけては相応の自負を持つ。

幻のモビルスーツとされてきた機体は数多い。だが、宇宙世紀における最もファンの多いモビルスーツの名称でありながら、その神格化さえされた存在のゆえか、"ガンダム"は謎とされる隠された領域の大きさにかけては他に類を見ない。中でも、Z計画の集大成として認識されているダブルゼータ・ガンダムについては、グリプス戦役終結前後の混沌とした情勢の中で、ほとんど情報的にも、存在的にもロストされたままといっていい機体である。

今回のマスターピースでは、ゼータを超えるモビルスーツと

ダブルゼータ――ガンダム開発計画から洩れ出でた一瞬の発露

By Koo Hashimra クゥ・ハシムラ

masterpiece of HUGE ARMS

"*masterpiece* of HUGE ARMS / Anaheim Electronics MSZ-010 Double Zeta Gundam" has been published in 5 different language mainly used in Reah. This is a **Japanese** edition. There are also **English**, **French**, **German**, and **Chinese** version of this book.

masterpiece of HUGE ARMS アナハイム・エレクトロニクス MSZ-010 ダブルゼータ・ガンダム は、リーア全域で日常的に使われている5種類の言語で発行されます。本書はその「日本語版」です（日本語版以外にも「英語版」「フランス語版」「ドイツ語版」「中国語版」をお楽しみいただけます

masterpiece of HUGE ARMS / Anaheim Electronics MSZ-010 Double Zeta Gundam" is fictional work based on "Mobile Suit ZZ Gundam", by © SOTSU AGENCY SUNRISE
The statement above, regarding the publication in 5 different languages, is also fictional. None of the English, French, German, or Chinese version of this book is available
Thank you for your understanding 上記の「5種類の言語で発行しています」というのはフィクションです 日本語版以外は存在いたしません

の願いを[illegible]セータ[illegible]される本機を取り上げた。

ダブルゼータ[illegible]とは、果たしてどのような機体だったのか？　設計思想はもちろん、建造時期や経緯にも不明瞭な点が多すぎるこの機体は、近年の研究の結果、驚くべき戦果を挙げた傑作機であると評価を改める研究家もいる。

Z(ゼータ)の名を冠していることから、アナハイム・エレクトロニクス社(AE社)が当時推進していた「Z計画」の産物であるという捉え方をされていたダブルゼータ・ガンダムだが、果たして本当にそうだったのか？

結論から述べるなら、ダブルゼータ・ガンダムはゼータ・ガンダムの後継機として登場したが、最初から後継機種として開発されたわけではなかった。少なくとも、現在の説ではそれが主流である。

当時グリプス戦役の真っ只中にあったエゥーゴは、失われた戦力の補充として新鋭機の導入をAE社へ打診した。発注の[illegible]、納入まで[illegible]も短すぎる期間。この事実から導き出される結論は[illegible]である。すなわち、ダブルゼータ・ガンダムはそれ以前から[illegible]敢えていうならばゼータ・ガンダムのロールアウト時点よりも遙かに過去の時点から、開発されていた機体だということだ。

ダブルゼータ・ガンダムとその傍証を検証することで、本誌では幾つかの新たな可能性を見出した。本誌をお読みになれば、読者はダブルゼータ単体のみならず、AE社内で極秘に進行していたプロジェクトに内在したであろう「ガンダム」と名の付く謎多き一連のモビルスーツの開発史の一部なりとも、垣間見ることになるだろう。

AE社は古くはUC0080年代初頭には既に、連邦と共同で"ガンダム"開発計画を発足させていたとされる。ダブルゼータ・ガンダムについても、機体に盛り込まれる予定であったいくつかのコンセプトについては、その頃から基礎研究が始まっていたというのが現在の通説である。

連邦軍やエゥーゴの首脳陣が「ガンダム」に求めていたものは、敵対勢力に対して絶対的優位を持つ機体であった。連邦

008 Get Back in U.C.0088
時代を象徴する名機を振り返る

028 The Flying fortress
ガンダムである特権：Gフォートレス

034 Terminal point of fat technology
技術の継決算として
By MASAYA TAKAHASHI マサヤ・タカハシ

046 Test Case of Cutting Edge Technology
先端技術検証機としてのダブルゼータ
047 1; World situation at the development ダブルゼータ・ガンダム開発時の情勢
048 2; Details in development 開発に至る経緯
050 3; Delicate, bold airframe 繊細にして豪胆な機体
060 4; Flying fortress 巡行形態「Gフォートレス」の航空作戦能力
062 5; Full armored double zeta Gundam コンパクト化した兵装プラットホーム「フルアーマー・ダブルゼータ」
066 6; Summary 総括
054 【特記】胸部マニピュレーター
052 胸部構造物に見るガンダムの系譜
By SHINYA OGURA シンヤ・オグラ

068 Nahel Argama
The Mothership of "GUNDAM"
ガンダムの母艦たるネェル・アーガマ

軍の守護者的存在[illegible]のガンダムは一年戦争終結後に連邦軍やAE社にその思想を受け継がれた後、幾つもの枝に分かれ、それぞれの進化を遂げるに至る。ダブルゼータ・ガンダムはその一つであったとする考え方だ。

だが、真相は時に"憧れ"といった幻想を微塵に打ち砕く。そう、幻想とは脆いものなのだ

本誌の主張する仮説はこうだ。ダブルゼータとは、実はその時ロールアウトの目処が立っていた、クライアントの要求性能に見合った実験機体を新型として納入したに過ぎなかったのではないか？　言い換えれば、単純に「たまたまそこにあった」からだとしたら？ ガンダム・ファンは怒るだろうか

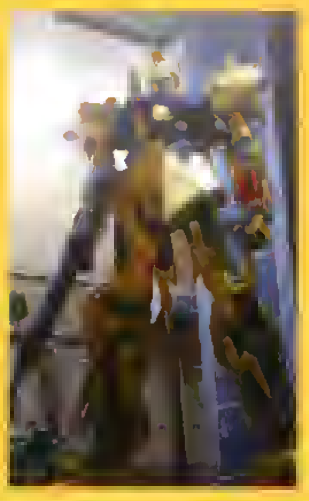
それはなんらダブルゼータ・ガンダムの価値を貶めるものではないと断言する。

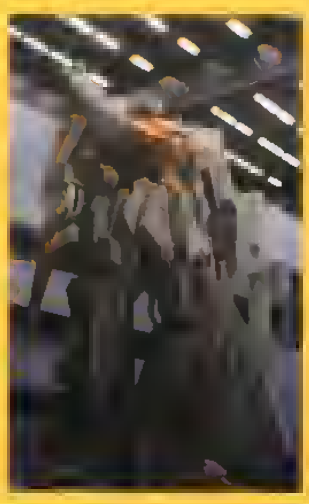
[illegible]説によればコロニー落としを水際で防ぐだけの性能を求められたともいわれる、[illegible]個のモビルスーツが持つ武装としては究極ともいえる「ハイ・メガ・キャノン」を装備し、単独でだけでなく、複数個に分離しての航空展開能力を備えた万能な機体は、その時点における名実ともに最強のモビルスーツだった

恐らくAE社自身でさえ、想定外の性能を発揮したダブルゼータは、同社が一年戦争終結直後から綿々と続けてきた「ガンダム開発計画」の、一瞬の発露であったのではないだろうか　敢えていおう。このわずかに洩れ出でた光を見過ごしたならば、きっと我々には金輪際"ガンダム"を語る資格はない

本書では、この機体を設計思想や投入された技術など様々な角度から検証し、そこから"ガンダム"という名のモビルスーツの体系の一部を紐解くことを試みる。それが、"ガンダム"に特別な思い入れを捧げてきたリーア住民の使命であることを信じて。

クゥ・ハシムラ　UC0072年生まれ。宗教家の家に生まれた影響で、修行のため宗派の総本山のある地球に一時下りていたこともあるが、古巣のサイド6に帰還。コンピューター・ゲーム製作スタッフなどを経た後、現在はライターとしてガンダム系情報を多く扱うリーア発信の情報サイトに多く原稿を寄稿している。





073 Looking back Haman war　メディアが捉えたハマーン戦争

073 Daily Grenade / July 10, U.C.0088
エゥーゴ、新型モビルスーツを投入か

074 Monthly MOON / U.C.0088 August edition
双子の兄弟の戦争

076 MONEY=MOON / U.C.0088 August edition
誰のためのモビルスーツ?

078 Daily Rising SUN / September 1, U.C.0088
ダブルゼータ・ガンダムを確認

079 Newsweek Kong=Post / January 18, U.C.0089
戦争の終結

Repairing by RYOTA FUJITSU リョウタ・フジツ

080 Double Zeta GUNDAM requested in age
時代に求められたダブルゼータ・ガンダム

088 From the Operation Side
運用面から見たダブルゼータ・ガンダム
By ISAKU OKABE イサク・オカベ

106 THE GUNDAM TEAM
ガンダム・チームが象徴していたもの
By KAMUI KAMIISHI カムイ・カミイシ

122 THE BIG A.E.
アナハイム・エレクトロニクス社という企業

128 Resources.

FLOWER STATION

Even if you forget, I do not forget.

The FLOWER STATION is a shop to which
the man can also enter readily.

Visit us Now!

Get Back in U.C.0088

写真は　　配属される直前
もの　　ルゼ　ガ　ム
カ編集ーノマ、写真＝エーゴ

時代を象徴する名機を振り返る

全人類を震撼させた宇宙戦争、通称"一年戦争"が勃発して、今年で30年が経過する。ジオン公国のザビ家が独立を掲げて地球連邦軍に戦いを挑んだこの戦争は、その後の人類史に大きな影響を及ぼした。

戦争に至るまでの経緯については他の文献なりを参照してもらうとして、重要なことは、地球上のみを生存圏としていた時代に人類をさんざん悩ませていた国家や資源問題といった"しがらみ"から、自分たちが宇宙に進出してもなお　向に解放されていないという現実を、鼻先に突きつけられたことであっただろう。

地球と宇宙、という新たに生じた"境界"は、大小含め現在までに数え切れないほどの戦乱を生み出した。その中でも、ただ混乱と衝撃のみを与えた一年戦争の後に起こったグリプス戦役、およびこれに続く第　次ネオ・ジオン戦争（ハマーン戦争）は、この　者の対立関係を明確にしたという点で特に重要である。

この第一次ネオ・ジオン戦争の終結からちょうど20年。今回は、宇宙世紀史上においてターニングポイントとなったこの時代を象徴するモビルスーツとして、アナハイム・エレクトロニクス社のMSZ-010 ダブルゼータ・ガンダムを取り上げる。

高スペック、高出力を誇るモビルスーツの代名詞として語られるダブルゼータ・ガンダムとは、どのような機体であったのだろうか？

すべての発端となったジオン共和国は、ＵＣ0100年に自治権の放棄を宣言した。20年にもわたる、"シオン"を引き金とした戦乱に　応の終止符が打たれたのである。思えば、高性能モビルスーツを代表的する最もポピュラーな名称「ガンダム」とは、"対ジオン"の象徴的存在でもあった　それから既に10年が経過しようとしている今、反政府運動も沈静化し、あの一年戦争以降、宇宙は久々の平穏を取り戻している。

時代を象徴した名機を振り返るには、良い時期であろう。

今回は、就役当時の貴重な写真や資料、そしてダブルゼータ・ガンダムの実像を推論するヒントとなり得る過去の記事の再録などを交えながら、その本質に切り込むことを試みる。

ダブルゼータ・ガンダムの外見上の最大の特徴となるのが、この頭部に装備されたハイ・メガ・キャノンだろう。

極端に短いバレルからも分かるように、命中精度よりも至近の敵に対する殲滅能力に比重が置かれており、粒子ビームが収束しないため射程距離も短い。第一次ネオ・ジオン戦争中には、コロニー落としが行われたダブリン戦や、ネオ・ジオンの副総帥ハマーンとの最終決戦など、数回の使用が確認されている。

当時のメカニックが残した整備日誌には、ハイ・メガ・キャノン発射時に頭部にかかる多大な反動を受け止めるために、襟部分から支持アームが起き上がる機構が内蔵されていることを伺わせる記述が見つかっているが、詳しいことは不明である。

ダブルゼータを象徴する頭部

HEAD BLOCK
with HIGH MEGA CANON

ウィング・シールド

WING SHIELD

ダブルゼータ・ガンダムの腕部に装備されているウィング・シールドは、Gフォートレス、およびコア・トップ時において水平翼と垂直翼を構成するエレメントとなる。

これは大気圏内飛行において、本機を浮かせるための揚力を得るというよりも、強大な推力による"動力誘揚"に対し、姿勢安定のための制御を司るために存在すると思われる。

そのため、ウィング形状ではあるが、材質、および構造的にはシールドとして充分な強度を持たされている。また、基部の回転運動を含め、フレキシブルに可動することを利用して、AMBACシステムによって動的に制御される翼面部位としても機能するようだ。

ウィング・シールドは、その"盾"としての役目ゆえに戦闘での損耗機会が多く、その都度交換された。その際、アナハイム・エレクトロニクス社からは、効率を追求した性能向上タイプが交換部品として支給されることがあり、形状も少しずつ変化していったようである。

高機動性を与えるノズル

VERNIER NOZZLE

ダブルゼータ・ガンダムの機体各所には、姿勢制御のためのリニアスパイクノズルが設置されている（黄色の四角い噴射口内）。これは、同時代の他のモビルスーツと比べて設置数や分散率において突出しており、これによって格段に素早い機位変更を行うことができたであろうと推測される。

また、本機の膝両サイド、および腰ブロック前部の上下には、ノズルの外縁部が黄色ではなく青く塗装されているものが確認できる。コクピットハッチの直下に高温となるノズルを設けることは、設計上問題にも感じられることから、この部分は別の機能を持っているのではないかとする新説が専門家の分析から浮上した。しかし、写真からはリニアスパイクノズル特有の構造らしきものも見えるため、真偽は不明となっている。

絶対的パワーを内包するバックパック

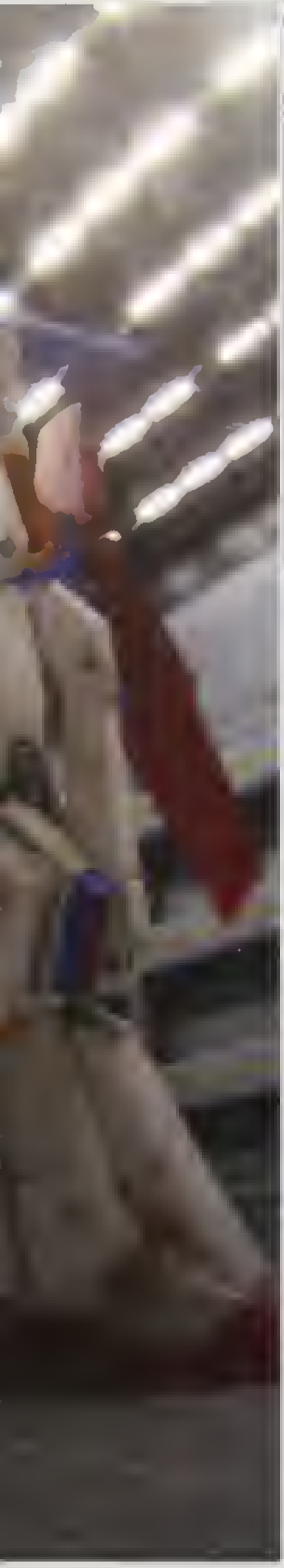
BACKPACK

本機の特徴の1つが、モビルスーツ形態時の機動やGフォートレスの飛行のための推力のおよそ半分を担う、強力なジェネレーターを内蔵した巨大なバックパックである。外観上も、他のモビルスーツとは一線を画すシルエットを作り出す。

パワープラントを包有するだけでなく、21連装ミサイル・ランチャーや、メガ・キャノン（モビルスーツ時にはハイパー・ビーム・サーベルとしても機能）と、本機の誇る大火力のキャリアーとしても欠かせないユニットである。

機能が凝縮するダブル・ビーム・ライフル

DOUBLE BEAM RIFLE



本機の主兵装となる大型の2連装ビーム・ライフルは、内部にジェネレーターを内蔵することで、通常のモビルスーツが持つ火力を遙かに凌ぐ威力を誇る。

頭部のハイ・メガ・キャノンと異なり、こちらはロングバレルとされており、効率的にエネルギーを収束できる利点がある他、ある程度の"狙撃"も可能であった。一斉射で複数のモビルスーツを撃破できたともいわれ、破格の破壊力で戦果に貢献した。

Gフォートレス変形時にはダブル・ビーム・ライフルの後端が機首となるが、ここにコクピットが設置されているなど、設計が試行段階にあったことを伺わせる点も見られる。が、これもダブルゼータ・ガンダムの圧倒的な完成度の前には、致命的な運用上の欠陥とはなり得なかったのである。

大出力砲撃のためのジェネレーターを自前で持つという兵器としての側面に加え、ドッキングのための接続機構や臨設コクピットなどを備えており、やや取り回しに難はあったものの、豊富な機能を集約させたダブルゼータ・ガンダムを象徴する常時携行装備であった。

The Flying fortress

大気圏内を低空飛行中のコア ファ キャリアとコア ブロックもブースター噴射をしたのちは とする説もあるか この写真では噴射炎は見られない ／2 同じく飛行中のコア ベース モビルスーツ時に腰サイドアーマーを開ける水平翼が展開されている ／3 ー秒毎の海上空を飛行するGフォートレス、写真ーUT社

ガンダムである特権:Gフォートレス

Gフォートレスは、ダブルゼータ・ガンダムのモビルアーマー形態とも言える、変形後の飛行特化形態である。

コア・トップ、ネオ・コア・ファイター、コア・ベースの3機が連結した構造であり、頭部のハイ・メガ・キャノンを除いて、モビルスーツ形態の武装のほとんどをそのまま使用できる重爆撃機・重戦闘機として有効に用いられた。

初代RX 78 ガンダムのGパーツ構想を含め、システムをブラッシュアップして、より完成度の高いものに仕上げられている。一部の可変モビルスーツを除いては、大気圏内飛行には未だにドダイ改などのサブ・フライト・システムに頼っているのが現状であり、本機の合体変形機構や搭載された豊富にして強力な火器は、その高コストと犠牲にされたメンテナンス性も含め、いわば"ガンダム"を名乗るモビルスーツだけに許された優越であり特権であった。

大気圏内を飛行するレフォー
ス ノ ク ワと脚部内蔵
の計4基の「スルカっ 巨体を
動力飛揚 させる推力が生み出
される 写真＝UT社

技術の総決算として

Terminal point of fat technology

By MASAYA TAKAHASHI マサヤ・タカハシ

マサヤ・タカハシ
U.C.0061年11月30日生まれ。リーマ在住。ジュニアモビル[illegible]者。
ジャーナリストパイオニアール[illegible]学中の"一年戦争"時に目撃し[illegible]
能を受け、アマチュアのモビルスーツ製作集団"Strömen Sie[illegible]
[illegible]『ホビー・リーフ』誌で活躍、同誌の記事をまとめたU.C.[illegible]
ニアモビルスーツ製作解説書『How to build Mobile Suit[illegible]
製作者たちに衝撃を与えた。また後のジュニアモビルスーツ大会[illegible]
ようなMS[illegible]"一年戦争"でのジオン公国軍モビルスーツ・パ[illegible]

[illegible]S戦記』などのコミックの原作にも携わっている。綿密な調査資料
[illegible]役"末期に起こったと伝えられる「連邦軍教導団叛乱事件」を
[illegible]『ガンダム・センチネル』の著者としても知られる。現在はモ
[illegible]著し、ジュニアモビルスーツのカスタマイズ／チュー
[illegible]ーツ全般のメカニズムに対して造詣が深い綿集記
[illegible]にあたる汎連邦C級モビルスーツ・ライセン

[illegible]機体設定本稿が執筆された時期は[illegible]現在で使われている「現在」とは[illegible]U.C.0096を指します。本誌への掲載にあたっては執筆者の意思を尊重し、
その内容と文章には一切の改訂を加えておりません。そのため、一部の記述については情報が古い部分もあることをあらかじめお断りさせていただきます。

絶対防御:"地球防衛"への選択

U.C 0079年に開戦した人類史上初の"宇宙戦争"である「一年戦争」開戦当初、ジオン公国を名乗ったサイド3軍によって行われた地球降下作戦に対し、侵攻地点への迅速かつ有効な反撃戦力の結集を行えなかった地球連邦軍は、これを大きなトラウマとして抱えていた。

また戦後も地球上に残存したジオン公国軍部隊による重武装のゲリラ的テロ活動の脅威が予想されたこともあり、地球上での連邦軍戦力の緊急展開能力の向上(即時反撃能力の整備)をはかるべく、戦力整備計画を発動した。この結果が、モビルスーツ部隊を搭載したガルダ級輸送機による「航空艦隊」とも言うべき部隊の常時航空哨戒体制の確立と、後に"ゼータ・ガンダム"と呼ばれるモビルスーツに代表される「全地球到達任務MS」の実現へと開花していく。

これらの部隊や機体はいずれも「地球防衛」を目的とするものであり、「防御」を旨とする。地球連邦軍はその目的に「地球と地球市民を守る」(後に"地球圏"と修正される)ことを掲げているため、(それが単なる建前か否かはともかく)「一年戦争」開戦前から維持されていた宇宙艦隊の艦艇や、開戦後に作戦上の必要性が生じたために開発されたソーラ・システムなどといった例外はあるが、実は現在に至るまで「攻撃」兵器体系を正規に開発したことはないのである。

さて、「防御」には大きく二つの考え方がある。一つは航空艦隊や全地球到達任務モビルスーツを生み出す基盤となった「緊急展開/即時反撃」。つまり敵の侵攻地点もしくは侵攻予想地点が確定した段階で、すみやかに戦力を展開して侵攻軍を殲滅もしくは撃退するという、いわば「時間と空間の防御」だ。

他方、あらかじめ敵の侵攻目標地点に強力な反撃力を配備しておく「拠点防衛」、つまり「地域の防御」という考え方も存在する。

結論を急ぐならば、後に"ダブルゼータ・ガンダム"と呼ばれるモビルスーツは、この2番目の防御思想に端を発し、開発された兵器だといえるのである。

"動く要塞"への挑戦

「一年戦争」後(一説には「一年戦争」末期)に発動された連邦軍の戦力整備計画は、前述の連邦軍内に残る"トラウマ"によって、「緊急展開/即時反撃」能力の向上に重点が置かれていたが、一方で「防御が必要な重要軍事拠点の数が少ないからこそ、重点防御をするべきである」という考え方もまだ根強く残っていた。前者は「絶対的な人的資源の不足による兵員数不足」を根拠に挙げ、また後者は「"一年戦争"の戦禍によって、もはや防御が必要な地球上の重要軍事拠点の数は限られたものになっている」という点において説得力を持ち、どちらも互いの意見を完全に退けるまでには至らなかった。

「拠点防御」推進派とでも呼ぶべき人々は、「一年戦争」当時にはほぼ出番がなかったものの、ジャブローなどで連邦政府や軍高官の間近にあった。工兵科の要塞建設などの築城術の専門家や砲兵科の長距離大口径砲(実体弾)信奉者が中核たったと言われている。「一年戦争」で実戦を経験した宇宙艦隊出身者が中核を成した「航空艦隊」推進派や、モビルスーツ信奉者が中核を成した「全地球到達任務モビルスーツ」推進派と対比すると当時の連邦軍内の権益構造が見透かされて興味深い。

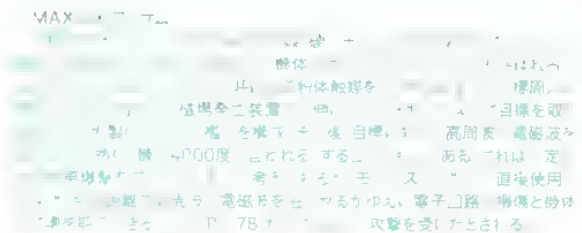
さて、要塞や長距離大口径砲は自ら動くことは出来ない。この至極単純な理屈が「拠点防御」推進派の"限界"であった。つまり「拠点防御」の思想が連邦軍内でいくばくかのイニシアチブを握るためには「拠点防御」の重要性を再認識させなくてはならず、そのためには新たな兵器体系を模索/構築する必要性があった。

幸いにして「拠点防御」推進派は先述のように連邦政府や軍高官の一部と間近にあったことから、それらのバックアップのもとに新たな拠点防御兵器体系を模索する委員会を設置することに成功した(とは言え、これはごく私的かつ小規模な「研究会」に過ぎなかったようだ)。この「研究会」(その名称や構成メンバーなどは当時の電子記録が失われているため定かではない)が注目したのは、「一年戦争」時にジオン公国軍によって使用されたMAX-03 "アッザム"と呼ばれる移動砲台であったという。

現在ではモビルアーマーの原点とされ、一説には月面探索ポッドもしくは移動式対地攻撃兵器をベースにしたとも伝えられる"アッザム"は、「移動砲台」の名の通り、機体の周囲に2連装メガ粒子砲塔(一説には火薬式砲とも言われる)を8基(総砲門数16)装備し、8基のホバーエンジンによって「自分で動ける砲台」だった。機体サイズとその重量から考えてホバーエンジンのみで飛行および移動すると考えるのには無理があることから、現在ではミノフスキー・クラフトが採用されていたと考えられている。

また、一年戦争末期のソロモン攻略戦においては、司令官のドズル・ザビ中将自らが座乗してMA-08 ビグ・ザムが出撃し、要塞内に進入するジムやボールからなる突入隊に多大な損害を与えたばかりか、ティアンム艦隊の旗艦を撃沈するという戦果を挙げた。アッザムにしてもビグ・ザムにしても、本来とは異なる運用をされてはいたが、「拠点防御」推進派にとっては「要塞や長距離大口径砲は自ら動くことはできない」という常識を覆した機体だったのだ。

今となっては断片的な情報から推測する他はないが、推進派はこれら"拠点防衛"に使用されたモビルアーマーのアップ・トゥ・デート版とも言える兵器体系を構想して研究に着手した



と考えられる。しかし、連邦軍戦力整備計画において、これは比較的実現性の高い、既存のモビルスーツを部隊編成して搭載した大型輸送機による「航空艦隊」案か優勢であり、全地球到達任務モビルスーツ」案ともども隅へ追いやられる格好となった。現存するラフスケッチによると、提案された兵器は全高40メートルほどの巨大な単純箱型の機体を多数のメガ粒子砲やビーム砲で武装した、正直、馬鹿馬鹿しいとさえ思えるものである。「兵器の機能的デザイン」という視点からでも、これほど単純で「分かりやすい」ものはないだろうし、恐れずに言うならば「凡庸すぎるほど凡庸」だ。しかし最も注目に値するのは描かれているラフスケッチではなく、その片隅に殴り書きされた、この兵器の名称もしくはカテゴリーと思われる「モビルフォートレス(機動要塞)」という文字であろう。

"ティターンズ"の後ろ盾

「一年戦争」後の連邦軍戦力整備計画において主流から外れることになったものの、「拠点防御」推進派は新たな拠点防御兵器の研究開発を細々とではあるが続行していたようだ。ここから先はほとんど現存する記録がなく、連邦軍ならびに連邦政府から情報公開されていないため断片的な情報に基づく推測になるが、ある時期(一説ではUC0084年ころとされる)に「拠点防御」推進派は大きなバトロン"を獲得、モビルフォートレス」の研究開発体制は[illegible]化することとなった。そのパトロンとはティターンズ最高司令官の[illegible]ミトフ・ハイマン大将であったとされる。「拠点防御」思想と「地球を守る無敵の巨大移動要塞」という子供じみた夢想的イメージはシャミトフ・ハイマン大将の地球至上主義と合致したようで、「モビルフォートレス」構想以前から、実戦能力よりも政治力に長けたいわゆる「戦時シャブロー組」の多い「拠点防御」推進派の連邦軍高官とは気脈を通じていたとも言われる)、その研究開発の拠点は連邦軍ニュータイプ研究所の一つであり、"ティターンズ"の息がかかったムラサメ研究所"に置かれた(当初はオークランド研究所に置かれていたという説もある)。

この「モビルフォートレス」の開発は順調に進んだ模様である。それも道理、もともとがジオン公国軍のモビルアーマーに想を得て、それを拡大発展させたものである。運用方法もそれらと大差ないものが想定されていたのであろう。早くもUC.0084後半あたりの時期に、北米の連邦軍試験場でそれらしきものの目撃報告がある(この北米での目撃報告が、当初はオークランド研究所に研究開発拠点が置かれていたのではないかという説の根拠となっている)。

さて、開発初期の「モビルフォートレス」は連邦軍戦力整備計画検討会議の際に提出されたラフスケッチ通りの箱型の機体で、ガンダリウム合金が使用されていたようだ。武装は拡散パターン型の大型メガ粒子砲が3基で、機体中央に縦一列に配置されていた。さらに近接戦闘ならびに近距離支援用の[illegible]ム砲が10基ほど装備されていた模様である。▶▶

14これは、一年戦争終結後に連邦軍によって発掘されたMAX-03 アッザムとされる写真である。発掘は受け取った情報得後ですぐこれが"当たり"とは見抜けず、「奇妙な機体が埋まっているので、くらいに扱われていたという。

移動に際してはいまだ最高機密の技術である"ミノフスキー・クラフト"が採用され、機体下面に設置されたスラスターの噴射との併用で全備400トン近い重量を浮上させる。水平方向の移動は背面のスラスターで行なうが、鉛直、水平方向ともその移動速度は「機動」と言うには絶望的なものであったという。もっとも名称で「モビル＝機動」とうたっていても、この兵器体系自体が「機動戦闘」を意図したものではなく、その用兵上、移動速度は「とにかく移動できればいい」程度の要求しかなかったため、移動の緩慢さは取り立てて問題にはならなかったようだ。また防御性能については、機体に使用されたガンダリウム合金の優れた耐弾性能のみならず、これも最高機密の技術である"Iフィールド"を展開することでビーム兵器を無効化するという。

現存している資料によれば「モビルフォートレス」は敵の侵攻が予想される重要拠点に配置され、敵の侵攻が開始されるや敵侵攻軸正面に自ら移動して展開。敵が自兵装の有効射程に到達する前に、アウトレンジから3基の大型メガ粒子砲によって掃射し、殲滅するという戦闘パターンを想定していた。その移動力はもっぱら機体正面に装備された3基の大型メガ粒子砲の射角を機体ごと変更するために用いられる。このため緩慢な移動性でも支障はなかったのである。この射線変更時のタイムラグなどによって運悪く大型メガ粒子砲の射線に捉えることができず、機体に近接してきた敵に対しては、近接戦闘用の10基のビーム砲が各個撃破をはかるとされていた。

ある意味"前時代的"な兵器体系であったがゆえに「モビルフォートレス」はスムーズに実戦配備が行なわれると思われたが、「航空艦隊」推進派および「全地球到達任務モビルスーツ」推進派からその近接戦闘能力を疑問視する声が上がった。正直なところ、予想外に順調に進展している「モビルフォートレス」に対し、予算を巡る攻防から、反目する両派閥から"いちゃもん"がつけられたと言っていいだろう(この「予算を巡る足の引っ張り合い」は、「一年戦争」後の連邦軍内の兵器開発には常につきまとっている問題である。それゆえこの時期は独自の資金源を持った"私兵"的な組織の台頭や跳梁を許し、また、そのような組織が装備する兵器群と連邦軍本体が制式装備する兵器との大きなコンセプトの差異や性能差が見られるのだが…)。

ここで提示された両派の反論の骨子は、

1：「モビルフォートレス」は"ミノフスキークラフト"を含む推進系機器の配置の関係上、その主要兵装たる大型メガ粒子砲を機体中心軸上に垂直に3連装せざるを得ない。いかに自らの機動力を用いて射界を適宜変更しつつ拡散照射をするとは言え、侵攻兵力を自機に近接せしめる以前に殲滅するのに十分とはいえない。

2：仮に「モビルフォートレス」に複数の近接戦闘用ビーム砲を装備させても、その運用には多数のオペレーターによる火器管制が必要である。本体の機動も含め、数人のオペレーターでは明らかに人智を超えた処理能力が要求されると思われ、その兵装の的確な使用は非現実的と言わざるを得ない。

3：侵攻兵力が何らかの高速移動が可能な手段を使用した場合には、「モビルフォートレス」の現計画上の移動力では自機に容易に近接を許すものと思われる。いかに超々合金(注"ガンダリウム"系合金のこと)やビーム兵器無効化の試み(注"Iフィールド"のこと)を採用しているとはいえ、その際の対抗戦闘能力は万全とは言えない。

この指摘はいちいちもっともである。コンピュータの補助等で運用そのものは可能であっても、「拠点防衛」推進派は3番目の懸案に対する反論を見いだせなかった。そこで、「モビルフォートレス」の近接戦闘能力の向上が企図された。

トランスフォームか、システム化か?

「モビルフォートレス」の近接戦闘能力向上案には、幾つかの試案が提示されている。その一つが「モビルフォートレス」に近接戦闘用ビーム砲の装備をやめ、周囲に格闘戦を想定した護衛用モビルスーツを配置するというものであった。この護衛用モビルスーツは戦闘時には「モビルフォートレス」に有線接続されて近接戦闘を担当する、いわば「随伴機(子機)」である。各個のモビルスーツが独自判断で戦闘行動できるため、「モビルフォートレス」側のオペレーターの負担は確実に減少すると同時に、「格闘戦能力の向上」にも十分に対応した現実的な選択と言えた。

有線接続という形は戦闘濃度のミノフスキー粒子散布下の戦場でも本体である「モビルフォートレス」、もしくは(親機を通しての)「随伴機」同士での連携連絡が十分に行える。当初、「随伴機」には当時の連邦軍主力モビルスーツである"GM"系の専用改造機[5]が想定されていたようだ。

さて、「モビルフォートレス」と随伴モビルスーツとを有線接続するという形態は、重度の無線通信障害環境下での互いの連携連絡の確立だけでなく、「モビルフォートレス」側の大きなジェネレーター出力を随伴モビルスーツ側でも使用できるというメリットを生んだ(もちろん有線接続のデメリットは互いの移動範囲の制限である)。つまり随伴モビルスーツ側では、その設計仕様出力以上の過大なエネルギーを利用できるわけだ。

そこで浮上してきたのが、この余剰エネルギーを利用した大型メガ粒子砲を「随伴モビルスーツ」に装備するという案である。これにより、「随伴モビルスーツ」自体は有線接続されて

「シャミトフ・ハイマン」(記・編集部)

いる範囲内で自由に動けるわけだから、大型メガ粒子砲の射界構成の自由度は飛躍的に高まることになる。

この「モビルフォートレス」に有線接続された「随伴モビルスーツ」構想こそが後に"ダブルゼータ・ガンダム"と呼ばれるようになる特異なモビルスーツの原点と思われ、現在でも数々の疑問点が提示されている設計思想の特異性(機体のほぼ全てのエネルギーを一斉射で消費してしまう頭部内蔵の大型メガ粒子砲装備など)を解き明かすキーポイントであると思われる。

だが、「モビルフォートレス」に固執する"拠点防衛"推進派は、「モビルフォートレス」計画を成立させるために、最終的には基礎研究段階に進んでいた「随伴モビルスーツ」構想を捨てざるを得ない経緯をたどることになる。

UC0085年、「モビルフォートレス」に、兵器体系としての根本的な方向転換を余儀なくされる出来事が起こる。オークランド研究所で提案された「トランスフォーム(可変)」コンセプトと、それを実践した可変モビルアーマー、NRX 044 アッシマーの登場である。

「局面に応じて飛行に最適な形状から、機体構成要素を連続的に組み替えて、汎用性に富む人型形状へ機体を変化させる」という、モビルスーツ信奉者と「全地球到達任務モビルスーツ」計画が生み出したコペルニクス的転回とも言えるコンセプトは、近接戦闘能力の向上を求められた「モビルフォートレス」へも適用が検討された(これもまた「モビルフォートレス」の開発拠点が当初はオークランド研究所に置かれていたという説の根拠になっている)。つまり攻撃と防御に優れた単純箱型の「モビルフォートレス」に、近接戦闘能力を持たせるべく人型＝モビルスーツへの変形機構を盛り込もうというのである。そして、これこそがすでにお気づきの通り、「グリプス紛争」におけるUC0087年のあの悪夢のようなニューホンコン・シティの惨禍を招いた巨大モビルアーマー、"サイコ・ガンダム"へとつながっていくのである。

結果的には「モビルフォートレス」の近接戦闘能力向上案はトランスフォーム・コンセプトが採用されたわけだが、そこにいかなる力が働いたのか、どのような開発経緯をたどったのかは、残念ながら現在に至るまで一切不明である。ただ、反対勢力の推進する「航空艦隊」構想や「全地球到達任務モビルスーツ」構想のいずれにしても、連邦議会による承認を得る必要があり、議会記録や予算分配表からは、それらの勢力の"足の引っ張り合い"ともいえる牽制の応酬が垣間見える。

事実として判明しているのは、"サイコ・ガンダム"の開発主体はムラサメ研究所であること、近接戦闘用ビーム砲はモビルスーツ形態に変形した際の"指"にあたる部分に仕込まれたこと、モビルスーツ形態が"ガンダム"に酷似した形状をとること、"サイコ・ガンダム"という名で呼ばれ、「モビルフォートレス」は同機の"モビルアーマー形態の呼称"と定義されたことぐらいである。ただし、ここまで本稿で推測してきた開発経緯が正しいとすれば、同機は本来はモビルスーツでもモビルアーマーでもない、「モビルフォートレス」という別個の兵器体系であることを指摘できよう。

武器体系として再構築

それでは「随伴モビルスーツ」構想はどうなったのだろうか？　こちらも現在に至るまで詳細は明らかではないが、断片的な情報を整理すると先述の通り、当初は当時の主力モビルスーツであったGM系もしくはその改造派生型専用機に、「モビルフォートレス」の大型メガ粒子砲の火力に匹敵する大出力メガ粒子砲と増加装甲から成るウェポンシステムを装備する計画であったようだ。

このウェポンシステムは、後に"ダブルゼータ・ガンダム"として知られるようになるモビルスーツのオプション兵装である「フルアーマー」システムの原点と言えるかもしれない(本来の、いわゆる「フルアーマー」システムの構想そのものはRX 78　ガンダムへの適用を前提としたものが「一年戦争」時から存在していたともいうが定かではない。サイド6在住の読者ならご記憶の方もいらっしゃると思うが、「一年戦争」末期、このサイド6に潜入して破壊工作を行っていたジオン公国軍特殊部隊を撃退したRX-78系の機体がこれに類似した装備を有していたという情報もあるが、残念ながら現在も公式記録は開示されていない)。

ただし、このウェポンシステムの大出力メガ粒子砲は、後の"ダブルゼータ・ガンダム"の「フルアーマー」システムと異なり、装備したモビルスーツ側からではなく、有線接続された「モビルフォートレス」側からエネルギー供給をうける。そのためウェポンシステムを装備するモビルスーツのジェネレーター出力は問わないというメリットがある。その反面、大型メガ粒子砲や増加装甲は無重力/無重量下でない限りは重量がかさむため、装着したモビルスーツの機動力を著しく低下させることになる(注 質量の総体的な増大は無重力/無重量下であっても機動性の悪化を招くが、そもそも「モビルフォートレス」は地球上の重要拠点防御のための存在なので地球重力圏下(1G)での使用を前提として論を展開する)。このため「随伴モビルスーツ」の本来の目的である、「モビルフォートレス」に接近した敵モビルスーツとの近接戦闘の際には、このウェポンシステムを離脱、放棄しなければならない。これでは本末転倒である。

そこでこの「随伴モビルスーツ」は、標準的なサイズの機体内に大出力メガ粒子砲を内蔵(!)すると同時に重装甲を施し、それらから生じる過大な重量を支えてなお敵モビルスーツとの機動戦闘が行える機動性を有した専用機とすることが決定される。想像通り、この機体の開発は困難を極めた。以下の開 ▶▶

発経緯は、断片的な情報を筆者が再構築したものである。

UC 0085年の中ごろ、まず最初にGM系の改造機にウェポンシステムを装着したテスト機が作られ、この結果、地球重力圏下(1G)で運用するためには、従来機のフレーム構造(特に脚部構造)では自重を支えきれないことが判明した。このため脚部を中心とした構造改修が数次にわたって行なわれたが、もはや改修というレベルではこの問題は克服できないという結論に達する。この経緯から"次期ガンダム"として開発されていたモビルスーツの構造を新たな「随伴モビルスーツ」のテスト機の母体とすることが決定される。おそらく、ここで言う"次期ガンダム"とはRX 178 ガンダムMk Ⅱのことと思われるが、この時期は軍上層や研究所、民間企業を問わず"次期ガンダム"開発に熱心だったため、別の機体であった可能性も否定できない。

この"次期ガンダム"の構造を母体とした 随伴モビルスーツ」テスト機は相応の開発成果を挙げたものの、機体内に大出力メガ粒子砲を内蔵しつつ重装甲を施し、それらから生じる過大な重量を支えてなお敵モビルスーツとの機動戦闘が行える機動性」を実現するには無理があった。なお、このテスト機による開発データは、RX 178 ガンダムMk Ⅱに支援兵器のFXA 05D Gディフェンサーを合体運用させる"Mk Ⅱディフェンサー(通称"スーパーガンダム")"の構想と開発に転用されたようだ。

ここまでの開発テストにおいて明らかになっている問題点は、依然として著しい機動性の低下であり、特に地球重力圏下(1G)での運用は絶望的とも言えた。これを克服するためには、まずはジェネレーターの小型軽量化が急務である。これは後に説明する合体・分離システムの採用によって克服されることになる。また、内蔵する予定の大出力メガ粒子砲については、連邦軍得意のエネルギーCAP技術に心酔するものとされたようだが、これが後に混乱を引き起こすことになった。結果的に言えば、この時点でティターンズ主導による地球連邦軍の「随伴モビルスーツ」計画は頓挫、モビルフォートレス」が"サイコ・ガンダム"として成立したことから、UC 0087年初頭に計画は放棄されたものと見られる。

開発主体はアナハイムへ移行

さて、ティターンズ主導による「地球連邦軍としての開発計画」は放棄されたものの、この「随伴モビルスーツ開発計画に参加していた民間企業、アナハイム・エレクトロニクス社は本計画の一切を受け継いでいた。その真意は、同社が推進していた"次期ガンダム"開発計画のためと推測される。同社は民間企業というスタンスから、常に自社の技術水準を示すフラッグシップ機(旗機)の開発を宿命づけられていた。「地球連邦軍のフラッグシップ・モビルスーツは"ガンダム"である」との認識から、アナハイム・エレクトロニクス社は"次期ガンダム"開発に従前から並々ならぬ意欲を見せており、一説にはUC 0083年ごろに"ガンダム"と称した各々異なる4タイプのモビルスーツを地球連邦軍にプレゼンテーションしたこともあったようだ(驚くべきことに、この4機は実戦投入されて対戦したという軍関係者の間でのまことしやかな噂話もあるが、公式記録はどこにも存在しておらず、事実か否かは確認されていないが、採用されずに終わっている。ここであえて アナハイム・エレクトロニクス社による"自称"ガンダム」と位置づけたのは、本来、"ガンダム"という名称は地球連邦軍からの正式発注のもとに制式採用されたモビルスーツに与えられるものだからである。つまり、U.C 0087年の"グリプス戦役"の際にエゥーゴによって使用されたMSZ 006 ゼータ・ガンダムは"ガンダム"と呼称されるものの、原理原則にのっとれば、実は同機を開発・製造したアナハイム・エレクトロニクス社ならびにエゥーゴの 自称」ということになる。この"事実"は、「ダブルゼータ・ガンダム」という名称が付与される経緯に重大な影響を持ってくる。

そもそも地球連邦軍によって モビルフォートレス」の有線式護衛・支援用随伴機として開発が始まったモビルスーツは、この時点からアナハイム・エレクトロニクス社による 次期ガンダム"開発計画へとシフトした。標準的サイズの機体内に大出力メガ粒子砲を内蔵しつつ重装甲を施し、それらから生じる過大な重量を支えてなお敵モビルスーツとの機動戦闘が行える機動性を持つ」という途方もなくオーバースペックな目標は、"次期ガンダム"開発にそのまま適用してもまったく問題なかった。

開発主体がアナハイム・エレクトロニクス社に移行した後も、このモビルスーツが抱えていた根本的な問題(=大きく重いジェネレーターと機体構造の脆弱性)は解消されなかったが、UC 0087年の"グリプス戦役"でエゥーゴから同社にもたらされたRX 178 ガンダムMk Ⅱの機体情報は、その開発計画を大きく進展させることになる。

RX 178 ガンダムMk Ⅱに採用されていたムーバブル・フレームは、連邦軍内からの断片的流出情報によってアナハイム・エレクトロニクス社が自主開発していたものより格段に優れており、これを徹底的に研究して改設計された機体はその構造、特に負荷のかかる可動部の強度を飛躍的に向上させた。MSZ-006 ゼータ・ガンダムが主にトランスフォーム・コンセプトの実現のために同機のムーバブル・フレーム情報が利用されたのに対し、後に"ダブルゼータ・ガンダム"と呼ばれることになるモビルスーツには、機体構造そのものの強化に役立てられた点は興味深い。

この「ムーバブル・フレーム版」とも言うべき機体の設計をもとに試作機が作られたが、その外観は後に"ダブルゼータ・ガンダム"と呼ばれることになるモビルスーツに、いわゆる"フル

ンム・スナイパーII」(記事編集部)

大戦末期に少数が生産され 実戦投入されたと言われる ム スナイ
ヨ時期も研究の進んだ 完成度の高い 機体だ たとされてる

終戦直前の混乱期でもあり その詳細は今も "明らかではない たか 我
アモ民にとって は ガンダム のように王目すべき謎に包まれたモビルス ツである

、0079年 ポ コロニ に オンの重武装モビルス ノが出現した事件を覚えて るだろうか の時 そのモビルス 体は ガンダム とされる機体に 撃退されて る ところが この件は伝説化したコロニー内戦闘の折 カ 持ち込まれる機体は外にも 数機のモビルスーツが迎撃に出撃したようなのだ。

の時 任務中 まだ 学生 カメラによって一部始終 不鮮明な画像を 新聞に掲載された ような 情報と照ら 合わせた結果 この ム スナイパーIIに似てる とうかが

本機の特徴は 長大な ビルを持つビーム ライフルと 腰部に装備された精密 動追ガンポ によ 遠距離射撃を行う点である。しかし 当該戦闘ではこの 銃 は見られず 代のモビオンモビル ノにはない 撃破されたとされる

アーマー"装備を施した仕様とほぼ変わりのないものだったという。つまり、この時点ですでに"ダブルゼータ・ガンダム"の機体概要は固まっていたのだと言える。これは異例の早さだろう。軍関係者の間の噂話というレベルではあるが、驚くべきことにこの試作機は16機が作られ、そのうち3機(残る3機はこれらのバックアップ用パーツとして解体)が連邦軍工廠衛星の災害時に別の試作機(これも"ガンダム"型と言われている)と共に出動、何らかの理由により全機喪失しているという説がある。

大出力メガ粒子砲に由来する混乱

従来、"ダブルゼータ・ガンダム"は頭部に装備したハイ・メガ・キャノンと呼ばれるメガ粒子砲の開発と小型化に手間取ったと言われてきたが、メガ粒子砲の開発そのものには技術的障壁は無く、また、そもそもの機体コンセプトがメガ粒子砲運用を前提とするいわば"メガ粒子砲キャリアー"的なものであったため、それによる開発の遅延は考えにくい。機体内にメガ粒子砲を内蔵するという技術は、すでに「一年戦争」時にジオン公国軍によって開発されている。開発遅延の理由に正確を期すならば、アナハイム・エレクトロニクス社がエネルギーCAP技術を持っていなかったことにある。

なぜこのような問題が起こったのかと言えば、そもそも地球連邦軍が本機の開発主体だったからに他ならない。今までの経緯を振り返っていただければおわかりの通り、開発主体が地球連邦軍だった時代からメガ粒子砲を内蔵装備することは既決事項であり、当然、機体そのものの開発に並行して内蔵装備用メガ粒子砲も開発の途上にあった。ここで想起しなければならないのは、かの「一年戦争」の時代から地球連邦軍はビーム兵器の開発に長じていたという点である。ビーム兵器関連技術は当然、連邦軍の極秘事項であり、民間企業に対する技術情報の開示も限定されていた。アナハイム・エレクトロニクス社は「一年戦争」後に吸収合併したジオニック社などから接収したり、自社に迎え入れたそれらメーカーの技術者からの情報によって旧・ジオン公国軍系のジェネレーター直結型のビーム兵器技術は手にしていたものの、当時の"第一線級"である連邦軍のエネルギーCAP技術を完全に手中にするには至っていなかった。この時期のアナハイム・エレクトロニクス社は機体こそ自社開発可能なレベルにあったものの、それが装備する兵器については連邦軍が提示した仕様に従ってその一部を製造していたに過ぎず、装備兵器の自社による設計開発はほとんど行っていなかったようだ。

製造されたモビルスーツは連邦軍に納入されてから武装されるため、連邦軍から設計開発の正規発注がない限り、民間企業が装備兵器についての技術情報に接する機会はない。これは旧世紀の軍用兵器開発のシステムを踏襲したものと言える。たとえば旧世紀の軍用機は、「指定の誘導兵器や銃器、爆弾などを装備できるように」という軍からの発注があるだけで、それらの装備兵器類は必ずしも機体を開発するメーカーが設計開発に携わったものとは限らなかったのである。つまり逆説的に「"ダブルゼータ・ガンダム"の内蔵装備用メガ粒子砲はアナハイム・エレクトロニクス社が設計開発に携わったものではなかった」と言えるだろう。内蔵装備用メガ粒子砲の設計こそ引き継いだものの、肝心のエネルギーCAP技術をアナハイム・エレクトロニクス社が完全に解明できたのは、これまた"グリプス戦役"においてエゥーゴが奪取したRX-178 ガンダムMk Ⅱの機体および装備情報(特に同機のビーム・ライフルの"Eパック")を得てからのことだと言われている。たとえるならアナハイム・エレクトロニクス社は「銃の作り方は知っていても、正しい弾丸の作り方を知らなかった」のだ。アナハイム・エレクトロニクス社の名誉のために換言すれば、「連邦軍という組織が表面的にせよ一枚岩だった"グリプス戦役"までは、民間企業が弾丸の作り方など知る必要はなかった」というわけである。

RX-178 ガンダムMk-Ⅱの機体および装備情報からエネルギーCAP技術を解明したアナハイム・エレクトロニクス社にとっては、50メガワット超の出力を発生させるエネルギーCAP(飽くまで自前で設計したと主張するアナハイム・エレクトロニクス社では"メガコンデンサー"と称する)の設計と製造は、技術的には造作もなかった。とは言え、同社にとってはまったく新たな試みであるため、メガ粒子砲とセットで機体に装備するまでには相応の時間を要した。その後の戦局の進展状況から絶対的火力と防御力を備えた本機投入の必要性が薄れたため、"グリプス戦役"には間に合わなかったのである。

ちなみに「1回発射したら機体自体が動けなくなる」「砲口が溶けるほどのオーバーロード状態状態に陥る」などと囁かれている本機のメガ粒子砲をめぐるトラブルの多くは、粒子縮退/昇圧器関連に集中していると思われる。粒子縮退/昇圧器が上手く機能しなかったために、ジェネレーターで発生させたエネルギーのすべてが昇圧手順を踏まずに一気にエネルギーCAPへ流入してしまったことから機体全体が機能不全に陥ったのだろう。また、昇圧上限を越えてしまったことから砲口が溶けてしまったのであろう。もっともこの両者のケースは、パイロットの機能理解の不備による操作ミスという人為的理由も大いに考えられるため、本機のメガ粒子砲の出力はパイロットによって任意に設定できる可能性が高い。だとすれば、本機のメガ粒子砲は最大50メガワットの出力(砲口が溶けてしまったケースから考えると50メガワットを超える緊急時出力が設定されている可能性が高い)を射撃対象物によって、25メガワット×2連射、10メガワット×5連射といったように任意に変更できる機能を備えていると推測できる。実際、連射が行われたという情報があることも付け加えておきたい。

従来、"ゼータ・ガンダム"も"ダブルゼータ・ガンダム"も

「サイコ・ガンダム」

エゥーゴの要求仕様にアナハイム・エレクトロニクス社が応えたものと言われてきたが、一つの「工業製品」として考えた場合、その構想～設計～開発～試作～製造という一連の過程のスケジューリングは明らかに間尺にあったものではない。「常軌を逸した」と形容してもよいほど短期間である。つまり両機とも「すでにアナハイム・エレクトロニクス社によって構想～開発されていた機体」であり、従来の説とは逆に同社の側からエゥーゴにプレゼンテーションされたものと考えた方が自然である。これは大胆な仮説かもしれないが、「エゥーゴの要求仕様にアナハイム・エレクトロニクス社が応えた」という話は、同社が"グリプス戦役"後の地球圏の政治情勢を鑑みて意図的に流布したものという疑いが強い。

合体・分離システムの考察

本機に導入された合体・分離システムの考察について、従来から研究家の間で最も争点となってきたのは"空中換装"を常態化した"合体"システムの有効性の問題であろう。

RX-78ガンダムにおいて導入された合体・分離システムは、厳密には上半身のAパーツ/下半身のBパーツを換装することによって戦局に柔軟に対応すること、そして「単独戦闘能力を付与されたコクピット」としての"コア・ファイター"による機体損傷時の脱出・生還率の向上を目指したものであるため、本機に導入された合体・分離システムとは基本コンセプトが根本的に異なる。

今まで断片的なデータをつなぎ合わせて推測してきた本機の開発経過から見れば、本機の合体・分離システムは、実際には"効率的な移動"を目指したものと考えられる。ここでもう一度、本機が「モビルフォートレス(後のサイコ・ガンダム)の随伴機として、後には主兵装として構想されたらしい」という経緯を想起していただきたい。

人型汎用機械すなわちモビルスーツの重大な特徴は、人型であるがゆえに地面移動では「歩行」「跳躍」といった手段をとることにある。しかしすでに構想当初の計算で、本機の過大な重量による脚部への負担は、これらの手段による移動を行わせることがほぼ不可能という結論に達したものと思われる。

しかしながら本機はそもそも地球重力圏下での使用を前提とされていた。そこで本機の移動には、分離した機体構成要素(パーツ)を個々に作戦地域まで自力で飛行させ、機体の展開地域で"合体"して組み立てる「ノックダウン(=現地組み立て)方式」とでも呼べる方法が選択されたのではないかと考えられる。これは"ご丁寧にも"本機のライフルの一部となる部分にさえ予備の有人操縦式コクピットが設けられていることからも伺えよう。"合体"による「ノックダウン方式」で移動能力の不備を補うコンセプトは、本機がトランスフォーム・コンセプト成立以前に企図された機体であることを間接的に裏付けるもの、そして一部に本機にも限定的な"ミノフスキー・クラフト"が採用されているという説の根拠となるはずだ。

仮にトランスフォーム・コンセプトの成立以後に企図された機体ならば、その移動は飛行に適したモビルアーマー的な移動形態で行い、作戦地域に到達したら人型モビルスーツ形態に変形すればよい。これが最も単純な"最適解"である。しかしながら本機の場合はバラバラのパーツで飛行し、それを"合体"という方法で作戦地域で組み立てる。これが本機がトランスフォーム・コンセプト成立以前に企図された機体だと推測される理由だ。

この"合体"作業を円滑に行わせるべく、各パーツを同一軸 ▶▶

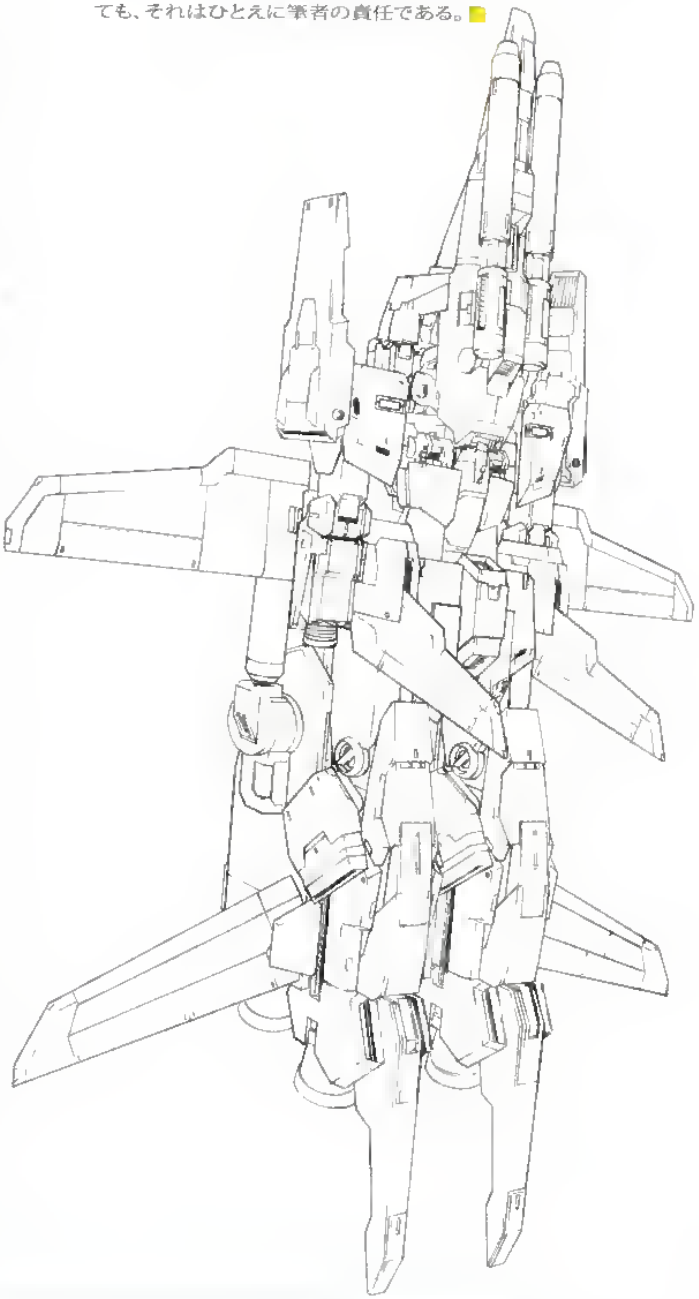
線上の任意の高度の空中に固定するためには"ミノフスキー・クラフト"の採用が不可欠であったと考えられるのである。"合体"にしても"ミノフスキー・クラフト"にしても、トランスフォーム・コンセプト以前から存在しているものである。"ミノフスキー・クラフト"の導入は「モビルフォートレス」の開発経緯との関連が見てとれて興味深い。もっとも、完成した本機では"Gフォートレス"と呼ばれるモビルアーマー的な移動形態が存在し、一気にモビルスーツ形態へトランスフォームさせることが可能となっているが、これは本機の開発途中でトランスフォーム・コンセプトが成立した結果と考えた方が妥当であろう。

また、本機への合体・分離システムの導入は、大出力メガ粒子砲の搭載と運用に由来する大出力ジェネレーターの小型化という問題にも起因していたようだ。本機を成立させる最大要件は大出力ジェネレーターだが、それを小型化する努力にも、おのずと技術的な限界がある。そこで複数のジェネレーターを連結することで当初の出力を得ようとしたようだ。乱暴に言えば、複数のバッテリーを直列に結合して総出力を上げるという考え方である(ちなみに並列での結合なら各々のジェネレーターの負荷が低減でき、運転時間が上昇する)。そのため本機を構成する各機体要素(パーツ)それぞれにジェネレーターが分割配置されたと思われ、これらが"合体"してジェネレーターが直列に結合されることでモビルスーツとしての所定の大出力を得ることにしたのであろう。

このコンセプトの機体への実装には、前述の通り連邦軍の開発したムーバブル・フレームの技術がもたらされたことで成立したが、それと同時に脚部構造の強度問題も解消されることとなった。当初検討された様々な試案からさらに発展し、実現不可能と思われたモビルスーツ単体での大型ジェネレーター運用、大出力メガ粒子砲の搭載を、ダブルゼータ・ガンダムは現実のものとし、完成したのだ。

本機は様々な紆余曲折を経て完成を見たことと就役当初のトラブルにより、いまだに"傑作"と呼ぶか否かの論が分かれる機体である。しかし、"ガンダム"と呼ばれる機体の中でも随一の重火力を誇るものであることには異論はないはずだ。そして、これを成立させるために試みられた様々な技術的努力は、まさに連邦軍と民間企業による技術の"総決算"といえよう。"総決算"である本機から、今後、モビルスーツがどのような方向に進化発展していくのか興味深いところである。筆者としてはモビルスーツはある意味、本機で"進化の袋小路"に入ったと思われるため、「小型」「軽量」「シンプル」「高機動」といったまったく正反対の方向性がキーワードとなってくると予想しているのだが…。

以上、本機の開発経緯、ハイ・メガ・キャノン、合体・分離システムについて駆け足で考察を試みたが、他の"ガンダム"系モビルスーツよりも一段と開示情報が少ないため、ここに記した内容の多くの部分が筆者による推測の域を出ない。後年、新たな開示情報によって本稿の大部分が訂正されることになっても、それはひとえに筆者の責任である。



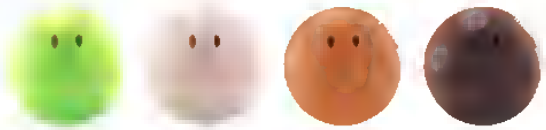
SUN Co..LTD.

HARO "Again"!

the Best friend Children's of U.C.

Mascot robot "HARO" of the SUN Co. is always by you not only under gravity but under minimum gravity.

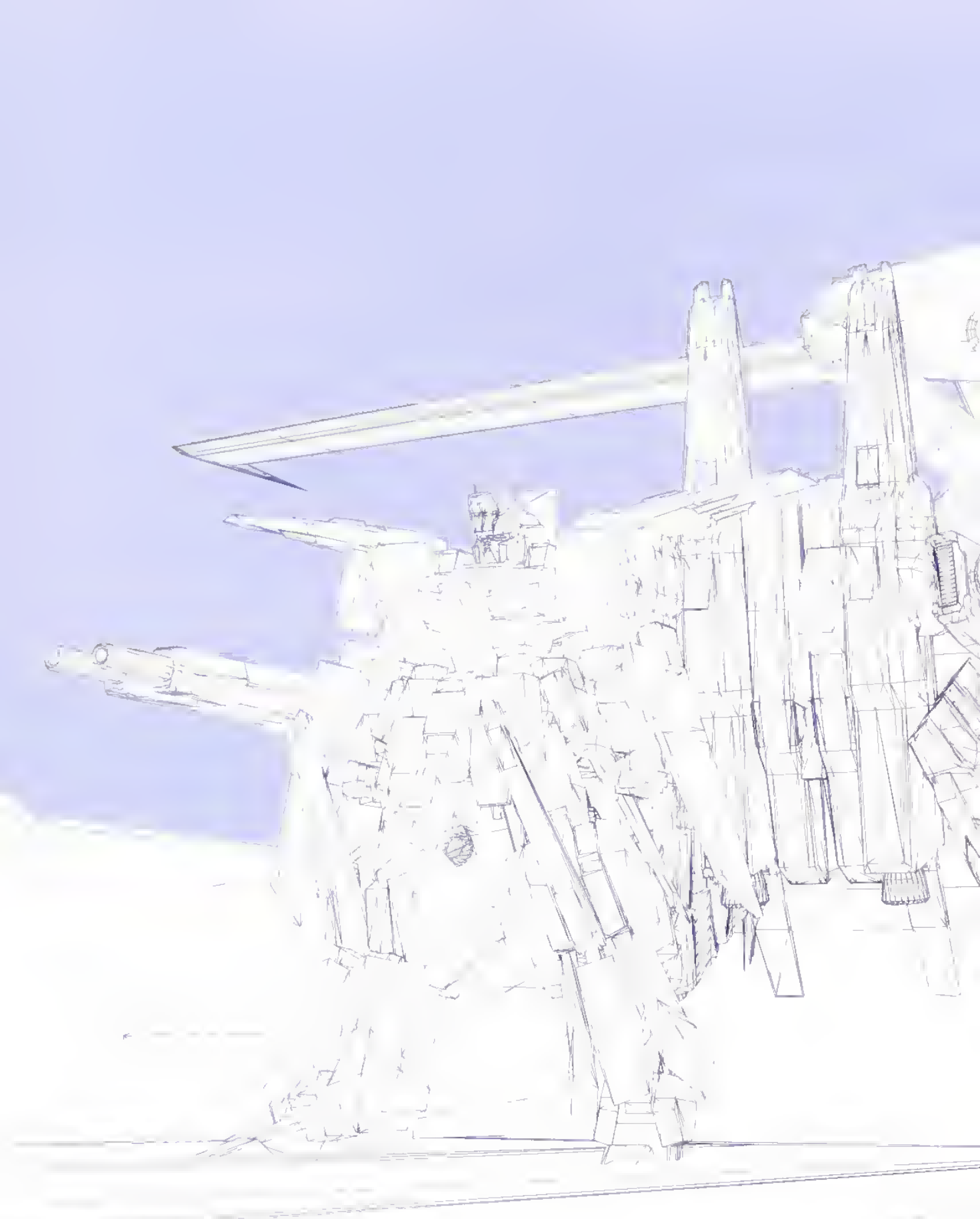
"Earth Color" Variations



"HARO" that keeps being loved long as children's "Best friend" flaps with a technological and dream wing in the next age.

This commodity can become purchase in a famous department store and the toy shop, etc. in the whole city of the colony.

check our site!



Test Case of Cutting Edge Technology

先端技術検証機としてのダブルゼータ

By SHINYA OGURA シンヤ・オグラ

1; World situation at the development

ダブルゼータ・ガンダム開発時の情勢

グリプス戦役。それはモビルスーツ開発史において進化の"カンブリア爆発"が起きた時期であった。黎明期である一年戦争当時の基本的な機体を第1世代とするなら、全周モニターやリニアシート装備の脱出カプセル型コクピットと駆動内骨格(ムーバブル・フレーム)構造を持つのが第2世代モビルスーツ。そして戦闘局面の変遷に対応する形態推移、可変機構をもつモビルスーツが第3世代モビルスーツとなるのだが、これら世代進展する機体の多くが実戦投入されたのは、グリプス戦役のあったUC 0087年の時期に集中する。

そしてグリプス戦役も終盤に差し掛かるUC 0088年頃には、高出力化による兵装の充実を求め機体規模の拡大拡張が行われ始め、NT(ニュータイプ素養者)操縦対応装備の第4世代モビルスーツの先駆けともいうべきジュピトリス製造のPMX 003 ジ・Oやネオ・ジオン(アクシズ)のAMX 004 キュベレイなどが登場する。

極右軍閥ティターンズ討伐に一応の目処が立つと、エゥーゴ首脳陣は必ず到来するネオ・ジオン(アクシズ)との対決を想定した戦略を迫られる。が、この頃には主力機MSZ 006 ゼータ・ガンダムの性能的優位性も失われつつあり、より強力な次世代旗機の導入が必至となった。

その裏には、グリプス戦役の渦中、ニューホンコンを焦土と化したある機体への恐怖があったといわれる。"モビルフォートレス"とも呼ばれるその機体、MRX 009 サイコ・ガンダムはエゥーゴとカラバが複数のエースパイロットを投入したものの撃墜には至らず、結果ニューホンコンへの類災被害は甚大なものとなった。この"サイコ・ガンダム・ショック"ともいうべき事態をエゥーゴ首脳陣は重く受け止め、第4世代モビルスーツを独自開発するアクシズとの全面対決を控えた彼らは、これに対抗できる性能を持った機体の導入を急務としていた。

そこで2計画の集大成として、アナハイム・エレクトロニクス社(AE社)内に既存の開発計画案を統合する形で構築された、当初θ(シータ)・ガンダムの開発コードで呼称された機体が、わずかな調整を施されてUC 0088年2月にロールアウト。3ヶ月後にはエゥーゴ艦隊旗艦アーガマに部隊配備され、就役時に"ZZ"(ダブルゼータ)を冠し、ダブルゼータ・ガンダムと名付けられて実戦投入されたのである。

シンヤ・オグラ
UC 0065年6月25日生まれ。フリーライター兼航空宇宙工学研究者。地球連邦総合大学院ア分校天文物理学特別講師、ツキム重工木星開発部門にて惑星間宇宙船の設計・建造に携わる。UC 0101年に独立、同年の『UC 0087 客船プロメテウス号墜落事故』の検証トキュメンタリーで解説者として注目され、以来特に『宇宙機としてのモビルスーツの機動』の研究発表で知られている。『サイコ・フレーム』、サイコミュによる多元量子通信と零点エネルギーの解放』のベストセラーに伴いさらに戦闘状況のモビルスーツについての研究に余念がない。

開発に至る経緯

2; Details to development

次世代旗機となるモビルスーツを短期に納入する必要から、Z計画の開発コード・MSZナンバーを得ているものの、取材によるとその機体コンセプトはグリプス戦役以前に遡る設計案に見ることができる。

その設計案は、"システムとしてのRX 78 ガンダム"への回帰が標榜されていたという RX 78は、コア・ファイターを文字通り"中核"として戦況の変遷に対応し、機体をカスタマイズするコンセプトで構築されたモビルスーツであり、追加兵装ユニット・Gパーツをフル装備連結したアーマー形態時には、作戦活動範囲の延伸に留まらず戦闘爆撃機として航空作戦任務も遂行できた それら機体システムの 機能的統合"をコンセプトにした設計案だったのだ

これに高出力の動力源搭載による強大な火力も要求仕様に追加される 噂の域だが、モビルスーツ単体での機載兵装として究極の火力ともいえる内蔵型ビーム砲(後のハイ・メガ・キャノン)の搭載は、顧客側の連邦軍上層部から出た"要望"に近い要望であったらしい 残念ながら起案されたUC 0080年代中頃には、未だ実現化する技術が確立されておらず、机上の空論として 塩漬け"にされてしまった

しかしUC 0087年末に情勢は一変する、Z計画の進展により技術的問題(※コラム参照)が解決の目算が立つと、エゥーゴの提示する要求仕様を充たす設計案として再評価されることとなった この時期は、ティターンズ打倒目前とはいえ、今後連邦軍との発展的統合を果す上でも、またシオン再興を目論むアクシズ軍勢との対決においても、エゥーゴの"理念の正当性"を顕示したいところであり、それを体現する意匠を機体に持つモビルスーツ"ガンダム"の再来こそが何よりも望まれた、それほどにエゥーゴ首脳陣は「新しいガンダムの到来」を"待望"、いや"切望"さえしていたのだ。

とは言えエゥーゴの要求仕様は難問である、想定される第4世代モビルスーツに対抗可能な攻撃・防御能力はもちろんのこと、ニュータイプ素養者の操縦においても卓抜した追従性を発揮、さらに(ここが一番の難関なのだが)運用面からの要望として全高20メートル以下の機体規模に留めるという条項が盛り込まれていたのだ。20メートルを超えてしまうと、当時エゥーゴが艦隊運用していたアーガマ級やアイリッシュ級などの艦艇への搭載はできず、配備は不可能となる。要約すれば「大火力」を「即応展開できるコンパクト化」された機体の実現こそがダブルゼータに求められた命題ということとなる。そのためのミノフスキー熱核反応炉、ジェネレーターのコンパクト化は絶対条件であり、ダブルゼータ・ガンダムかエゥーゴの望む次世代旗機として成立するか否かは、これら技術改革が不可欠であった

ダブルゼータの実戦配備時期を考慮すると、機体開発そのものはエゥーゴからの正式発注前に完成直前の段階にまで到達していたのだろう。その推定は初期開発コード名の"シータ・

ダブルゼータ・ガンダムの実用化を困難にした原因ついては、従来、技術的問題というのが定説となっている。その一例として、変形機構を組う機体フレームの強度面が挙げられているが、AE社が独自に試行錯誤を繰り返したダブルゼータ・ガンダムのフレーム強度は、実際はそれほど重視したものではなかったとする証言もある。確かに前述入手したガンダムMk-IIのムーバブル・フレームがもたらしたブレークスルーの影響は皆無ではなかろう。しかダブルゼータ・ガンダムについて残された資料の解析によれば、問題の変形機構そのものは、そのほとんどが単純な回転・スライド機構で為っとするのが現在の定説である。そして当時AE社に提供された軽量・高剛性の新素材「ガンダリウムγ」の恩恵もて当時既存のフレーム技術の応用があれば充分に実用化可能だとするのが有力説である。

ー ー ー 時期以前にも多様な技術検証機が用意されたし、それらは汎用性を含め試作機の域を超えた極めて優れた性能を示したと伝えられるからだ

そうした行為からは、常に最高の性能を追求したモビルスーツを造り続けなければならないAE社の宿命を垣間見ることができる。兵器の開発と生産が行為自体意義の企業にとっては永遠に満たし続ける必要のある命題だからだ

恐らくグリプス戦役中か、あるいはそれ以前に2機の分離合体形式としてMSZ-009が設計され、その1でMSZ-010 ダブルゼータ・ガンダムへと発展していったのであろう。そこには、前述のような企業理念はもちろん、AE社の内部に根付く"ガンダム"への回帰の強い意志と執念が見て取れる

たが"ガンダム"への道程は険しい。雛形とされたRX-78は上半身、下半身各々のパーツでの独立運用は不可能で、戦力の余裕なく防空戦にコア・ファイターを出動させる母艦ホワイトベースでは、本来想定仕様ではない"空中換装"という荒技的運用を、止むを得ず実戦中に実行したこともあるという。

シータ・ガンダムはこれを補完すべく、機体の変形システムを含んだ3機分離合体形式を最終的に採用することで実現したMSZ-009の2機分離を経て、最終的にはコア・ブロック・システムの利点を取り込むに至り、ついにRX-78 ガンダムが持っていたコンセプトを再現するに到った

加えてGパーツの概念さえも一機のモビルスーツ単体で体現したダブルゼータ・ガンダムは、活動範囲、展開能力に優れ、その性能からド・ダイ改などのサブ・フライト・システムに依らない航空作戦能力も獲得し、名実ともに"ガンダム"の名を継承したのである。

この機体開発の礎となったのは、小型化に成功したシェネレーターを3分割される機体パーツ個々に搭載できたことも貢献する。この3機分のジェネレーター出力の連結で得られる瞬間的、かつ膨大なエネルギーこそ、ダブルゼータ・ガンダムの代名詞ともいえるビーム兵器「ハイ・メガ・キャノン」に必要不可欠なものであった。この仕様をもってダブルゼータ・ガンダムは、"ガンダム"と呼称されるモビルスーツがその形態時に戦艦級の火力を有する、初の"重モビルスーツ"として成立した。

折しも、グリプス戦役は終盤を迎え、エゥーゴの名立たる多くのパイロットたちを喪失していた頃。結果的に、AE社はZ計画の一環として2つのガンダムを、かつてホワイトベースを指揮したブライト・ノアが艦長を務めるアーガマへと納入した。ほぼ同時期に実戦配備されることとなった2機のガンダムには、等しくZ(ゼータ)の文字が用いられた。開発コードをシータ・ガンダムとするこの機体には、ゼータ・ガンダムを超えてほしいとの期待を込め、ZZ(ダブルゼータ)、ダブルゼータ・ガンダムと命名されたのだ。▶▶

3; Delicate, bold airframe

繊細にして豪胆な機体

驚愕するほどの高出力・高性能兵装を数多く持つ本機であるか。中には仕様そのものが疑問視される兵装も多い。以下、その装備について取り上げる

ハイ・メガ・キャノン

（出力50メガワット）

その際たるものは頭部装備の「ハイ・メガ・キャノン」だろう。出力50メガワットの威力は絶大で。モビルスーツ機載ビーム兵器としては艦砲を遥かに越えて当時最高記録ではあったが、この出力が"仇"となる。配備初戦での事例であるか、発射後に機内電力を著しく損耗、連射できないどころか作戦中"起動停止"に陥り、機能回復に数分を要すると言う顛末となる。これが仕様なら"致命的"で、そのためか就役後、幾度となく改修を重ねたと記録されており、頭部に目立つように設置されていることも含め。良くも悪くも本機の象徴的な装備となった。

これが頭部（額部）に配置された理由については記録がない。推測として。一つは設計時、形態遷移（変形）の機構上。他の内部機構に干渉せずにこの規模の装備を配置できたのが"頭部"だけだったというものがある。つまりそこしか場所がなかったという理由だ。次に機体全体の中で旋回砲塔として機能するのが"頭部"だけだったこと。ビームの照射時間が長く取れる場合には、首振りで照射角（照準）を微調整して命中させることができる。もう一つは。目立つ箇所に大口径砲を装備することにより、敵戦力に対する"威嚇"効果が期待されることであろうか。

ビーム兵器として検証すると、機内ジェネレーターが供給する大電力から新開発のメガコンテンサーか凝縮、高密度状態のメガ粒子を開放する広域エネルギー放射兵器。その威力は、出力50メガワットとモビルスーツ機載兵装としては最大で、これは"宇宙世紀最大の戦略兵器"コロニーレーザー"の約20パーセントにあたる。凝縮過程後充填して発射する構造のため。連射が困難な理由と同様にこの出力以下に絞って発射することは不可能だが、またその必要もなかった。なぜなら本機は各出力段階に応じた数種の専用ビーム兵装を同時に携行できるからだ。

ハイ・メガ・キャノンの有効射程については、強力な出力に比較すると広域とは言え短射程であったようだ。機体規模やメガコンデンサーの耐久力、照射持続時間から推測するとせいぜい60マイル程度であっただろう。もちろんその範囲内での破壊力は非絶の一言である。

ダブル・ビーム・ライフル

（出力106メガワット×2）

出力106メガワットのビーム砲を2連装することから「2連装メガ・ビーム・ライフル」（通称・ダブル・ビーム・ライフル）と呼称される。"メガ粒子砲"と"ビーム・ライフル"の定義区分は非常に曖昧で、一般にジェネレーターからのエネルギー供給を受ける固定武装としての"メガ粒子砲"、エネルギーCAP・Eパック技術が確立してモビルスーツの携行火器となったのが"ビーム・ライフル"とされている。だがこのダブル・ビーム・ライフルは独立したジェネレーターを装備した携行火器であり、この装備の頃から定義区分が成立しなくなっている。

打撃力を重視した2連装の砲火は、グリプス戦役時にMSN 00100 百式が使用したメガ・バズーカ・ランチャーに匹敵する威力で。専用ジェネレーターを持つことで本体に負荷を与えず運用でき、何より連射機能により携行装備化を可能にした。しかしその非絶な出力の砲撃は砲器自体を著しく損耗し、バレルの脆化も深刻で200発ごとに交換が必要であった。

またこの装備のもう一つの特徴は、モビルスーツ形態時では携行火器でありながら。巡航形態（Gフォートレス、コア・トップ）時には機首を形成する部位でもあるということである。運用試験の初期において、モビルフォートレス形態時に有視界操縦の必要があったことから、この部位に暫定的にコクピットが設置されたと思われる。

本来正式配備時には、このコクピットは撤去され索敵センサーに換装されるはずだったが。急な配備決定に準備も整わずそのまま納入されることとなったのではないか。さらに運用側への説明が徹底されなかったことから。この暫定コクピットにクルーを搭乗させてしまう事態が発生する。回収した"現場運用"の記録映像には、モビルスーツ形態での格闘戦時に携行火器としてのダブル・ビーム・ライフルの中に（余りにも危険であろうに）パイロットの姿が散見され、これを観たAE社開発スタッフは困惑を通り越し、絶句するしかなかったという。

ビーム・キャノン／ハイパー・ビーム・サーベル

（出力10メガワット　11メガワット）×2

本機のパワープラントであるバックパック両舷に設置された。砲・刃両用に機能選択できる装備。そしてガンダムの意匠でも特徴的な背に刺すビーム・サーベルを再現した装備でもある。▶▶

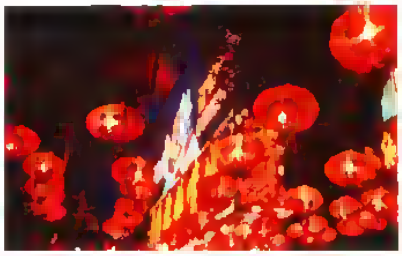
TIGER BALM
AirUNA presents
Sightseeing spot

Tiger Balm is a colony where the tradition and the inheritance in 4,000 years Chinese were revived.

A historical inheritance and the culture etc. of China to say nothing of a gorgeous Chinese cuisine can be enjoyed.

Will you touch the depth of the history of mankind in this Chinese colony?

The surprise and impression will surely for you.



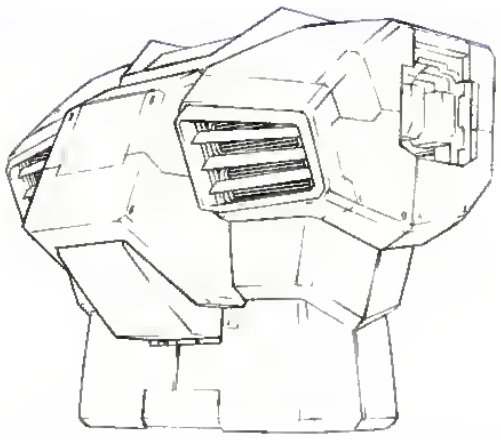
For information and booking visit our new homepage or call your local travel agent.

胸部構造物に見るガンダムの系譜

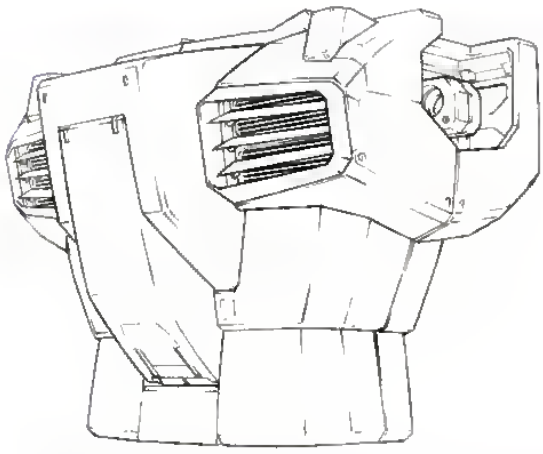
これは、グリプス戦後、および第一次ネオ・ジオン戦争当時に製造された、ガンダム"の系譜に連なるモビルスーツの胸部構造物をスケッチしたものである。

外観こそRX-78 ガンダムやその量産機RGM-79 ジムの意匠を受け継いでいるが、そこに内包されているのは、いわば"技術体系の系譜"のサンプルであり、当時の最先端技術の進化過程を垣間見るようで興味深い。

従来型モビルスーツ



■MSA-003 NEMO



■RX-178 GUNDAM Mk-II

巡航形態時には砲としてのみ機能し、前述のダブル・ビーム・ライフルと同等の威力を発揮する。

最もその特徴を示すのは刃である"ビーム・サーベル"の時で、初戦時には暗礁宙域にて敵モビルスーツを隠れる岩塊ごと一刀両断したと報告されている。その他にも、敵編隊を一振りで薙ぎ払うように撃墜したり、敵艦艇の船殻を切り裂くなど、破天荒な威力を示したとされる。

艦隊編成においてさえ戦力の集約が求められるエゥーゴにおいて、単機で挙げられる戦果が大きい装備は何よりも歓迎されていたであろう。

21連装対モビルスーツ・マイクロ・ミサイル発射器×2基

バックパック両舷先端に2基装備され、各々1基あたり AMA-13S 対モビルスーツ・マイクロミサイルを21発ずつ搭載する。このマイクロミサイルは"熱源イメージ誘導"方式を採用しており、ゆえに追尾中に若干欺瞞されやすい欠点を持つものの、ミノフスキー粒子戦術散布下においては比較的有効な追尾方式である。

当時の新世代モビルスーツはビーム兵装が主体である関係から、Iフィールド・対ビーム障壁を装備する機体も多く、それらに対しては実体弾攻撃が有効であり、その選択肢を確保する兵装と言えよう。

ダブルバルカン×2

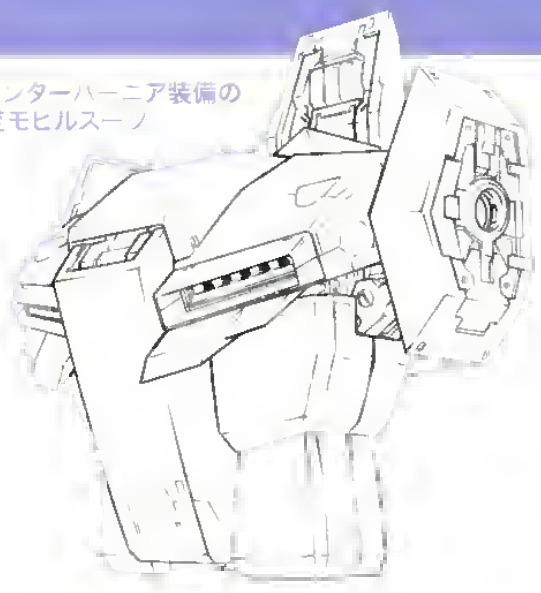
頭部に2門一対2段の計4門装備されている60ミリガトリング機関砲は、連邦系モビルスーツ黎明期からの装備である。ここは就役中頻繁に改修が繰り返された部位で、時期により仕様が異なるといわれる。

モビルスーツの装甲に対しては、最初期のRX 78の頃よりもさらに有効弾とは成り得なかったが、格闘戦時に牽制で発砲することはまだ有効なようで、本機においても頭部に搭載している。装甲は貫けないまでも、センサーに当たれば相手の"目"を潰すことにも繋がり、モビルスーツ・パイロットの経験によれば、使用する機会は意外に多いと言われる。

また、戦闘空域においてミサイルなどの実体弾や、デブリといった脅威から頭部センサーを防御する目的で、近距離迎撃システムとしての役割も持たされていたとされる。この場合、独立した制御により、パイロットの判断に優先して自動的に発砲される場面が見られることもあったという。

さらに、バルカンには対人殺傷兵器としての用途も持たされているという説もある。ただし、本機においてそうした運用がされたという記録は見つかっていない。

カウンターバーニア装備の
可変モビルスーツ



■MSZ-006 ZETA GUNDAM

[illegible]

■MSZ-010 Double ZETA GUNDAM

ダブルゼータガンダムは、ある意味でRX-78 ガンダムの原点にあった機体であったと言える"胸部構造物"といった視点で見ると、その特徴はグリプス戦役、および第二次ネオ・ジオン戦争時期の他のモビルスーツにはない コア ブロック システムの採用に集約されていると言って良いだろう。

コア ブロックの変形機構そのものは一年戦争時代に既に確立したものとして存在するため、少なくともこの部分に関しては旧来の先鋭された技術の蓄積を元に設計されている可能性が高い。

トップであるAパーツと下半身のBパーツを繋ぐ位置にあるコア ブロックは、ダブルゼータの全身を支える構造的強度を有している必要がある。これは RX-78 ガンダムが単なる胴体外装をボディ剛性の維持に利用していた構造とは異なるものであり、ダブルゼータの場合、結果的にトップキングにより接合されている部分に負荷が集中することになった、従って コア ブロックそのものの剛性を上げすぎることによる弊害も考えられ、その設計バランスは非常にデリケートであったことが推測される。

ウィング・シールド×2

ウィング・シールドは、Gフォートレス／コア・トップ形態時に主翼を形成する部位であり、モビルスーツ形態時には耐弾装甲つまり"シールド"として使用される。一見、疑問視されることのある幾つかの本機装備の中でも、ウィング・シールドは複数の矛盾した役割を持たされているといった意味において、その"極めつけ"といえるだろう。

主翼といっても、あくまで遷音速までの機動を前提とした直線翼であり、翼面荷重が高すぎるため揚力は期待できないが、エルロンやスポイラーにあたる補助舵面は空力的不安定な機体の能動的姿勢制御に利用されたと思われる。また安定翼のバイロンや肩部アクセスラッチには10連装ミサイル・ポッドなど多彩な爆装を懸架することができた。

シンプルな構造は耐久性を保持し、その配置部位からも機体要所の防御装甲という面も大きかったはずである。

だが、あろうことか格闘戦の最中に"投擲"され、攻撃武器として使用された事例もあるという。もちろん装甲防御障壁で敵機を打撃した例は古今ないわけではないが、この部位の損傷・欠落は、本機における人気圏内での"航空作戦能力"に、多少なりとも影響が生じるはずで、これはさすがに度を越した"弾力的運用"と見るべきであろう。

まとめ

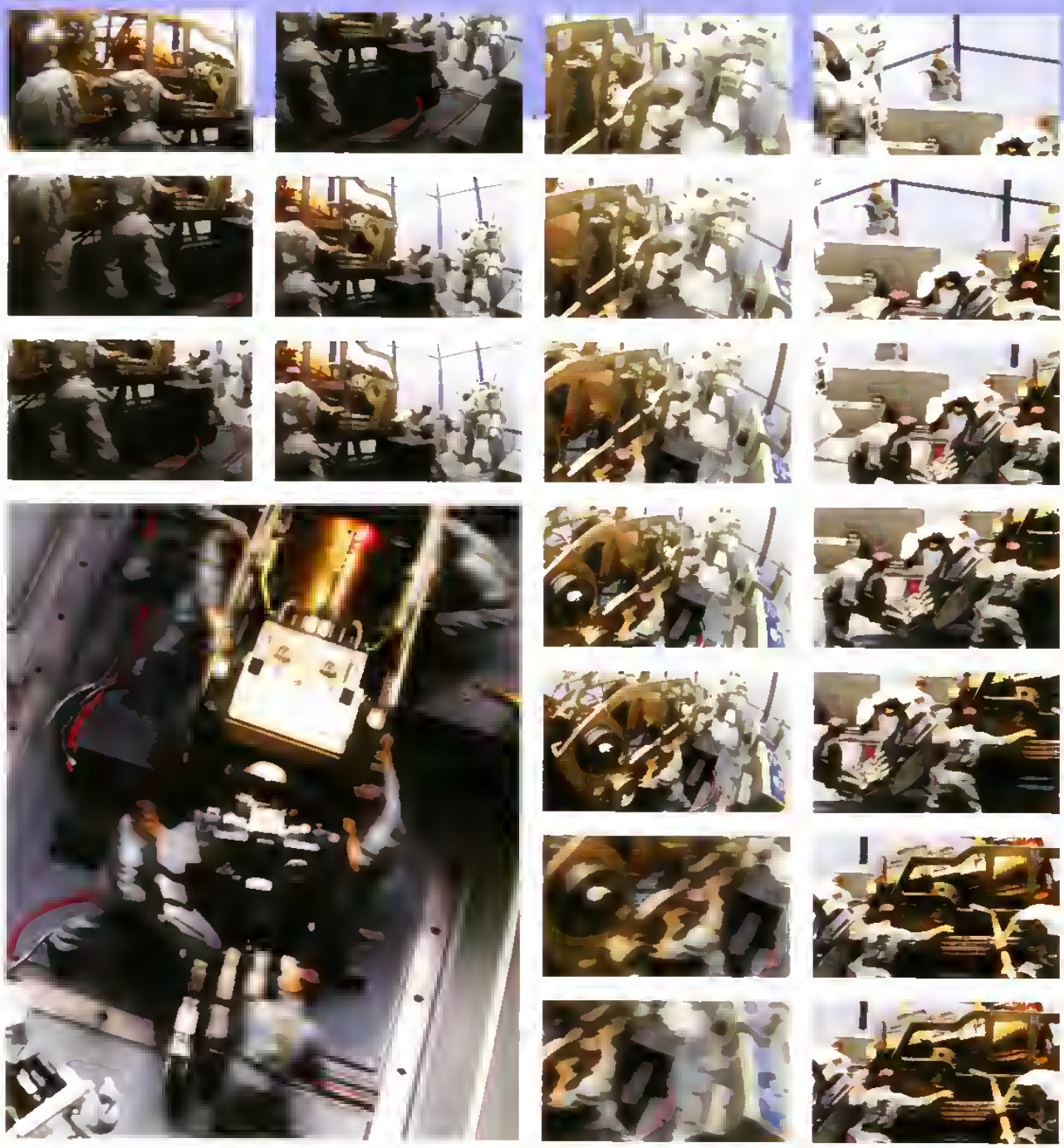
これらの試験的性格の強い装備からの推察だが、本機は本来"実験機"ないし"先端技術検証機"として開発されたものの、エゥーゴ首脳陣の要求性能に応える機体が"本機"しかなく、場当たり的に実戦投入されたのではないかという仮説が浮上する。

本機の装備を検証すると、それが"試行錯誤"の途上にあるものだという疑いが強い。多くの要求をモビルスーツ単体で充たそうとした過程で生まれたもので、運用上問題の発生する仕様も多かったが、逆説的に言えばそれゆえに常識を超える実戦運用に結びついたと考えることができよう。

つまり、形態遷移（Transform 変形）と分離連結（Docking 合体）という非常な精密さを要求する一方、大出力兵装による攻撃性や格闘戦時における強力な剛的性質を併せ持つ、という矛盾を内在した機体であったということだ。

本機の機体特性が"繊細にして豪胆な機体"と語られる由縁がここにある。

最終的には、機体本体の基本スペックの高さに加え、非常識な火力や装備は、柔軟な思考を持つパイロットによって運用されることで、実験機に期待される以上の戦果を挙げる結果となった。アーガマで運用されるならば、と聞いて開発スタッフが出荷に前向きな姿勢を見せたのは、恐らくそういったことも勘案してのことだったのではないだろうか。▶▶



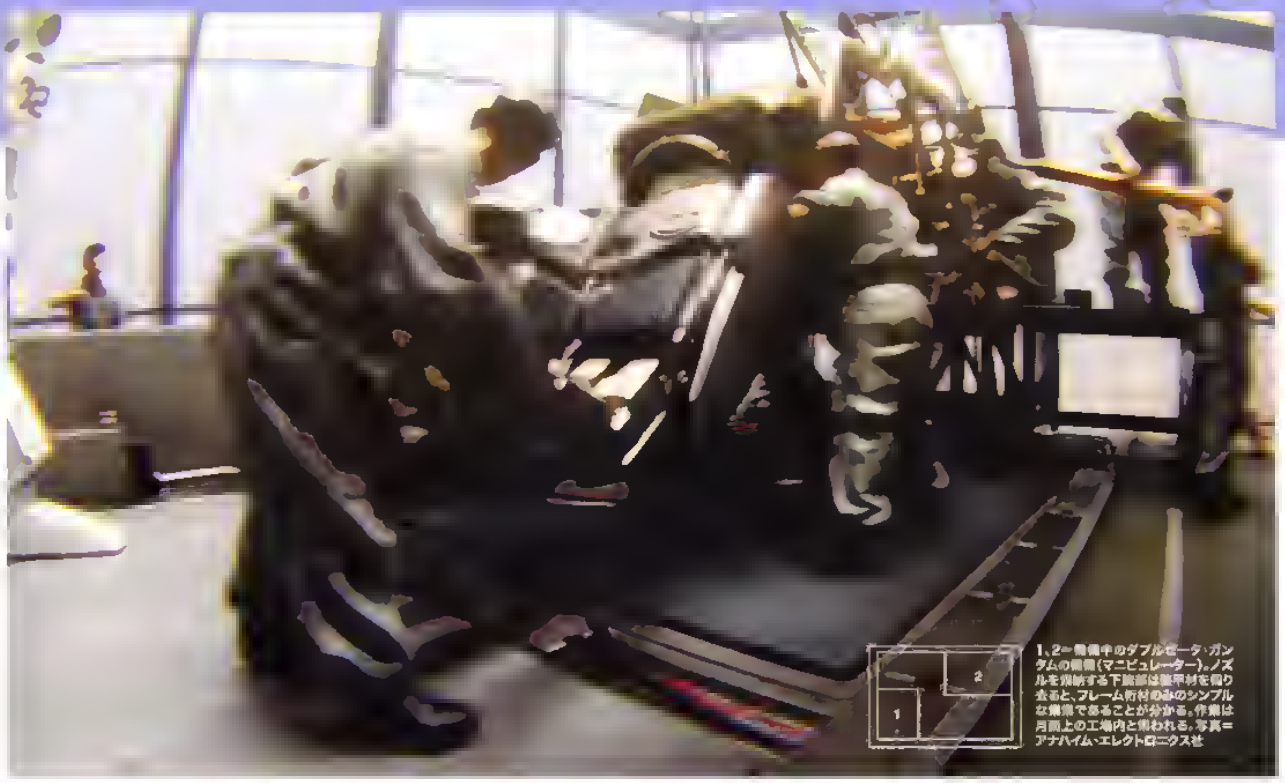
【特記】腕部マニピュレーター

モビルスーツ最後の武器とは何か？Eハックも弾薬も底付き，それでも目前の敵機に一矢報いる術は何か？それは他の何でもない，腕部マニピュレーターによる殴打撲撃戦敵モビルスーツを殴り倒すことだ．これこそが人形同然の機体に残された最後の武器だと

私事で申し訳ないが，筆者が本機についてこの点だけは語りたいのは，先頃亡くなったルテストパイロットの友人が，生前，実はこのMSZ-010 ダブルゼータ・ガンダムに携わっていたことを漏らしていたからだった

彼と知り合ったのは，筆者が独立して間もない[redacted]年。ジオン共和国の自治権返還がなされた翌年，UC 0087年の客船プロスペロー襲撃事件"を手掛けていた時に取材に応じてくれたパイロットの一人で，以降公私共に交流を持つようになった経緯からだった．その彼の持論こそが，冒頭の"腕部マニピュレーター"による殴打撲撃戦なのだが，先の大戦（一年戦争）に従軍した時の体験談が筆者には忘れられない．目前のトムをジムで殴ったら，ジムの腕がへし折れた！と言うのだ

ジムといえば，一年戦争時にロールアウトした連邦軍の主力モビルスーツである。如何に量産機とは言え，その程度の強度などあり得ないと反論する筆者に，彼は関節部から腕の折れた



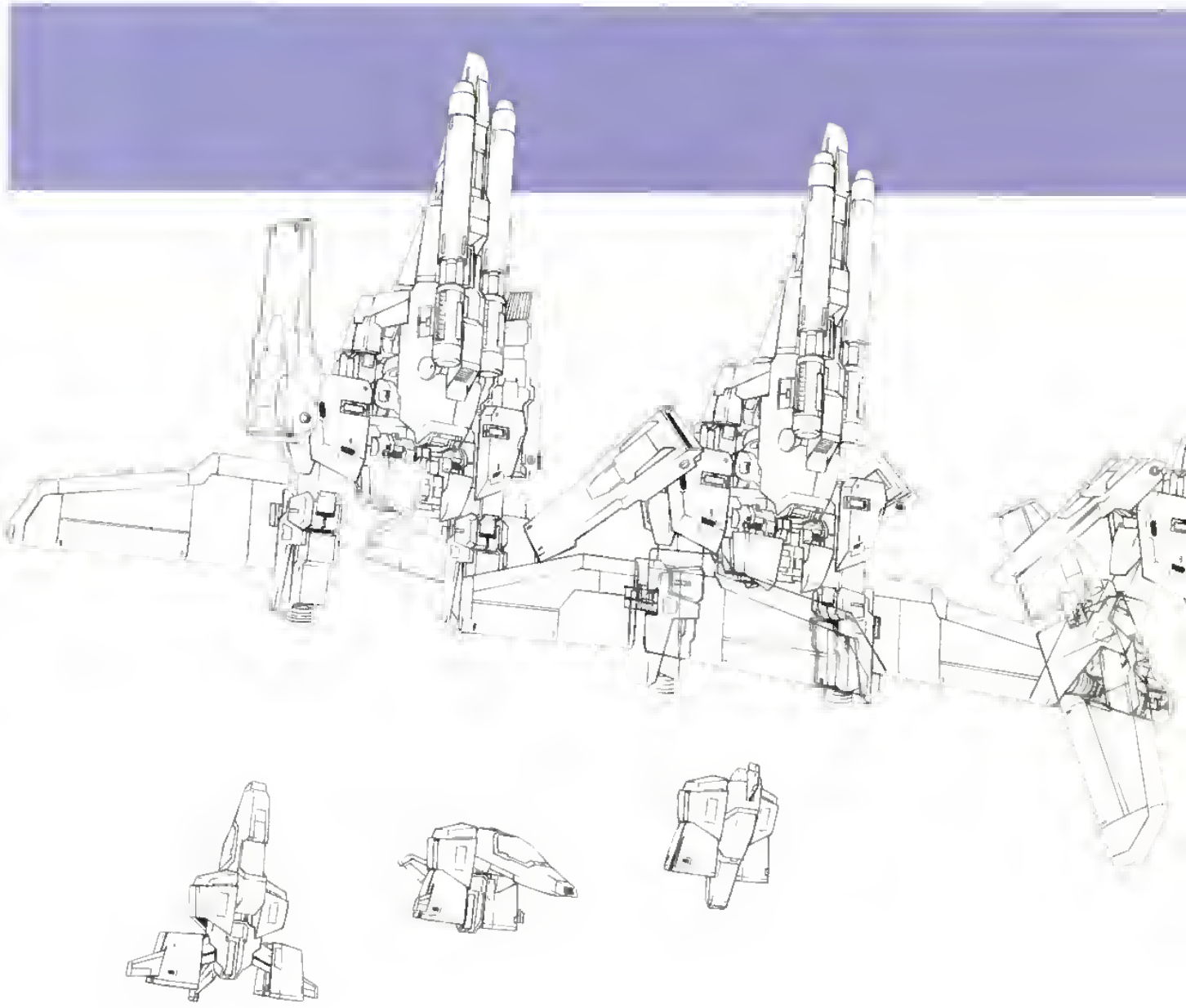
1、2＝整備中のダブルゼータ・ガンダムの腕部（マニピュレーター）。ノズルを内蔵する下腕部は装甲材を取り去ると、フレーム骨材のみのシンプルな構造であることが分かる。作業は月面上の工場内と思われる。写真＝アナハイム・エレクトロニクス社

機を捨て命からがら逃げ延びたと、二度と戻らないと言い切った彼が、MSZ-010 ダブルゼータ・ガンダムのロールアウト直後、配備寸前のテストで模擬戦を担当し、対戦相手のトム系モビルスーツを殴り倒したと、積年の恨み晴らしたとばかりに自慢していたのだ。

筆者はその時、この話をにわかには信じられなかった。本機は可変機であり、その腕部にも当然可変機構を備えている。そんな構造的な弱点を抱えた腕部が、セミモノコック・フレーム時代のモビルスーツ以上に、殴打に耐える強度を有していたとは筆者には思えなかったのだ。だが彼は連邦系の設計機体で、少なくともこのMSZ-010 ダブルゼータ・ガンダムに関しては、「ドムを殴り倒せた、もっともタフな機体だ」と賞賛していたのだ。

この証言が事実なら、本機のフレームがどれほど強靭だったかを物語る。"腕部マニピュレーター"が単に携行火器を支持するだけの部位ではなく、堅牢な機体強度をもって、彼の言う「モビルスーツ最後の武器」の役目を果していたのである。彼は本機の性能に全く満足していた。

彼は既に他界してしまっているため、今となっては真相を確かめる術もない。だが、彼の言葉はモビルスーツの性能がカタログ・スペックのみでは計れないことを我々に教えてくれているとも言える。ここで彼にこの記事を捧げ、その冥福を祈りたい。



ネオ・コア・ファイター (FXA-07GB NEO CORE-FIGHTER)

本機・MSZ-010 ダブルゼータ・ガンダムの設計コンセプトにおいて 構成面で最も初代RX 78から色濃く継承したものが「コア・ブロック制御方式」の採用であろう。が、その機体における重要性と接続の意味は、初代のそれとは大きく異なる。

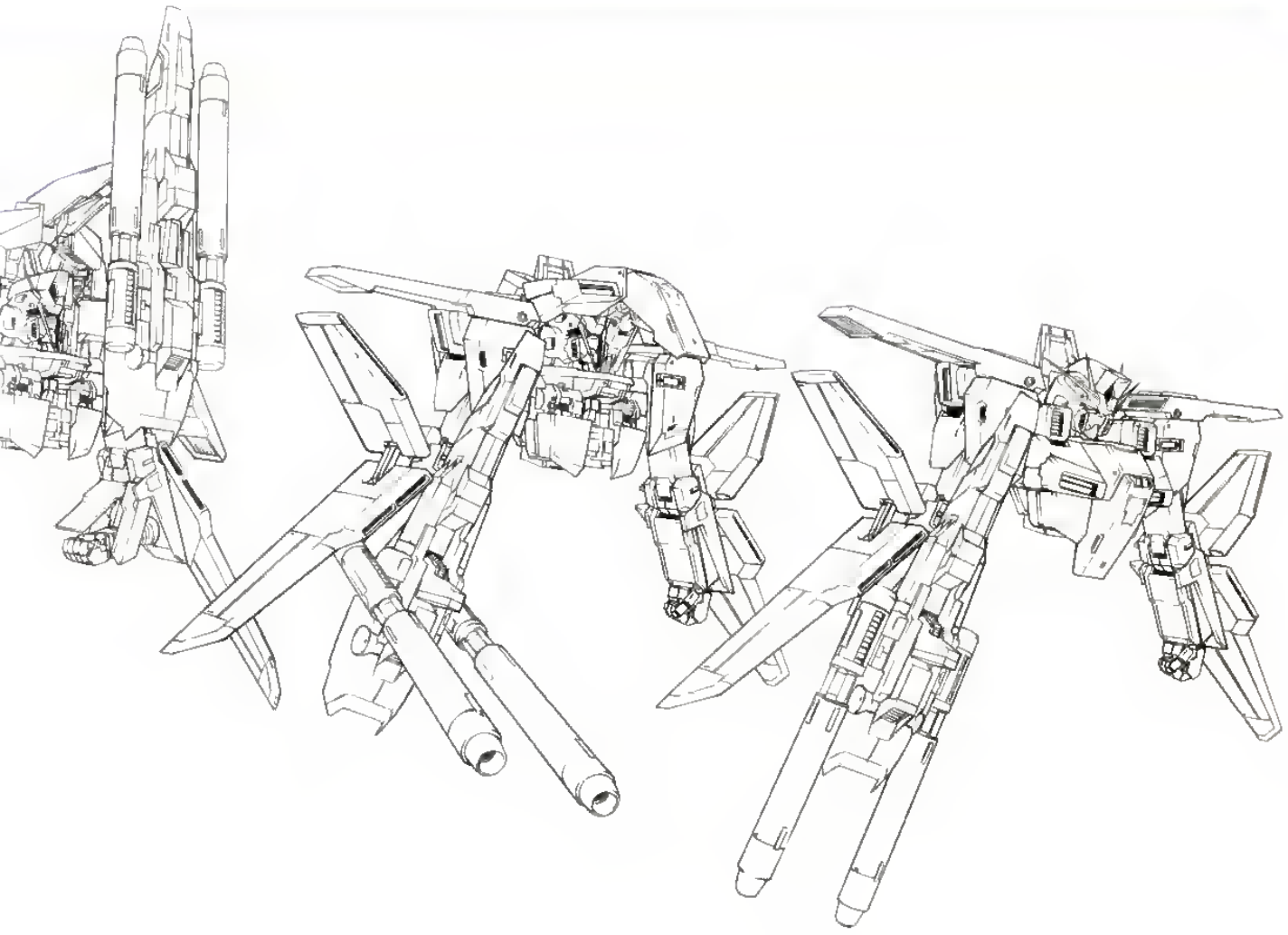
本機の「ネオ・コア・ファイター」(FXA-07GB NEO CORE FIGHTER)が、コクピットブロックを擁する司令区画であることは初代と変わりなく、Aパーツ(上半身)と連結した「コア・トップ」(CORE TOP)形態時、Bパーツ(下半身)と連結した「コア・ベース」(CORE BASE) 形態時のどちらもそれぞれのパーツを制御可能であり、もちろんモビルスーツ形態時は言うに及ばない。

問題はネオ・コア・ファイター搭載のジェネレーターが、本機のスペックである"高出力"を応分に分担しており、そのためにこそ連結しているという点である。コンパクト化させたジェネレーターを機体各所に分散配置することで、20メートル級の機体規模に納めようしたが、予定出力に達せず、その不足分をネオ・コア・ファイターに搭載することで解決したのがその理由である。これはネオ・コア・ファイター単体で機動する時にも、「ゆ戦能力を付加した'緊急脱出カプセル'」以上の機動性能を与えることになる。

初代のコア・ファイターが、操縦者の生還と同時にRX 78の戦闘経験データを蓄積した'教育型コンピュータ"の回収を目標とした機体であったのに対し、今回はより希少性の高い"発展型バイオセンサー'とそのデータの確実な回収を目指していたと思われる。

その証拠に、航空作戦能力の面から観た機体特性は、初代のそれより高機動戦闘仕様である。無論、航空力学的に不利な形状であること自体も初代のそれを踏襲しており、翼面積に至っては初代の方がマシと言えるほどに縮小され、もはや'主翼'ではなく'安定翼'といった様相を呈する。しかし、元々先の

Transformation - docking process

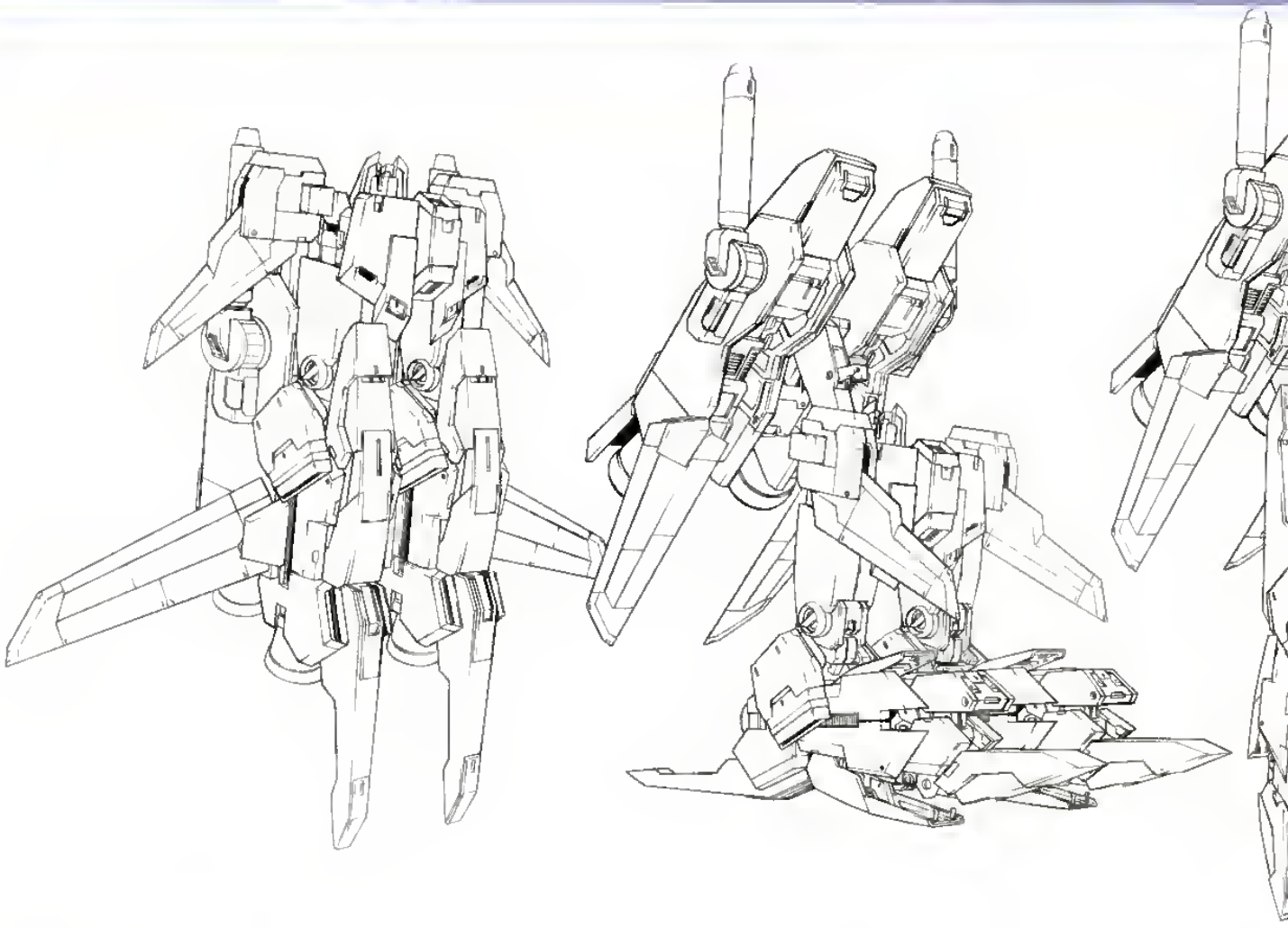


大戦(一年戦争)時代に"兵装機能優先形態"設計が確立しており、モビルスーツ形態時の出力を賄うほどのパワープラント部の形状が、微力ながらリフティングボディの役割を果し、この強力な推力に支えられた"動力誘揚"効力は格段に向上していた

ダブルゼータ・ガンダムの運用上、ネオ・コア・ファイター単体における空戦能力の向上は必須事項でもあった 3機分離状態からの出撃後、合体・変形のプロセスの中途段階でコア・トップ、コア・ベースに接続されていたネオ・コア・ファイターは、それぞれパイロットを乗せたまま分離される(コア・トップには、機首となるダブル・ビーム・ライフルの後端部分にもコクピットが設けられているが、これはあくまでも運搬時などを想定した簡易的なものだと思われ、実戦で使うことは推奨されない)。モビルスーツ同士の戦闘空域においては、彼らはほとんどの場合足手まといとなるため、敵機の追撃を躱しつつ、速やかな空域からの離脱が行われなければならない ネオ・コア・ファイターへの空戦能力の付与はこの点からも積極的になされたはずである。

さらに、分離後のネオ・コア・ファイター2機が同時に戦域離脱行動を取ることは、結果的には生還率を高めるためには都合が良かったともいえる。2機編隊が互いにフォローし合いながら帰還することができるからだ。状況によっては、離脱することを考えず、この2機でダブルゼータを支援することも可能だったはずだ。

ネオ・コア・ファイターの垂直尾翼とその方向舵面は、初代よりも拡張されている。設計時には、揚力よりもむしろ空戦時の操舵性にこそ配慮が及んだようで、これは空戦時の高機動運動において(もちろん、スラスター操舵も可能だが)急激な引き起こしなどで機体が如何なる姿勢になったとしても、決して気流に対して垂直尾翼が胴体の陰にならないようにする戦闘機設計のノウハウが反映されたものである。このことからも、航空作戦能力が強く意識されていたことが伺える。▶▶



大気圏突入

先代の旗機MSZ-006 ゼータ・ガンダムは、ウェイブライダーへ形態遷移することで"大気圏突入"能力を持つが、本機・MSZ 010 ダブルゼータ・ガンダムの可変形態ではいずれにおいても大気圏突入能力を持たない。

わずかに残されている計画初期の記録によれば、AE社の開発スタッフの間でも激しい議論が戦わされたらしい。やはりガンダムの開発担当に携わった者の矜持として、「大気圏突入してこそ、真なる"ガンダム"!」という譲れない 線があったようだ。だが、結局はこの時代のモビルスーツのごく標準的な仕様に則り、大気圏突入能力は付加されなかった。

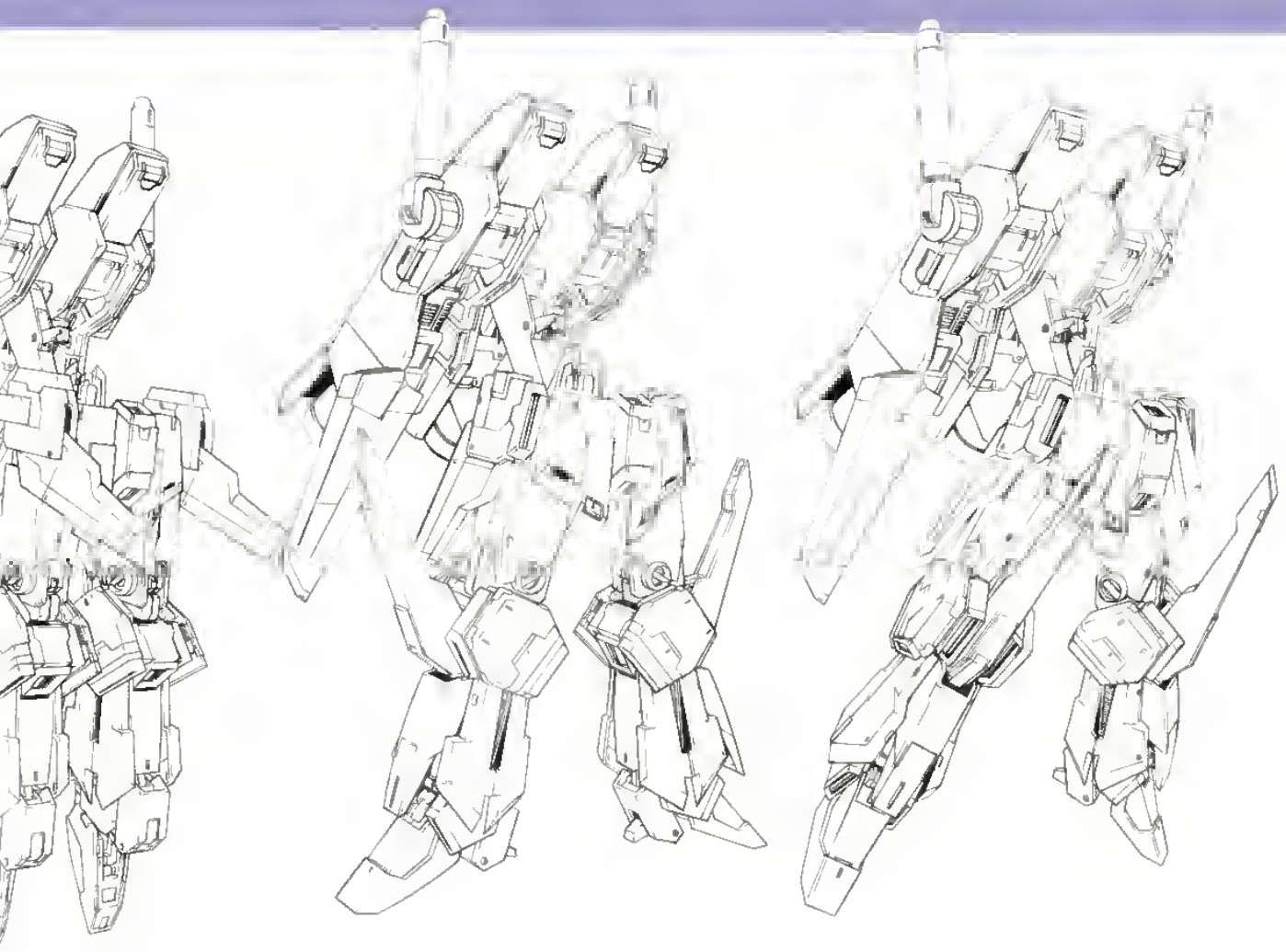
だが、そもそも初代RX 78の大気圏突入能力は、当時大気圏外の低軌道より上が、ほぼジオンの制空圏にあった情勢に起因する。連邦軍には(ルナツーを除けば)宇宙に拠点と呼べる所はなく、宇宙での作戦行動後は地表にある自軍の基地に帰還する以外なかったので、単独の大気圏突入による帰還可能な機体であることが要求されていたのである。

量産化の前段階で、試験的機体としての役割を持たされていたRX-78にとっては、機体そのもの以上に"教育型コンピューター"と運用データの回収は重要事項だったからだ。そのため、本来はA・B両パーツを分離投棄の上、コア・ファイターのみ帰還する仕様であったといわれている。母艦であるホワイトベースが同行する形で大気圏突入していたからこそ、成層圏上層で機体を回収できたのだが、これは状況が許した幸運以上の何者でもなかったのであろう。

結果的にいえば、既にUC 0088年当時のエゥーゴはモビルスーツ単体の大気圏突入能力を必要としていなかった。

グリプス戦役時のジャブロー強襲作戦のように、作戦上機能が望まれることはあった。実際にアクシズ重改めネオ・ジオンによる地球侵攻作戦が開始され、ダブルゼータ・ガンダムもその追撃戦に動員されることになる。だが、他の多くの機体が標準でその能力を持たない以上、部隊として足並みを揃えるためには、1機のモビルスーツに大気圏突破の強襲能力があってもさほど意味はない。それは、皮肉にも大気圏突入能力を有するゼータ・ガンダムが証明していたことだった(ゼータ・

Transformation - docking process



ガンダムは本来の投入目標であったジャブロー攻略作戦時点でまだロールアウトに至っておらず、その意味で不遇なモビルスーツであるが、単独での大気圏突入自体は最終的に2度行うことになった)。

そのため、開発初期に設定された仕様の通り、ダブルゼータ・ガンダムは大気圏突入能力を付与されないままロールアウトを迎えた。既に充分過ぎるほど機体に多くの機能を盛り込んでいたために、仕様を追加する余裕がなかったのも本音ではなかろうか。

ダブルゼータが地球降下を行う際には、他のモビルスーツ同様に「バリュート」と呼ばれる大気圏突入装備が用意された バリュートは、使用するモビルスーツのサイズや質量によって複数のサイズが用意されており、ダブルゼータは、中でも最も大きなサイズのバリュートを装備して大気圏突入に臨んだといわれる。

発展型バイオセンサー

MSZ 006 ゼータ・ガンダムの操縦系統にも、追従性の向上のみに特化した簡易サイコミュ・システム「バイオセンサー」が実装されていた。本機・MSZ-010 ダブルゼータ・ガンダムの操縦系統に採用されたものは、それをさらに技術進展させ、追従性向上を追求しているのは同様ながら、ほぼフルスペック・サイコミュと言える性能に改良されていた。

グリプス戦役時のエゥーゴのエース・パイロットで、ニュータイプ素養者でもあるカミーユ・ビダンの搭乗を本来の想定としていた装備であったために、非常識なまでに操縦難度の高い代物になってしまい、その高い追従性も操縦者を限定してしまうこととなった。取材によるとジュドー・アーシタという名の現地徴用の少年が専任操縦者となったらしく、以降の本機の活躍からは、その彼も極めて優秀なニュータイプ素養者であったことが推察できる。

ただ非ニュータイプ素養者の操縦者のために、追従性を犠牲にしたリミッターが設けられていたという証言もあるが、実際に適用されたかなどについては記録が残っていない。▶▶

4; Flying fortress

巡行形態「Gフォートレス」の航空作戦能力

MSZ-010 ダブルゼータ・ガンダムの巡行形態である「Gフォートレス」の機体形状ついては、その角張った各部の形状から、航空力学的にはお世辞にも"飛行に容易な"機体設計とは言い難い。しかしこの種の機体設計ついては、いわゆる"兵装・機能優先形態"設計が確立していたことが挙げられる。事実、先の大戦（有人戦争）においても、地球連邦軍用航空機の多くが搭載容積率の確保が容易なシンプルモノコックを採用している。

この兵装・機能優先の設計とは、その名の通り兵装の搭載や、機体の設計コンセプトを最優先にデザインを決定する思想であり、航空力学的な有利さやレーダーに対する欺瞞能力を最初から捨てたものということができる（レーダーについては、ミノフスキー粒子の登場以降、さらに無視できる要素となっていた）。基本的にはスラスター推力による"動力誘揚"で半ば強引に飛行しているだけであり、能動的姿勢制御技術のおかげで"墜落せず"に済んでいるのである。また、その多くが静安定性において"負"の状態にあることで高機動に向いた機体特性となっている。

Gフォートレスのこの航空力学的に不利な機体形状から、ミノフスキー・クラフト装備説が見識の浅い一部の識者から持ち上がることがままにあるが、この時期にはまだコンパクトなミノフスキー・クラフトの開発は成功しておらず、仮に装備していたとしたら（サイコ・ガンダムを例にあげるまでもなく）、より大型の機体に仕上がっていただろう。

形態遷移（Transform＝変形）を採用したことによる機体の複雑化はあるものの、SFS（サブ・フライト・システム）による航空支援を受けずに航空作戦へ移行、ないし距離的に隔絶した戦域への迅速な移動を機体単体で実施できる機能は、戦術的兵器として以上に戦略的にも大きな意味を持つ。つまり、軌道上においては俊敏な機動力と艦砲級の火力を合わせ持つ"強力なモビルアーマー"という以外に戦術的な意味を持たないが、ひと度大気圏内に戦線が移れば、有力な地上戦力の支援が受けられず限られた戦力しかないエゥーゴ側にとっては、極めて重宝な機体であったと推察できるのだ。

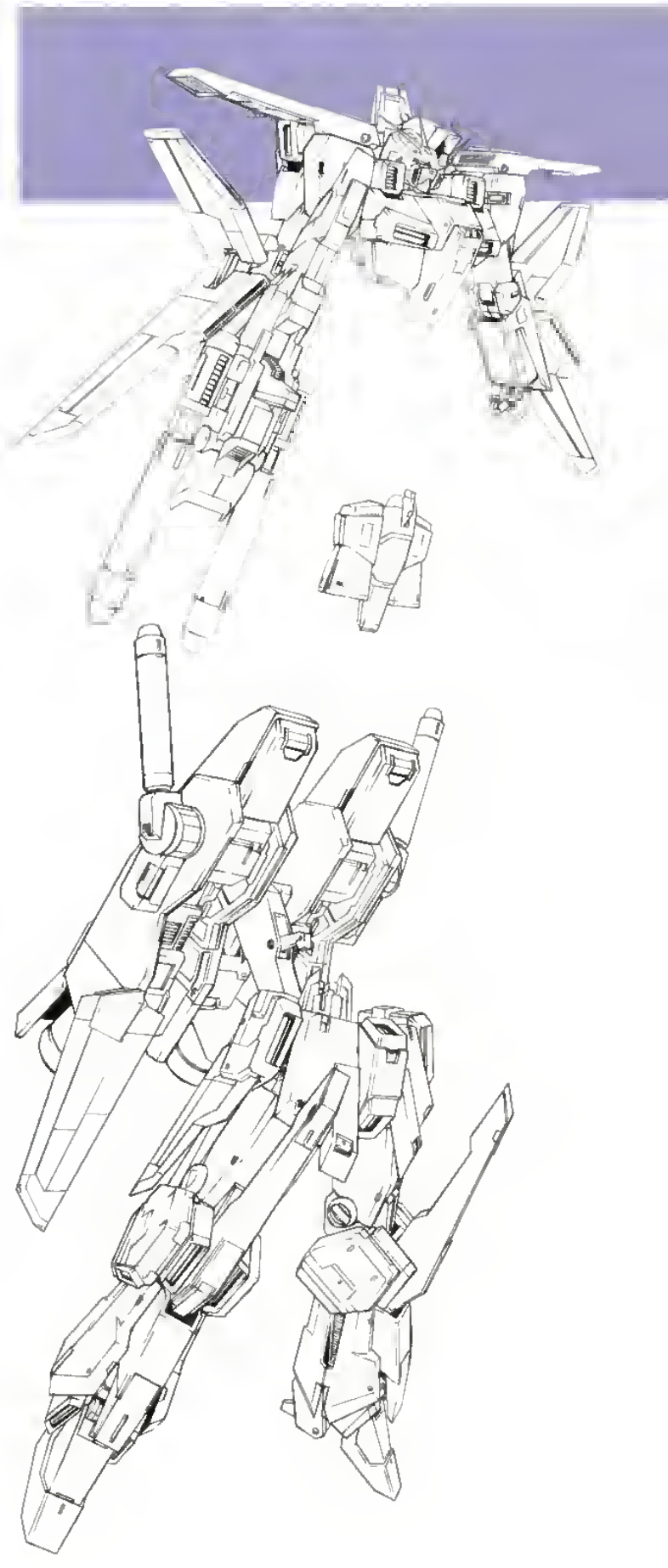
実際にアーガマに配備された直後を除くと、Gフォートレス形態での作戦行動は大気圏内の航空作戦が最も多く、特にダカール戦において戦闘爆撃機としての能力を充分に発揮した。母艦に制限されない作戦行動範囲と、火力による拠点制圧能力に優れていたからだ。

機載兵装としては最大出力を誇る頭部のハイ・メガ・キャノンは、この形態においては収納されており、使用できないが、それでも高出力の対空ビーム兵装が機外に多数配置されており、さらにAMA-13S 対モビルスーツ・マイクロ・ミサイルによる実体弾攻撃はIフィールドによる対ビーム障壁を無効化する威力があった。

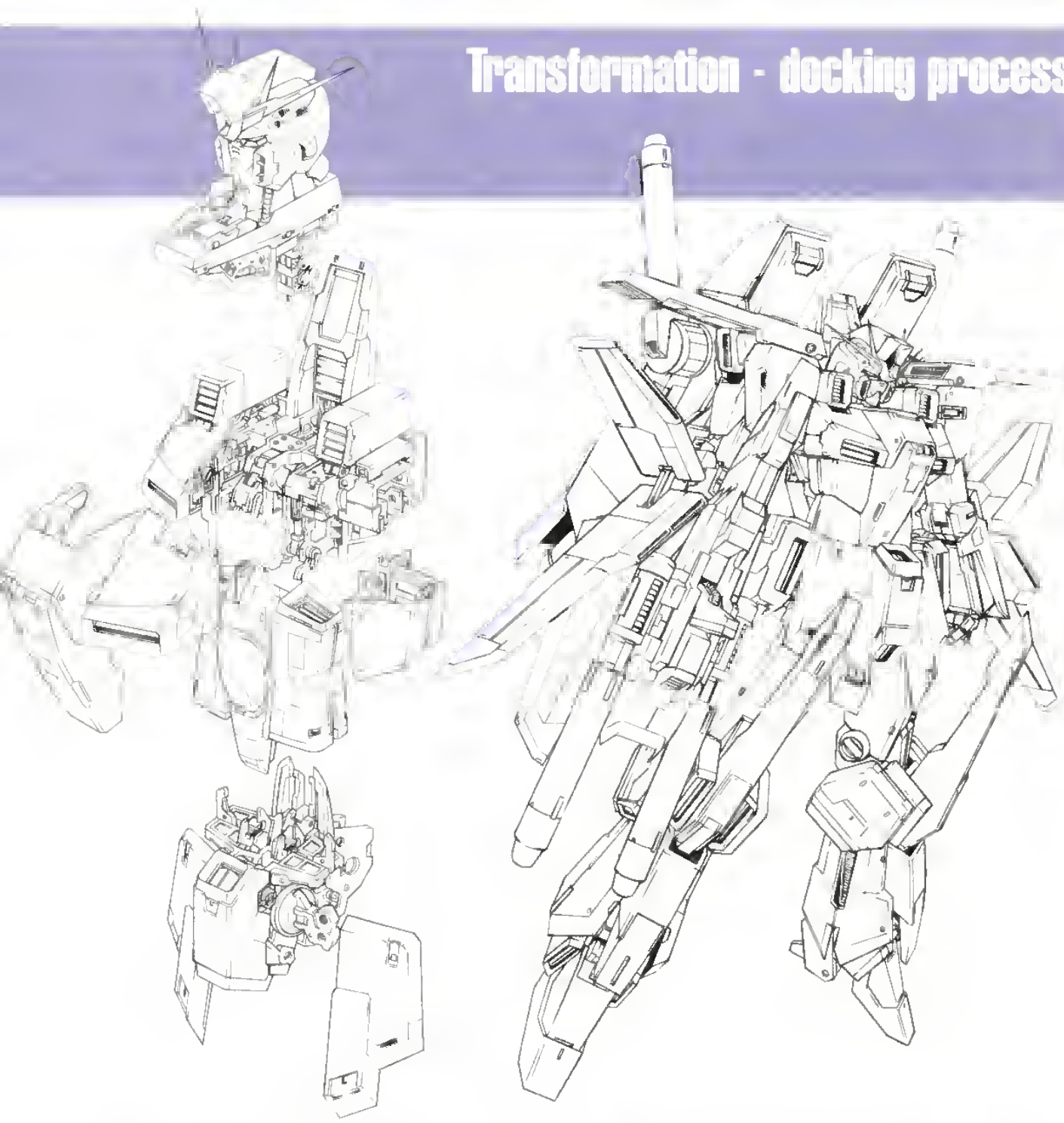
再び宇宙に上がってからは、このGフォートレス形態はほとんど用いられることなく終わっている。それどころか、ネェル・アーガマ搭載後は、ほぼモビルスーツ形態のまま運用され、3機に分離する機会さえなかったという。

だが、これはGフォートレスという仕様が単に大気圏内で有用であったため、ということではない。

これはわずかに残されていた当時の整備記録から明



Transformation - docking process



らかになったことだが、ダブルゼータ・ガンダムは整備性に若干難のあるモビルスーツであったことが指摘されている。当時、組織の内部的な混乱があったとされるエゥーゴは、ネェル・アーガマにほとんどクルーを乗艦させることができなかった モビルスーツの整備クルーも最小限であったといわれる。変形機構に加え、合体機構を持つダブルゼータ・ガンダムは、ネオ・ジオンとの抗争が最終局面にさしかかったこの時期、無用のトラブルを避けるために敢えて合体・変形を可能な限り避けて運用されていたのではないだろうか。

こうした運用が実現できた背景には、ダブルゼータに前後してエゥーゴに配備された「ガンダム・チーム」の存在があったはずだ 戦力が極端に少なかった時期にダブルセータ・ガンダムを3機分離形態で運用していた少年少女パイロットたちは、その後それぞれのモビルスーツを与えられた 幾多の戦闘を経て、チームが戦力として機能するようになった時点で、ダブルゼータ・ガンダムは、チームの一角を成す重モビルスーツとしての役割を全うすることに専念できたと考えるべきであろう。

あくまで設計案として「スーパーGフォートレス」なる追加兵装仕様も検討された。これは Gフォートレス形態の"フルアーマー"とでもいうべき代物だったが、だからといってモビルスーツ形態に変形すれば「フルアーマー・ダブルゼータ・ガンダム」になるわけではなく、単にGフォートレス形態での性能や火力向上を意図した仕様であったという。

コンパクト化した兵装プラットホーム「フルアーマー・ダブルゼータ」

5; Full armored double zeta Gundam

契機はグリプス戦役時に遡る。当時、エゥーゴ・カラバ首脳陣はティターンズの大型可変モビルアーマー「サイコ・ガンダム」の出現に戦慄したと言う。NT研(ムラサメ研究所)から徴用したこの巨大モビルスーツは、ニューホンコン市街にてガンダムMk Ⅱと交戦、キリマンジャロ攻防戦でもゼータ・ガンダムを苦戦させたその巨体は、機動の俊敏さにこそ難があったものの、大出力ビーム砲を機体各所に多数装備する攻撃兵装プラットホームとまで言える代物であった。

また時代はNT用装備を有する"第4世代モビルスーツ"との対決を予感させ、後継機である次世代旗機の要求仕様の要約には喰えて"サイコ・ガンダム・キラー"としての性能が特記されたという。しかし本機・MSZ-010 ダブルゼータ・ガンダムは艦隊配備を前提としているために機体規模は20メートル級に抑えられており、仮にサイコ・ガンダム級のモビルスーツと対決した場合にこの体格差が不利になるのでは、と不安を感じた開発スタッフもいたようだ。

そしてその憂慮はUC0088年10月31日に現実のものとなる。コロニーが落着したダブリン市街において、本機はネオ・シオンに鹵獲されたサイコ・ガンダムMk-Ⅱと交戦。本来ならば"サイコ・ガンダム・キラー"としての真価が問われる一戦であるはすが、既に継戦時間の累積により機体は過負荷状態にあり、僚機の補給的援護がなければ危うく撃墜されるところであった。この事態はエゥーゴ首脳陣を動揺させ、かねてより研究されていたフルアーマープランを本機に採用するよう見直させたのだと推測できる。これが、後に最終決戦仕様の装備を決定させる直接の原因になったのである。

再び宇宙に上がり就役直後の母艦ネェル・アーガマに収容された本機は、強力なネオ・シオンのモビルスーツ群との対決を重ねながら、常に機体各所の微調整がされ続けていたとされる。これは、こうした事情を考慮すれば当然の成り行きであったと言える。幸い機体がモジュール構造のため、細かい仕様変更への対応が可能だった。

UC0089年1月15日に本機は正にサイコ・ガンダム級のモビルスーツ、ネオ・ジオンのNZ-000 クィン・マンサと対決。この時、本機が実装した装備が「フルアーマー・ダブルゼータ」と呼称されるものである。

この装備の実装は、対クィン・マンサ戦においてのみと記録されている。しかし、翌々日の1月17日に対キュベレイ戦で大破し戦没する、その直前であることから、本来はこの仕様こそが本機の最終戦闘仕様であったと思われる。

本仕様の趣旨は、攻撃力強化のための出力向上や防御充実のための装甲部追加により重量増かあったとしても、決して機動力を損なわないもの、だったとされる。

そこで1月15日の仕様変更作業において、まず本体背部・バックパックをメインスラスター4発式の出力強化型に換装。対モビルスーツ・マイクロ・ミサイルの収納やビーム兵装を付加したウェポンラック仕様の増加装甲に、推進剤を機体外装に充填するコンフォーマルタンク、機動力を補完するスラスター付装甲を機体各部に装備した。

特に装甲とウェポンラックを一体型にすることで攻守両面を兼ね備える"矛盾"を解決した点は注目に価する。増加装甲は機体の作動範囲を損なわないように追従可動する。また応力負荷を分担するよう可動することで機体剛性も向上させている。

無論、戦況の推移により本仕様の装備を強制排除(パージ)することで、機体単体で継戦も可能である。

急な仕様追加においても、極めて良好な機体バランスを維持できたとされることについては、本仕様がMSZ-010 ダブルゼータ・ガンダムの兵器システム開発時において、既に"念頭"に置かれていたことを示す。また、それは同時にエゥーゴ首脳陣のダブルゼータ・ガンダムの強化要請に、AE社が速やかに対応できたことを説明できる唯一の回答でもある。

実は本機・MSZ-010 ダブルゼータ・ガンダムがロールアウトする3ヶ月前。本機の機体構造検証のための"構造供試体"に本仕様装備の試作部品を組み上げた「技術検証機」が数機用意されていたという。この試作機の存在が、本仕様の各装備の検証と機体の完成に大きく貢献することとなったのである。

本仕様の追加兵装は以下の通りである。

■装甲収納型ミサイル発射器

本体背部・バックパックにも搭載されているAMA-13S 対モビルスーツ・マイクロ・ミサイルの発射器を各部正面装甲内に収納。ビーム兵装が主力の第4世代モビルスーツはIフィールド・対ビーム障壁を装備する機体も多く、それらに対しては実体弾攻撃の有効性が認められる。また装甲被弾時にミサイルを内装することで爆発反応装甲(Explosive Reactive Armour=ERA)同様の効果を期待したのではないだろうか。

■腹部ハイ・メガ・キャノン

出力50メガワットと威力こそ頭部装備のものと同様ながら、一度の発射で砲身を損耗してしまう簡易兵装。完全に使い捨て装備で、発射後は架設装甲と共に強制排除が可能。励起電力は背部バックパックから供給されているので、当初の頭部装備のもののように発射後に起動停止状態に陥ることはなかった。

■ハイパー・メガ・ランチャー

背部バックパックに直接接続する形での装備が予定されていたオプション兵装。その出力は79.8メガワットと機載兵装としては当時としても最大の部類で、艦砲をも凌駕する。

グリプス戦役時のメガ・バズーカ・ランチャーから連綿と続く携行型ビーム兵装の発展型である。

なおフルアーマー・ダブルゼータとしての増加装甲部は、当時の整備主任の記録によれば"フッ素樹脂"(この表現には疑問は残る)による対ビーム・コーティング処理が施され、数秒ならばメガ粒子ビームの直撃に耐えるというものだ。これは高分子化学反応を利用した一種の"対ビーム融除装甲"と推測され、実際に対クィン・マンサ戦では充分その耐弾効果を発揮した。この融除皮膜はこの装備が母艦ネェル・アーガマに搬入、本機に実装された段階で機体に合わせ、いわゆる"ガンダムカラー"に塗装処理されたようである。

非常に興味深いのは、この仕様がUC0083年に抹消された"ガンダム開発計画"ガンダム試作3号機「デンドロビウム」のようなコンセプトである、強襲型"兵装プラットホーム"そのものであり、これをコンパクト化し20メートル級モビルスーツの機体規模で実現したと思われる点である。このコンセプトから類推すると、本仕様が対ビーム戦闘を考慮していた点から考えて、小規模ながらIフィールド・ジェネレーターを搭載していた可能性もあったのではないだろうか。

■装甲収納型
ミサイル発射器

■装甲収納型
サイル発射器

■装甲収納型ミサイル

■腹部ハイメガ・キャノ

Anaheim Electronics
FULL ARMORED ZZ GUNDAM

所属：エゥーゴ　建造：アナハイム・エレクトロニクス社
全高：23.14メートル（75.9フィート）　頭頂高：19.86メートル（65.2フィート）
本体重量：32.7トン（72091ポンド）　全備重量：87.2トン（192243ポンド）
ジェネレーター出力：7950キロワット
スラスター総推力：124800キログラム（275160ポンド）
センサー有効半径：16200メートル（10.05マイル）
装甲材質：ガンダリウム合金
武装：スプレーミサイル・ランチャー×2、16連装ミサイルポッド×2、
　　8連装ミサイルポッド×2（増加装甲に被覆されている物のみ）

ダブルゼータ・ガンダムにモビルスーツ形態時の装甲強化と機動力を
増強する追加ユニットを装着した機体

U.C.0088

6; Summary
総括

U.C0089年1月17日。MSZ-010 ダブルゼータ・ガンダムは熾烈な激闘のために大破損壊の状態ではあったが、操縦者共々、事態収拾に駆けつけたエゥーゴ・連邦軍連合艦隊に無事回収され、「第一次ネオ・ジオン戦争」におけるその大任を全うし表舞台から退場した。初代"ガンダム"の再現を目指した本機にすれば、まさに"ガンダム"の名を継ぐに恥じぬ活躍を残したわけである。

しかし、続くU.C0090年代以降にMSZ-010 ダブルゼータ・ガンダムの"合体・変形"の設計コンセプトが継承されることはなかった。これはこの機体が"時代の寵児"であったことを物語る。

これについて、これまで本機に対して多く用いられていた、"進化の袋小路に入った恐竜"の如き形容の言葉は、ある意味ではその通りとも言えるが、実はまったくの的外れであると筆者は考えるのだ。

なぜなら、これまで筆者が語ってきた、ダブルゼータ・ガンダムが目指していたものに思いを馳せてみるといい。ダブルゼータは、単機での極限の戦闘力を追い求め、設計者たちが過剰ともいえる要求性能に対して、さまざまな意欲的・実験的装備を惜しげもなく投入した機体だった。コストや整備性の悪さといった欠点を補って余りある火力、機動性、航続能力、コンパクトさ。これを成功作と言わずして何と呼べば良いかと問いたい。

ダブルゼータ・ガンダムは生まれなかったにしても、いわゆる"恐竜的"モビルスーツやモビルアーマーといったものは、U.C0090年代に入っても少なからず存在した。例を挙げるなら、ネオ・ジオンの総帥専用機として生まれたMSN-04 サザビーも、巨大な機体にファンネルや拡散メガ粒子砲といった豪華な装備を施されていたという。

これらのモビルスーツは、その時代における最高性能を追求したがゆえに、確かにそれ以上に進化することがなかったのは間違いない。それが"袋小路"たるゆえんである。U.C0090年代以降、時代は緩やかにモビルスーツの小型化、シンプル化への道を歩む。だが逆にいえば、ダブルゼータ・ガンダムのような究極を目指した機体は、いつの時代にも生まれ得る、ということである。

ダブルゼータ・ガンダムが、"ガンダム神話"の再来を実現した機体である、という事実を忘れてはならない。

一年戦争の英雄アムロ・レイが搭乗したRX-78 ガンダムは、本来量産機の開発を前提としたV作戦の一環として製造され、この機体は、彼の操縦により戦時中めざましい活躍を遂げたが、これに飛び抜けた性能が与えられていたのは、それが"試作機"であったからに他ならない。

ダブルゼータ・ガンダムの機体を詳細に検証したことから得られる結論は、これが数々の"実験的装備"を投入された、試作途上にある機体であったとおぼしき事実である。しかし、同様に試作機であったRX-78 ガンダムが大地に立ったその時点で示していた完成度と同じものを、ダブルゼータ・ガンダムはその戦果をもって示していると考えるべきである。

本機は、群雄割拠するネオ・ジオンの高性能モビルスーツ群を相手に常勝を続け、その無敵ぶりを誇った。

何よりもダブルゼータ・ガンダムという単機のモビルスーツの戦勝が、「実質的に第一次ネオ・ジオン戦争を終結に導いた」という事実がある。ネオ・ジオンの首魁である副総帥ハマーン・カーンが操縦するAMX-004 キュベレイとの直接対決。"相討ち"なるも見事この第4世代モビルスーツを討ち取った功績は特筆すべきであろう。

それはこの機体に単なる性能評価に留まらない価値を与えると同時に、"ガンダム神話"の正統な後継者として、新たに一つの伝説を刻むに至ったのである。

ダブルゼータ・ガンダムが生まれる以前に、様々な試験タイプが試作されたと囁かれる。それは、同時代にAE社が走らせていた「Z計画」の他にも存在したといわれる"ガンダム開発計画"のうちの、ほんの一握りの影に過ぎない。また、ダブルゼータ・ガンダム以外にも、分離合体・変形機構を有する機体がAE社で開発されていたとする噂も耳にする。

無論、根拠はないが、そのうちのどれもが、実戦に投入されていれば順当に設計時に想定された活躍を見せたであろう。だが、ほとんどは歴史の表舞台に登場することも叶わず消えていく運命を辿った。

ダブルゼータ・ガンダムは、その意味では幸運な機体であったといえる。"サイコ・ガンダム・ショック"を契機にエゥーゴ首脳陣によって示された要求性能。それを実現可能な機体が、たまたま完成間近にあったことから採用が決定された。

すなわち、ガンダム開発計画という大きな流れの中から掬い上げられた"一瞬の完成型"という定義こそ、ダブルゼータの真の姿だったのではないだろうか。

KAWS
Kawasaki Airways Super Cargo

ガンダムの母艦たるネェル・アーガマ

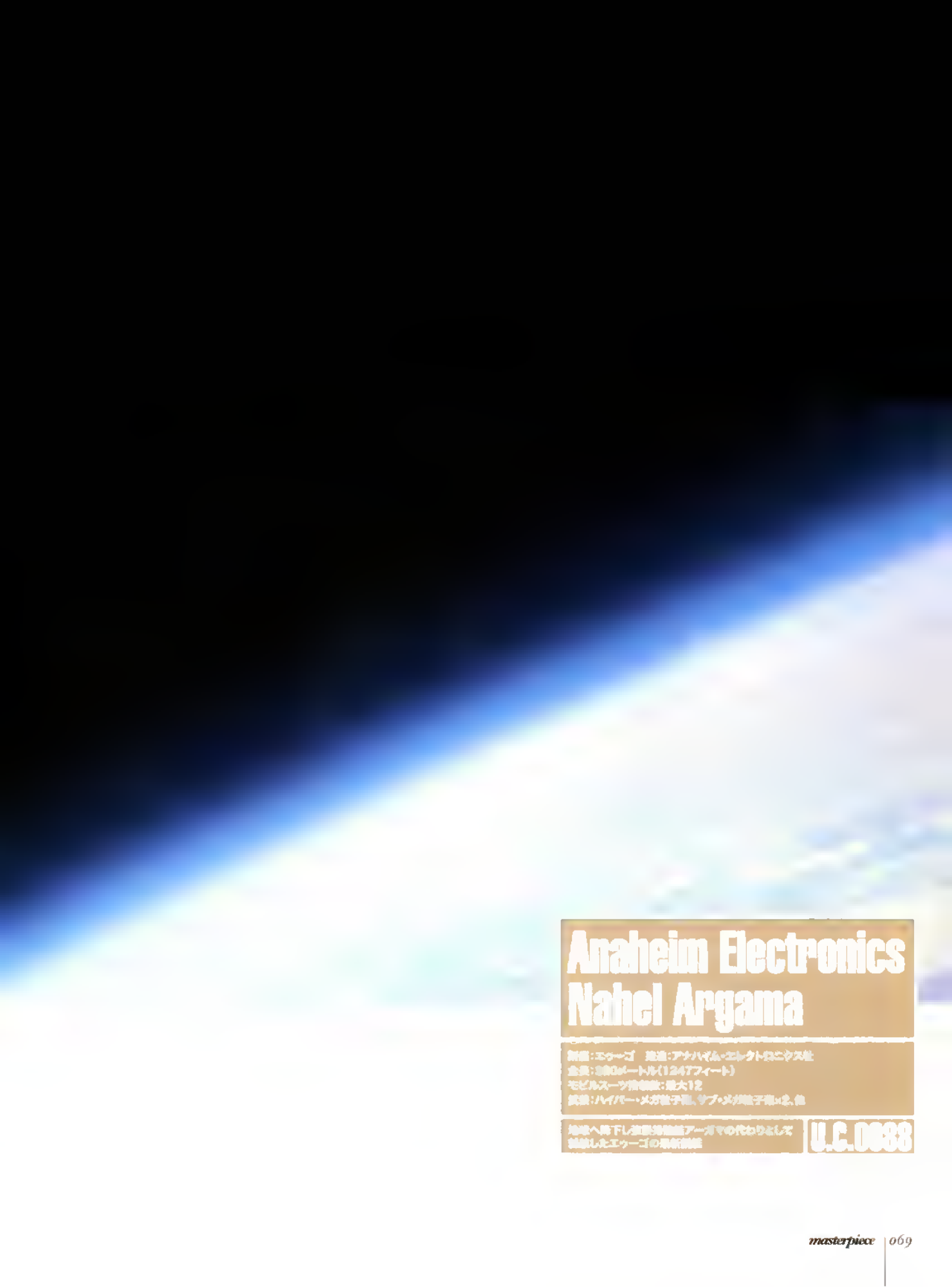
Nahel Argama
The Mothership of "GUNDAM"

U.C.0088年8月、ダリ[illegible]戦のために[illegible]までエゥーゴの旗艦として使用されてきた強襲揚陸艦アーガマが地球へ降下した。その代わりとして就役した最新鋭艦が、ネェル・アーガマである。

アーガマの特徴であったモビルスーツ運用能力は拡大されており、上下に長大なカタパルトを備える特異な形状となった。第一次ネオ・ジオン戦争（ハマーン戦争）終結時までガンダムチームの母艦として活躍した後は、地球連邦軍ロンド・ベル隊に配属された。その後改修によりさらにモビルスーツ搭載数が増えている。写真は就役当時の姿。

ネェル・アーガマは、[illegible]戦争時に"ガンダム"の母艦として活躍した強襲揚陸艦ホワイトベースの運用思想を継承する形で設計されている。これは先代のアーガマも同じで、設計の特殊性もあって艦隊編成に組み込まれず、単体で運用されることが多い。裏を返せば、他の支援を受けずとも任務を遂行できるだけの高度な機能と能力を、一艦に備えていたことの証左でもあろう。

これらホワイトベースやアーガマタイプの艦は、この独立性のゆえに、伝説的な活躍を後世に残す"ガンダム"の母艦たり得たのかもしれない。



Anaheim Electronics Nahel Argama

開発：エゥーゴ　製造：アナハイム・エレクトロニクス社
全長：280メートル（1247フィート）
モビルスーツ搭載数：最大12
装備：ハイパー・メガ粒子砲、サブ・メガ粒子砲×2、他

地球へ降下し強襲揚陸艦アーガマの代わりとして
建造したエゥーゴの戦術機動艦

U.C.0088

1、2ー地球軌道上を飛行中のネェル・アーガマ、ネオ・ジオン残党がグナーデ本星帰還に向いている間に、最終公試を行った とされる。／3ーラグランジュ3付近の宙域で公試中のネェル・アーガマ。写真ーアナハイム・エレクトロニクス社

Looking back Haman war
メディアが捉えたハマーン戦争

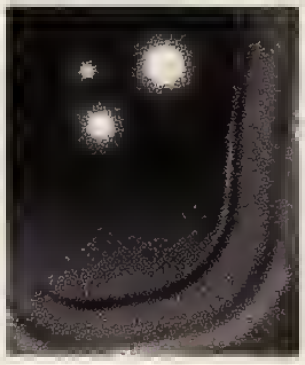
Reporting by RYOTA FUJITSU リョウタ・フジツ

Daily Granada / July 10, U.C.0088

エゥーゴ、新型モビルスーツを投入か

It combats in the Granada spaceport. A.E.U.G. turns on new model MS.

GRANADA, Moon (UT) —July 9th The combat was done by the vicinity of the spaceport of Granada between assault cruiser ARGAMA of the A.E.U.G. belonging and the power of the Neo-Zeon. The Neo-Zeon side executed the strategy that closed the exit of the Granada spaceport, and the spaceport was driven in temporarily in the state of unavailability. In the combat and the vessel of the Neo-Zeon were made to sink it, and ARGAMA departed from the Granada port.



A movable suit that started from both camps caused the skirmish after it entered port of ARGAMA on the eighth the day before, and the spaceport to which the Neo-Zeon side had made a port call was destroyed greatly by attacking A.E.U.G. side Mobile-Suit. The combat on the 9th is guessed that the retaliated shade of meaning existed, too.

It can be said that only the badness in a situation not amusing was avoided on the ninth though damage big as a private shuttle exists in the combat airspace, too occurs. However, it is said that one week is necessary by the time the port regains a past state because it made the port unavailability by using the transport craft to which the Neo-Zeon is damaged seriously by the combat on the 8th. A big influence seems to remain in distribution etc. that center on Granada for a while. Moreover, the existence of new Mobile-Suit of A.E.U.G. was confirmed in a series of of this time combat. It is rumored that it is Mega particle Canon to give the spaceport big damage by the combat on the eighth installed in the movable suit.

Both of the Anaheim electronics and A.E.U.G. get this caught, saying that "It is not time of formal announcement yet" now with the remark that admits the existence of new disposition on substance though equivocate. In the combat with the Neo-Zeon of the future, the new model machine to do the strategy while putting up only ARGAMA in previous disposition but the specialist expects it.

Only
Shik
assig
ace p
Baje
Chai
Zeon
ace fi
War
Shik
brigh
distri
schei
a tau
to pr
AEU
mob
unde
and I
anti-I
Chai
Hyal
perso
until
Gryp
was I
in a b
leade
AM

Daily Granada Morning newspaper July 10 U C 0088

Daily Granada Morning newspaper July 10, U.C.0088

デイリー・グラナダ
0088年7月10日付朝刊

グラナダ宇宙港で戦闘 エゥーゴ、新型MSを投入

【グラナダ発 1月7日】7月9日、グラナダ宇宙港近辺で、強襲揚陸艦アルガマと新ネオ・ジオン勢力との間で戦闘が行われた模様だ。

この戦闘は、グラナダ宇宙港を占拠する作戦を実施したネオ・ジオン軍に対し、同港に停泊中のアルガマが攻撃を加えたもの。ネオ・ジオン軍は、同港に入港中の民間船舶を人質にとるなどの抵抗を見せたが、アルガマは、これを振り切って港外へ脱出した。

この戦闘で、ネオ・ジオン軍は、新たに開発した新型モビルスーツを投入したと伝えられている。

今回の戦闘では、エゥーゴ側の新型モビルスーツが確認されたが、この戦闘で宇宙港に大きな被害を与えたのは、その新型モビルスーツに搭載されたメガ粒子砲のためといわれている。エゥーゴに新たな新型モビルスーツが配属されたという情報は、3月ごろから専門家の間では噂されていたが、今回の戦闘では、はっきりとその存在が確かめられた格好だ。

なお、アナハイム・エレクトロニクス社とエゥーゴの両者は、現時点では「まだ正式発表の時期ではない」と言葉を濁しているが、これは実質上、新型配備の存在を認めた発言と受け止められている。今後のネオ・ジオンとの戦闘において、アルガマのみを前面に出した作戦を行うための新型機配備ではないと専門家は予想している。

Monthly MOON / U.C.0088 August edition

双子の兄弟の戦争

月刊誌「Monthly MOON」8月号

双子たちの不毛な戦争

国際政治ジャーナリスト　ショージ・イレヴン

[illegible]

Monthly MOON U.C.0088 August edition

Report

by George Eleven (International political journalist)

U.C. 0087 year of last year was one what acomprehensible year when thinking now in year of U.C.0088! There might be a lot of people who feel it so. A big gap will exist in 0088 and 0087 seeing a little difference.

Anti-federal organization A.E.U.G. organized with liberal sect including radical elite organization TITANS in martial federation and a part of federal army. Civil war by these two organizations. This was a war without a miserable reaching an extreme and the sphere of the earth was greatly damaged by it.

However, one axis was firm and it existed there. Hawk and pigeon. The right and the left. Any alias is not cared about. Clear sense of values conflicted there, and at any rate should I entrust the future in the sphere of the earth to either, and people were able also to select it easily.

However, U.C.0088 year's current state is quite different from it.

Is the civil war that centers on TITANS and A.E.U.G. a colony laser on the February 22, U.C.0088. Combats over GRYPS2 were had and concentrated. As a result, TITANS that loses the executive has collapsed in fact.

Then, when the hegemony in the sphere of the earth is grasped, having begun to move is old Zeon power (present Neo-Zeon) this time. The old Zeon power succeeded to the civil war of TITANS and A.E.U.G. in the behavior to obtain fisherman's profit, and deriving the end the same as the aim. Thus, the earth invasion operation of Neo-Zeon that had retained One Year War potential started.

The Neo-Zeon sends the advance force to each colony, and advances the occupation. The view that the descent operation on the earth will be done is also strong in the future.

The earth federal army is a table against this, and it doesn't resist. Resistance that is the organization cannot be done, and stops in the attempt a counteroffensive remedied the action only by one warship of assault cruiser ARGAMA as impoverished A.E.U.G. is also physical.

It is a history background of the approval of A.E.U.G. that it renews here and want to recall. An immediate chance to approve A.E.U.G. was resistance to cruel suppression to use the name from the Zeon remnants hunting of TITANS. However, there were consecutive behind that and a continuing wish for spaceanoid to the autonomy right acquisition.

On the other hand, the Neo-Zeon also has been invaded to each colony against the background of the dissatisfaction of spaceanoid with the earth federation. The Neo-Zeon advertises spokesmen of spaceanoid only we like forgetting why we had to run away to the sphere of the Jupiter. And, there is spaceanoid to accept it in no small way, too.

A.E.U.G. and the Neo-Zeon look alike by the surprise when comparing it thus. It is as the fact that the old Zeon army native is participating in A.E.U.G. is pointed out with some excellent reports. In a word, it is understood that A.E.U.G. and the Neo-Zeon are existence like the twin child to whom the space policy of the earth federation gave birth. About two people look like the surprise the origin, and in people (especially, spaceanoid), there is no difference in the insistence in the part of foundation even though either is chosen.

Thus, A.E.U.G. that the element to conflict is few combats against the Neo-Zeon, and movement that the

[illegible]

war of twins

rth federal government that it
ust be water and be oil looks for
complexion of the Neo-Zeon is
own with the Neo-Zeon The
gleader of confusion is here
for in a word this civil war, twin
thers are only unfolding a
ren fight. It invents only the
plessness to the future with a
n confrontation like U C 0087
opposite It is born from there
h the cooped-up feeling that
rrounds present of U C 0088
just looks like the event in the
er half of the period of the
idle Ages The world separation
ered "Cold war" state by the

ideology in two sphere of influneces after it had finished the second World War. A barren dispute of an absent ideology happened frequantly in many parts of the world when "Cold war" faced the end however, and the world was confused more than "Cold war" In this barren dispute, will being to continue to the earth federal approval for a long time is as being widely known. A present situation of the sphere of the earth looks like it

It is likely can do nothing but exist about the Neo-Zeon and A.E.U.G. about the keepsake and Mineva Lao Zabi of Zeon if the difference is only enumerated. As for shouldering of the Neo-Zeon Mineva as the centripetal force, and the maintenance of the person Zabi worship that can be called an anachronism, repulsion is not a little either. However, it is true that the layer where the Neo-Zeon is supported in the reactionary and a constant number exists because the earth federation and the earth federal army show the laziness of democracy, too.

To get over this barren civil war in a in a word essential meaning, A.E.U.G. or the earth federation should positively type out value that exceeds the centripetal force that Mineva symbolizes.

If it cannot be done, the sphere of the earth will become it repeat the war under a barren clause 2 confrontation "Organization by which the charismatic figure has the centripetal force" and "Lazy democracy" on countless occasions in the future even if this civil war can be got over Such a cooped-up feeling in 0088 is an extremely serious, essential problem with the possibility of will cover in only now but the future in the sphere of the earth.

052

[illegible]

つまり今回の内戦は[illegible]兄弟カ小毛な争いを繰り広げ[illegible]すぎな、のである それは0087年のような確固たる対立とは正反対に 未来への無力感 か生み出さない 0088年の現在を取り巻く閉塞感とはそこから生まれているのか

ちょうとそれは中世[illegible]事に も似ている 二度目の世界大戦を終えた後 世界はイ[illegible]キー[illegible]よ[illegible]つの勢力圏に別れ「冷戦」状態となった たか「冷戦」が終了を迎えると 世界各地てイデオロキー不在の不毛な紛争が頻発し「冷戦」以上に世界は混迷した。この不毛な紛争は地球連邦成立まで 久く続くことになったのは広く知られている通りた。地球圏の現在の状 は それに似ている

もノネオ ンオンとエゥーゴの唯一違いを挙げるなら ンオンのこれ形見ーハ[illegible]オ・サビの存在しかないだろう ネオ・シオンが求心力として ミネバ

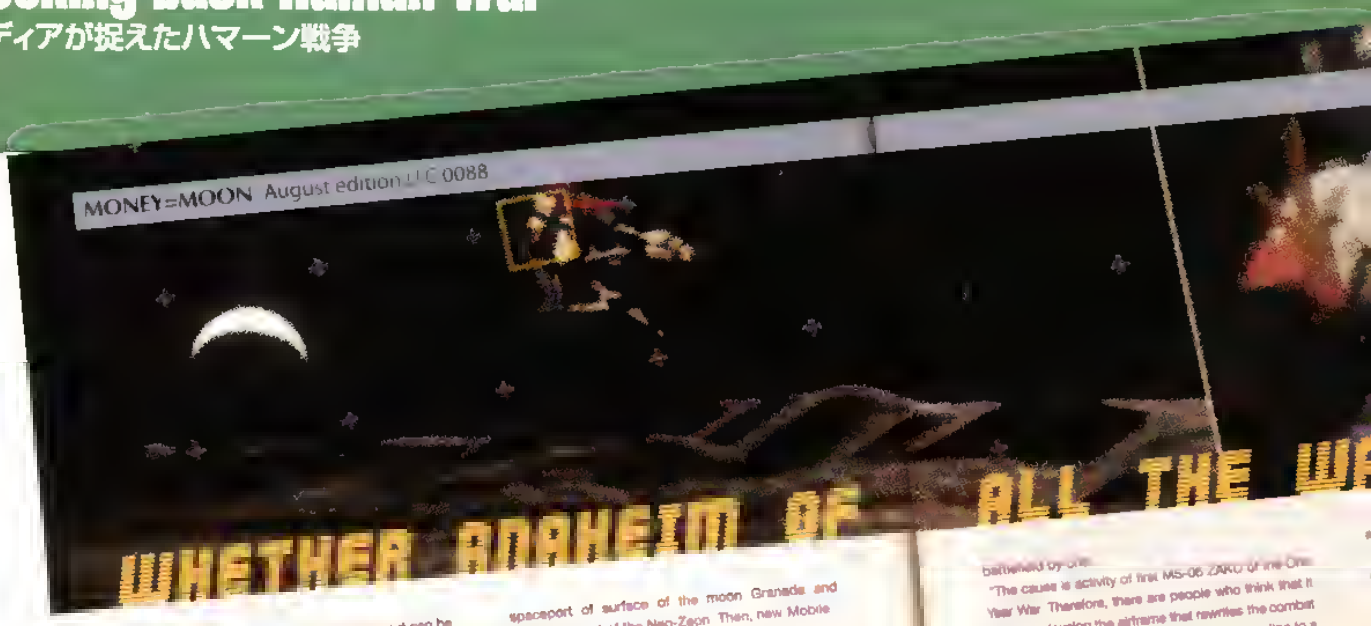
[illegible]時代錯誤[illegible]るザビ家崇拝を維持していることについては 反発も少なくない。しかし地球連邦と地球連邦軍が、民主主義の怠惰さを示しているため、反動でネオ・ジオンを支持する層もまた一定数存在することも事実た。

つまり本質的な意味で、この不毛な内戦を乗り越えるには ミネバが象徴する求心力を超える価値を、エゥーゴ、あるいは地球連邦が積極的に打ち出す必要があるのた。

もしそれができなければ、たとえ今回の内戦を乗り越えることができても、地球圏は今後幾度となく、「カリスマ的存在が求心力を持つ組織」と「怠惰な民主主義」という不毛な二項対立の下て 戦争(あるいはテロ)を繰り返さなくてはならなくなるだろう。このような0088年の閉塞感は、今だけでなく 地球圏の未来までも覆う可能性のある、きわめて重大で本質的な問題なのである

Looking back Haman war

メディアが捉えたハマーン戦争



The achievement of the is good Because it can be said it is natural the consolidation good for the Anaheim that became a maximum level conglomer ate in the place where it is a sphere of the earth however after it One Year War Another post supports sales even whenever the post somewhere is in a slump and the achievement is maintained

And the new kind of war is still continuing to present and the revival from the One Year War in addition in spite of on the way There is no reason why the achievement of Anaheim fails it becoming it so Arms of Anaheim destroy the town the heavy equipment of Anaheim revives the town, and, then the commodity of Anaheim is sold It is difficult to live in no relations to undertaking activities of Anaheim as long as it lives in the sphere of the earth

It is a role of the enterprise that offers the one necessary for the society of course by an appropriate price A big problem doesn't exist there even if it extends it to all the areas of life (if you exclude the problem such as Antimonopoly Law)

However, do when you begin to press the product against the society so that the enterprise may maintain our work?Anaheim begins to behave surely like that.

It is a fact well known to the public that Anaheim is a large sponsor of A.E.U.G. Anaheim has treated A.E.U.G with it as a matter of course as the proving ground of its own recruit machine The concrete case was observed in the surface of the moon ahead

Assault cruiser ARGAMA of A.E.U.G. done in spaceport of surface of the moon Granada and recent combat of the Neo-Zeon Then, new Mobile Suit of A.E.U.G was confirmed

It is said that a movable this suit had the following three features according to the Seenya Warehouse Jr of a military technological critic who analyzed the action of the movable this suit that the surveillance camera of harbors caught

・Tricolor color like RX 78 GUNDAM

・Large-scale beam saber in the upper part of backpack

It is strong Mega particle Canon in the head

Warehouse Jr are pointed out on that

"Even as for the block configuration of the chest and shape on the side in the body, the possibility that the core block system is adopted again, and the transformation mechanism is installed in addition is thought It is expected that it is a Mobile-Suit that frightens and is efficient even if it thinks from the destructive power of Mega particle Canon equipped with the head"

Because announcing to public A.E.U.G did not function basically since the latter half of year of U.C.0087 accurate information on this airframe is hardly known now However this airframe is and there is no thing that frightens and is expensive alone to doubt it.

Military commentator's Isaku Okabe is said that one fantasy always shadows it to the movable suit development It is said that the fantasy is a yearning to the high-performance aircraft that rules the

battlefield by

"The cause is activity of first MS-06 ZAKU of the One Year War Therefore, there are people who think that it wants to develop the airframe that rewrites the combat doctrine all at once in the MS developer according to a new airframe concept in no small way It receives the backup of rapid development by the miniaturization of generator and the technical side for example, making to high performance, and it has appeared to the airframe development in various shape."

However the movable suit developers in Anaheim keep still seeing the unfinished dream, and there is no be absorbed in in the development of the high-performance aircraft

Moreover, bureaucracy joins there further It is a main goal only to maintain our offices, and they secure and develop the budget setting up the plan for that And, an efficient movable suit is turned on to the battlefield without asking the significance of existence in the battlefield by the high cost completed as a result. Now, the battlefield is like a free research outlet of summer vacation for Anaheim

In the combat of tha fact and the Granada spaceport it was not the overwhelmingness of the A.E.U.G side though the new model machine was turned on

Why cannot A.E.U.G win?Only an appropriate number because of not turning it on to the battlefield it becomes as for appropriate arms good A.E.U.G. of Anaheim it if it purely thinks only about a military side (The incapacity of a federal government and a federal

MONEY=MOON U.C 0088

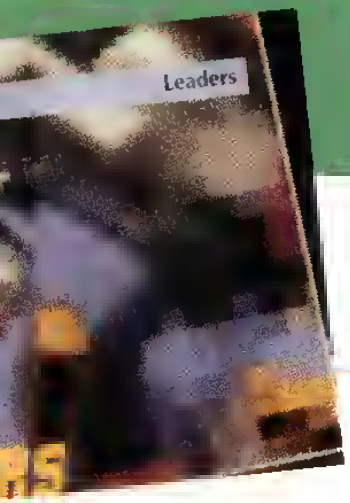
すべての戦争はアナハイムのため?

[illegible] A 社 [illegible] 年戦争 [illegible] 謝一般大衆 [illegible] AE [illegible] で連結決算な [illegible] [illegible] [illegible] 部署 [illegible] 調 [illegible] [illegible] [illegible] [illegible] 業務は推進され [illegible]

[illegible] 年動乱 [illegible] 復興 [illegible] 中 [illegible] すなわち第 [illegible] [illegible] [illegible] AE社 業績が下 [illegible] [illegible] AE社 [illegible] 場 [illegible] 重機カ [illegible] を復興さ [illegible] そ [illegible] E の商売が売 [illegible] [illegible] 圏 生 [illegible] A [illegible] 業活動 関わらずに生活する [illegible] 難

[illegible] 夢はもち [illegible] な価値 [illegible] 供 [illegible] 業の役割で [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]

MONEY=MOON / U.C.0088 August edition
誰のためのモビルスーツ?



politically goes up to the first on the list)
ociate professor space economist Kenseku
oleman, "A wholesome competing principle has
worked the arms delivery because it has held
U.G. as a sponsor of Anaheim. The sponsor for
activity is supposed to obstruct the purpose of
.U.G. consequentially." It points it out.
rd who was the automaker before developed, and
anufactured cheap T type Ford. It is said that it was
price in which workers at Ford's factory are
ached. And, the worker of the factory bought T type
ord by money that oneself had earned. In the favor
hat Ford had given birth to the cycle of such a plus.
Revolution" changed completely occurred human
ace's afterwards named the motorization life. The
relation between the enterprise and the society
originally like this.
However it is content with hugeness, and cannot
expect the spirit like Ford of Anaheim covered with
the ambition and the bureaucracy to hobby
development. In it Anaheim is proof only of the
virtual image it that has already lost the soul as the
enterprise.
Anaheim might progress big company disease, and
cause a further adverse effect for the entire sphere of
the earth if going as it is. It can be said that the reform
of management including the retirement of chairman
Melanie Hue Carbine and measures such as further
splits are necessary. Whether the earth federal
government whose influence is smaller than Anaheim
is good at such a thing or not?

MONEY=MOONは 8月号

弊社既刊「マスターピース ゼータガンダム」と「マスターピース νガンダム」、数あるモビルスーツの中でも、特にガンダム系モビルスーツの人気を物語るロングセラーとなっている

りも そこにさらに官僚主義カ ら彼ー ちの職場を維持す こそ第一目的なのてある そ かフ 予算を確保 開発を て結果としてできあか ト で高性能なモヒ スー は戦場での存在意義を問われないまま 戦場へと投入される。戦場は いまやAE社にと てまるで夏休みの自由研究発表の場なのた。

事実 プラナダ宇宙 各の戦闘では 新型機か投入されたにも関わらず ー側の圧勝というわけではなか た。

ー はとっし 勝てないか。純粋に軍事的側面たけ考えれば(政治的 は連邦政府と連邦軍の無能か重服にあがる それはエゥーゴかAE社のい な な 適切な兵器を 適切な数た 戦場に投入していないからた 経済学者のケ サク グクー マン准教授は「エゥーゴは AE社をス 抱え ま ため 兵器納入に健全な競争原理か働かな ヨ 。活動のためのスポンサーカ 結果的にエゥー の目的を阻害 な ている」と指摘する

自動車メーカー・フォートは 安価なT型フォ トを開発 製造し それはフォートの工場の労働者たちにも手か届く価格であったという。そ 工場の労働者は 自らか稼いた 金でT型フォートを購入 た フォト のようなプラスのサイクルを生み出したからこそ、モータリセーションと その後の人類の生活を一変させるような"革命"が起きたのである 企業 会の関係は本来こ ようにある きではないか。

一大てあることに安住し 趣味的な開発への野 と官僚主義にまみ れAEこれに オートのような精神は期待できない それはAE社か もはや企業と ての魂を失 た虚像に過ぎな の証でもある。

このままいけはAE社は大企業病か進行し 地球圏全体にもさらなる悪影響を及ぼしかねない メラー ヒュー カーハイン会長の退任を含む経営の刷新と さらなる分社化などの対策か必要といえる。あとはAE社よりも影響 さ 地球連邦政府にそんな かできるかとうかたけた

Daily Rising SUN / September 1, U.C.0088

ダブルゼータ・ガンダムを確認

A.E.U.G. & karaba recaptured Dakar. New Mobile-Suit "ZZ" is formally confirmed.

DAKAR, Senegal (UT)— The combat of the Neo-Zeon and A.E.U.G karaba Allied Forces was done in Dakar that had been occupied in the Neo-Zeon on the U.C.0088 August 31 (At the earth standard). Flagship SADALAHN in the Neo-Zeon is withdrawn from Dakar by this combat. The Dakar rule of the Neo-Zeon came to end in less than only 24 hours.

The Neo-Zeon where the earth invasion had been started decided Dakar where earth Congress was opened as the destination on August 1. And it succeeds in putting Dakar on the 29th under the power easily though there is not a strong resistance either. After it occupied it, the Neo-Zeon army had a party in the Guesthouse, and started the conciliation such as executives and the local celebrity of a federal government. However, the movable suit force of A.E.U.G develops the street fighting aiming at at the time of this party. The purpose of the strategy of Dakar recapture was accomplished in shape to pierce the chance of The Neo-Zeon.

The existence of new Mobile-Suit of A.E.U.G that existence has been rumored beforehand was formally confirmed by the combat in this street fighting. The side of announcing to public of A.E.U.G also declares the existence of new Mobile-Suit "ZZ Gundam" to each medium coverage. The existence appealed when a big working was done to the Dakar recapture.

The ZZ Gundam is made by the Anaheim electronics company. The core block system is adopted, and it is said that a variety of operation variations are possible airframes by the union transformation. However to touch a military secret, details any more were not revealed.

Moreover, the pilot is similar it. A.E.U.G clearly takes the posture of the no comment. When contending against last year's TITANS, A.E.U.G has the past record that promotes the student at a high school an important position as a pilot. Therefore, this time and the specialist to whom the child soldier does the view doubted that it is a pilot are not few.

Daily Rising SUN Morning newspaper September 1, U.C.0088

Hy

Only e
not was
AEUG a
Bajeena
Char Az
'Red Com
One Ye
Hyakn Si
on a
distinctiv
scheme
team in th
that the
build mi
under the
had a refi
coating t
the Hyak
personal
the end of
when it
damaged
against
Haman K
Quheley
0088 /
would de
battle th
was recov
later being
troupe
pilots stat
AEUG s
Argama
Zenn W
mmm Oi
Shiki in
assigned
pilot Quat
mengmito
Zenn's "
from the
The Hy
painted in

unit
.EUG
na (the
e from
ed in a
e gold
ly as a
ove
nild
their
tive,
hiki as
t until
ar,
maged
leader

NewHong Kong=Post Morning newspaper January 18, U.C.0089

Th Is

Greenwich
announced
Greenwich
the collision
MOUSA of
planetoid AX
under construc
side empty re
U.C.0089 (At
Neo-Zeon flee
received consi
impact of the c
and MOUSA t
the combat of t
done in the sam
the conclusion d
finally to be goi
with the Neo-Ze
for about one yea
year sooner or la
The rebellion is g
Neo-Zeon army o
U.C.0088. Therea
between the Neo-
continued. It is tho
thinks that the Neo-
were able to do the

Daily Rising SUN紙。9月1日付け朝刊

エゥーゴ・カラバ、ダカールを奪還 新型モビルスーツ「ZZ」を正式に確認

【ダカール発UT】U.C.0088年8月31日、地球標準時、ネオ・ジオン占領さ
れたダカールでネオ・ジオンとエゥーゴ・カラバ連合軍の戦闘が行われ、こ
れにより、ネオ・ジオンの旗艦サダラーンはダカールより撤退。ネオ・ジオ
ンの支配はわずか24時間足らずで終わることとなった。

1か月前、地球侵攻を始めたネオ・ジオンは地球連邦議会が置かれていた
ダカールをその目的地として定めていたが、強い抵抗もないまま29日にあっ
さりとダカールをその勢力下に置くことに成功、占領後ネオ・ジオン軍は
迎賓館でパーティーを開き、連邦政府の幹部や地元名士など、懇親に興じ
ていた。一方、エゥーゴ・カラバはパーティーの最中を狙ってエゥーゴのモビルスーツ部
隊が市街戦を展開。ネオ・ジオンの陥落を画策したが、ダカール奪還という作
戦目的を果たした。

この市街戦の中で戦闘でかねてより存在が噂されていたエゥーゴの新型
モビルスーツの存在がはっきりと確かめられた。エゥーゴ広報サイトも、各媒
体取材に対して新型モビルスーツ「ダブルゼータ・ガンダム」の存在を明言。
ダカール奪還に大きな働きをしたと、その存在をアピールした。

ダブルゼータ・ガンダムはアナハイム・エレクトロニクス社製。コア・ブロ
ック・システムを採用しており、合体変形によってさまざまな運用バリエーショ
ンが可能な機体になっているという。ただし、それ以上の詳細は軍事機密に
触れるため明かされなかった。

またパイロットについても同様。エゥーゴは明確にノーコメントの姿勢をと
っている。エゥーゴは昨年のティターンズとの抗争時に、ハイスクールの生
徒をパイロットとして重用した前歴があり、そのため、今回も少年兵かパイロ
ットではないかとうがった見方をする専門家も少なくない。

Looking back Haman war
メディアが捉えたハマーン戦争

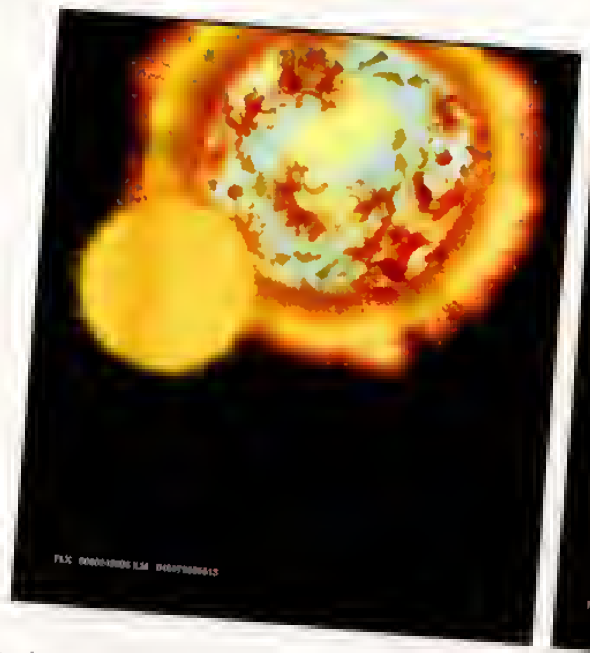
NewHong Kong=Post / January 18, U.C.0089

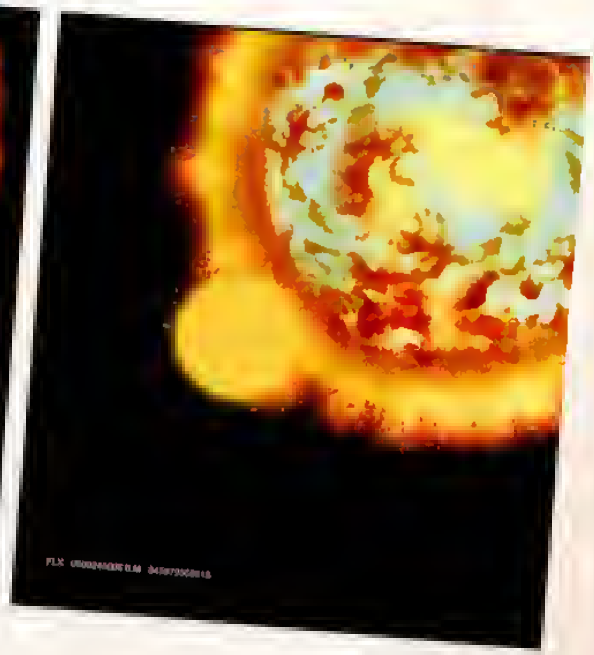
戦争の終結

e Neo-Zeon fleet receives a harsh blow. he war concluded?

itain (UT)—It was
Britain and
ervatory had checked
esidence block
ess CORE 3 and
f the Neo-Zeon
n visually in three
s on January 17,
earth standard) The
s that they
ble damage by the
ion of CORE 3
gh A.E.U.G. and
eo-Zeon were
area. As a result,
ration seems
go out to fight
at has continued
m U.C.0087

rated in the
ecember 25,
the combat
armies
that A.E.U.G.
n both armies
ce under this





situation, and executed the strategy in mobile battleship NAHEL ARGAMA.

Command cannot be able to be taken completely, and the Neo-Zeon fleet is said that there is a possibility that a lot of main executives died, too with the regency Haman Kam at the top according to the observation of the Greenwich Observatory according to military commentator's ISAKU OKABE. though details of the combat are not clarified now yet the action The federal warship corps has already been heading for the area, and it is expected that there are some announcements as soon as the situation is understood though there is no concrete announcement from A.E.U.G. now.

ネオ・ジオン艦隊、大打撃 戦争終結か

【グリニッジ発UT】U.C.0089年1月17日（地球標準時）イギリス グリニッジ天文台は サイド3空域に建設中だったネオ・ジオンのコロニー コア3と小惑星アクシズの居住ブロック・モウサの衝突を視認した、と発表した。同空域ではエゥーゴとネオ ジオンの戦闘が行われていたが、コア3とモウサの衝突の衝撃により ネオ・ジオン艦隊はかなりのダメージを受けたという。これにより早晩、U.C.0087年より約1年間にわたって続いてきたネオ・ジオンとの戦争にも、ついに終結宣言が出そうだ。

U.C.0088年12月25日、ネオ・ジオン軍の内部で謀反が発生。以後、ネオ・ジオン軍間での戦闘が続いていた。エゥーゴは、この状況の下でネオ・ジオン両軍に隙ができたと考え 新鋭艦ネェル・アーガマでの作戦を実行したとみられる。

戦闘の詳細は現在はまだ明らかになっていない が グラナダ天文台の観測によると ネオ ジオン艦隊の行動は完全に統率がとれておらず 軍事評論家のイサク オカベによれば、副総帥ハマーン・カーンを筆頭に、主要な幹部も多数死亡した可能性があるという。

現時点ではエゥーゴからは、具体的な発表はないが 既に現地へ連邦軍艦隊が向かっており 状況が把握され次第 なんらかの発表があると予想されている。

困難な技術的障壁を[illegible]クト、広範囲展開能力と[illegible]機の性能を追[illegible]求めて完成されたダブルゼータ・ガンダムは、にも関わらず、或いはそれゆえに、現在でもなお"恐竜的進化の袋小路"的な評価を受けている。

ある意味では、それは正しい。百式やゼータ・ガンダムはその後も後継機種が生産され、少数ではあったが実戦に投入もされている。では、これ以上はない優秀機であった本機は、なぜ以後量産化や、後継機種開発がなされなかったのであろうか。

これを考える際には、まずダブルゼータ・ガンダムのような存在がこの時代に求められた背景を考えてみるとよい。

グリプス戦役では、また大戦力同士の決戦といった様式の戦闘が行われる余地があった。地球連邦軍の正規軍であるティターンズは数多くの将兵を擁し、旗艦トコス・ギアをはじめとしてその戦力は充実していた。またこれに対抗するエゥーゴも人材の流入が活発に起こっていた時期である。その際に最も必要なのは、モビルスーツの頭数であった。

たが、グリプス戦役が終結してみると、エゥーゴは優秀なパイロットの多くを喪失しただけでなく、モビルスーツや艦船のほとんどを失っていた。旗艦アーガマも、残されたモビルスーツはわずかに傷付いたゼータ・ガンダムとメタスを残すのみとなるほどの痛手を受けていた。

そのような状態で、戦力の補強に何が優先されるかと言えば、たとえ少ないパイロットに、最高性能を持つモビルスーツを与えることである。

アーガマが修理と補給のために身を寄せたサイド1のコバンチ"シャングリラ"において、ネオ・シオンの戦艦エンドラが制圧のために派遣され、両者は交戦状態に入る。その際、アーガマは満身創痍のゼータ・ガンダムでこれをよく防いだ。

その後、ダブルゼータ・ガンダムが届けられるまで、アーガマは極小の戦力で戦う他なかったのである(メタスもその前に、すでに戦線を離脱していたとされる)。

たが、そうした事情はネオ・シオン側も同じだった。その頃のネオ・シオンに余剰の戦力などあろうはずもなく、これを率いる副総帥ハマーン・カーンにしてみれば、限られたアクシズの人員をどれだけ有効に活用できるかが最重要であったはずだ。

そのため、局地戦において絶対的有利を生み出そうと、新型機の開発に力を注ぐ一方、エゥーゴと同じように高性能機とエースパイロットの組み合わせでの戦力増強を目指すことになった。グリプス戦役直後には、こうした目的で様々に設計されたモビルスーツが、エンドラをはじめとする戦艦に多数、実験的投入されていたのである。

その頃には連邦軍は相当に弱体化しており、ハマーンによる政治工作の入り込む余地を作り出していた。疲弊していた地球圏に、対抗勢力はエゥーゴ、カラバに残された戦力しかなく、地球連邦軍はハマーンの外交策によって牙を抜かれた状態であったため、この戦略はある程度うまく運んでいた。たたし、ハマーン自身でさえ常に薄氷を踏んでいる気分であった可能性も低くはない。ハマーンにとっては、総力戦"だけは避けたかったに違いないからだ。

エースパイロットはアクシズ内で"貴族"として扱われ、下級パイロットたちの士気を鼓舞する役にも立った。その裏で、少数精鋭を極限まで推し進めるしかなかったアクシズでは、個の戦力のさらなる高レベル化を目論み、サイコミュ・システムを装備した機体を扱える人間を、人工的に作り出す研究すら進めていたのである。だが、余りにも性急に過ぎたその戦略は、結果的に多くの犠牲を出すのみとなり、やがて内部の内乱にも遣い戦力はさらに細分化される。▶▶

時代に求められたダブルゼータ・ガンダム

Double Zeta GUNDAM

requested in age

ANAHEIM ELECTRONICS

写真提供：アナハイム・エレクトロニクス
photographs by Anaheim Electronics

[redacted]は、結果として似たような思想の[redacted]機[redacted]いえる[redacted]ルスーツを必要としていたという[redacted]であり、その答えの[redacted]つがダブルゼータ・ガンダムだと言えるだろう。

ダブルゼータはまさきれもなく、その時代の最高性能を持つ機体であった。戦力の少なさを3機の分離飛行形態で臨機応変にカバーし、艦隊直掩、長距離砲撃と、応用範囲は広い。これこそ、当時のアーガマに最も必要とされていた"汎用性"という戦力であったのだ。

状況が変われば、必要とされる戦力は当然変遷する。たった艦1隻でユウゴの作戦行動を担っていたアーガマは、再[redacted]にわたる戦力増強の要請の結果、地球降下までに[redacted]式の再配備を[redacted]。また、ガンダムMk-IIとゼータ・ガンダムも戦線に復帰した。そして、ダブルゼータはチームの中の1要素としての役割に専念できるようになっていったのである。ハマーンの野望が潰えるに伴い、"汎用性の高い重モビルスーツ"としてのダブルゼータは、ここにその役目を終えたのである。

その後現在に至るまで、"ダブルゼータ・ガンダム"を必要とする状況は生まれていない。

だが、あのままハマーン戦争が続いていたならば、ダブルゼータの2号機や、後継機が誕生していた可能性は否定できない。事実、第一次ネオ・ジオン戦争(シャアの反乱)の際には、やはりネオ・ジオン側は贅沢に最高性能を追求した機体・

FULL ARMORED Double Zeta GUNDAM

The sddition*l armor syst*m was prepared for th* Doubl*-ZETA GUNDAM as oquipmsnt fer th* finsl dscisivs battle in th* "Hap* War" in U.C.0089. This was fh* ons fhat it wss made for trial purposes before this machiss completed, and fh* d*sign of the early expsrimsnt machiss fhaf was the sampls of fhs rsal movsmssf data collection wss reflected. It is intersstin* thaf opsration by "Full armor" not only has bssn assumed fo the specificaties sincs beginnin* though it is cosstructios of fho Double-ZETA GUNDAM called it wss a hard delivory but also ths epsrafies tes* by an a*ditionsl armor was actually done.**

AE ANAHEIM ELECTRONICS
写真提供*アナハイム・エレクトロニクス社
photographs by Anaheim Electronics

MSN-04 サザビーを開発し、投入している。これはシャア・アズナブルの率いるネオ・ジオンが、ダブルゼータが存在した時代と非常に似通った状況下にあったことを意味している。

サザビーは、サイコ・フレームを採用し、ダブルゼータ・ガンダムと同じくモビルスーツ本体にメガ粒子砲を内蔵する(サザビーは腹部であるが)など、やはり当時の最高性能を惜しげもなく盛り込んだモビルスーツとされている。ちなみに、この機体も実はAE社が開発を委託されて行っていたという噂があるのだ。

少なくとも、状況が必要とした開発コンセプトといった意味で、この機体にダブルゼータに酷似したものを感じるのは、筆者の突飛に過ぎる妄想だろうか?

ダブルゼータ・ガンダムとは、必要とされた状況の中で、その求められた能力を100パーセント以上に引き出された幸運な機体であったと言える。

ダブルゼータは決して恐竜のように滅んだわけではない。進化の可能性さえ多分にあったはずであり、時代さえ望めば、ダブルゼータ・ガンダムのコンセプトを継ぐ機体の登場の機会に、我々は今後巡り会うこともあるかもしれないのだ。■

フルアーマー"の追加装甲には、腹部にさらにもう1門のハイ・メガ・キャノンが設けられている他、機体各部のミサイル、オプションとして大型携行火器など、充実した装備が準備されていた。このことから類推できるのは、恐らくこの防御力と火力が、試作3号機「デンドロビウム」に求められた能力、つまりダブルゼータ・ガンダムが生まれた大本の"拠点防衛"という要求仕様案に従って設計されたであろうことである。この姿は、ダブルゼータの原初にして"到達点"であると言えるのかもしれない。

FULL ARMORED Double Zeta GUNDAM

Mony of tho enhonced equipmont such as e lot of missilee and lergo-ecele corrying fireorme of tho option wero prepered tor on edditionel ermor of "Full ermor" besidoe onothor High-Mega Cenon wae increased in the ebdomen. Perhepe, thie phylectic powor and thermol pownr eoom the ebility ond the eomo requosted from "DENDROBtUM" beconee of thie. It is eurmisabln would have been deelgned according to the specitication idna "Dnfnnne ot baee" of the foundetion demended from the Double Zeta GUNDAM in a word similarly. Thie eppeorance might be eblo to soy, "Attainment point" Double Zeta GUNDAM by koeping tho originol first.

ANAHEIM ELECTRONICS
写真提供：アナハイム・エレクトロニクス社
photographs by Anaheim Electronics

AF ANAHEIM ELECTRONICS
写真提供：アナハイム・エレクトロニクス社
photographs by Anaheim Electronics

1、2、3、4=通常に比べ厚さを“強化版”の装甲パーツに換装されたダブルゼータ・ガンダム。各部の塗装も完全には施されていないような化。写真=エナー[

運用面から見たダブルゼータ・ガンダム

From the Operation Side

By ISAKU OKABE イサク・オカベ

連邦軍・エゥーゴ系統のモビルスーツ史上、最も革新的とは言えないまでも、少なくとも最も野心的な構想のもとに生まれたのは、おそらくMSZ-010 ダブルゼータ・ガンダム ではなかったろうか たたしダブルゼータ・ガンダム開発を推し進める力となった野心は、それまでのモビルスーツにはなかった新技術を実現しようというものではない。その意味では最初にガンダムを名乗った機体である連邦軍のRX-78や、単機での大気圏突入と大気圏内飛行能力を実現しようとしたMSZ-006 ゼータ・ガンダムのような、モビルスーツの新しい次元をもたらそうとした機体ではなかった ダブルゼータは、さまざまなモビルスーツ技術の先端を盛り込み、それに従来のモビルスーツをはるかに上回る火力を与えるという、いわば非常に真っ正直に最強のモビルスーツを目指した機体であり、モビルスーツのあり方を明瞭に見据えたうえで、望ましい機能・性能を最大限に追求した機体だったのである。

一年戦争シオン軍のMS-06 ザクと、それに対抗するべく開発された連邦軍のRX-78が兵器としてのモビルスーツを確立し、ゼータ・ガンダムの世代でモビルスーツの可能性と性能の拡張が行われ、その集大成となったダブルゼータ・ガンダムは当時のモビルスーツ技術の到達点だったということができるだろう。

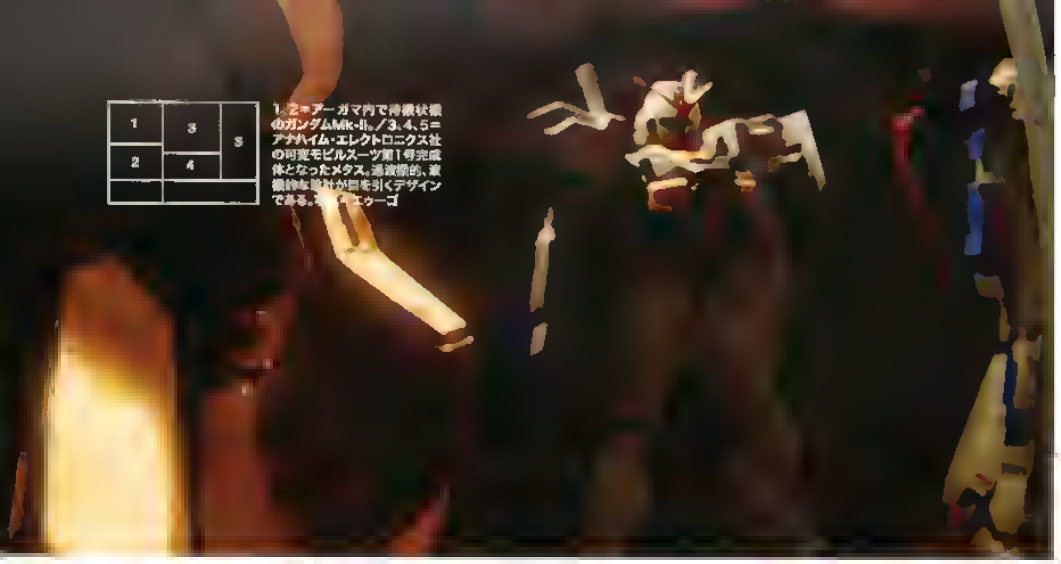
ダブルゼータ・ガンダムの技術的背景

ダブルゼータ・ガンダムは、3体による分割・独立運用と、3体を合体させたうえでの変形という特殊な機能を備えていた モビルスーツの機体を3つに分割し、それぞれが3機の小型戦闘機として運用できるという構想は、言うまでもなく一年戦争当時のRX-78 ガンダムのコア・ファイター、およびにもパーツ・システムに由来するものである。

RX-78のコア・ブロック・システムが、それ以降のガンダム・タイプ・モビルスーツに採用されることがなかったわけではないが、Aパーツ・Bパーツを含めて分離した3機が独立した戦闘能力を持つまでには至っていない それとともに同時期の連邦軍のモビルスーツ開発は、コア・ファイターのような戦闘機内蔵方式よりも、むしろNRX-044 アッシマーやORX-005 ギャプランのような、変形によって大気圏内飛行能力とそれによる地球での優れた機動性を目指した機体の方に重点が置かれることになる

連邦軍の変形・飛行型モビルスーツ構想は、一年戦争のジオン軍のモビルアーマーの高加速性や高機動性、大火力による威力に刺激を受けたものと考えられるが、実際にはジオン軍は地球大気圏内で飛行可能なモビルアーマーを実戦配備しておらず、大気圏内飛行能力を持つ変形型モビルスーツはむしろ連邦軍の独自のアイデアであったようである それが一年戦争後の技術進歩、特にジオン軍モビルアーマーの研究などから、この時期に具体化していったものと思われる。▶▶

イサク・オカベ [illegible] 生まれ 軍事評論家 コレ [illegible] 大学 [illegible] 軍事雑誌 [illegible] の編集長などを経て [illegible] 各種軍事雑誌や模型雑誌に記事や [illegible] を寄稿。著書に「ジオンMS部隊の終 [illegible] モ [illegible] ノグ・オ [illegible] MS」など。著書に「傑作MS列伝 ムキャノ [illegible] 」などがある。808TV [illegible] ュース番組「軍事 安全保障問題の解説も行う



1、2＝アーガマ内で待機状態のガンダムMk-II。／3、4、5＝アナハイム・エレクトロニクス社の可変モビルスーツ第1号完成体となったメタス。革新的、意欲的な設計が目を引くデザインである。

Earth Federation Forces RX-178 GUNDAM Mk-II

所属：ティターンズ→エゥーゴ　建造：地球連邦軍グリプス開発基地
全高：19.6メートル（64.3フィート）　頭頂高：18.5メートル（60.7フィート）
本体重量：33.4トン（73600ポンド）　全備重量：54.1トン（119300ポンド）
ジェネレーター出力：1930キロワット
スラスター総推力：81200キログラム（179000ポンド）
センサー有効半径：11300メートル（7.0マイル）
装甲材質：チタン合金セラミック複合材
武装：ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、
頭部バルカンポッド、ハイパー・バズーカ、シールド（ランチャー装備可能）

ムーバブル・フレームをはじめて本格的に採用した機体
ティターンズによって開発されたがエゥーゴに奪取される

U.C.0087

連邦軍の変形・飛行型モ[illegible]ノ構想は、一年戦争のジオン軍のモビルアー[illegible]の高加速性や高機動性、大火力による威力に刺激を受けたものと考えられるが、実際にはジオン軍は地球大気圏内で飛行可能なモビルアーマーを実戦配備しておらず、大気圏内飛行能力を持つ可変モビルスーツはむしろ連邦軍の独自のアイデアであったようである。それが一年戦争後の技術進歩、特にジオン軍モビルアーマーの研究などから、この時期に具体化していったものと思われる。

一方、アナハイム・エレクトロニクス社（AE社）は、これら連邦軍の可変モビルスーツ開発を横目で見ながら、アクシズのガザ・シリーズの情報を得て（ガンダリウムγ合金とともにシャアによって持ち込まれたと思われる）、やはり可変モビルスーツの開発を進めたが、これは意外に難航し、特に変形可能な機体フレームの強度確保に手を焼いたと言われる。

Anaheim Electronics MSA-005 METHUSS

所属：エゥーゴ　製造：アナハイム・エレクトロニクス社
モビルスーツ形態
全高：26.0メートル(85.3フィート)　頭頂高：18.1メートル(59.4フィート)
モビルアーマー形態
全高：6.2メートル(20.3フィート)　全長：21.8メートル(71.5フィート)
本体重量：27.5トン(61300ポンド)　全備重量：52.4トン(115500ポンド)
ジェネレーター出力：1540キロワット
スラスター総推力：77000キログラム(169800ポンド)
センサー有効半径：11300メートル(7.0マイル)
装甲材質：ガンダリウム合金
武装：アーム・ビームガン×2、ビーム・サーベル×3

可変モビルスーツ開発プロジェクトで誕生したテスト機
エゥーゴ旗艦アーガマに配備された

U.C.0087

MSA（ロ）メタスは可変能力の実現だけで精一杯ほどの機体となり、MSN 100 百式は結局可変機構を断念して実用化に漕ぎつけている。エゥーゴのゼータ・カンダムは、飛行形態・高加速高機動形態の"ウェイブライダー"へと変形し、ガンダムを名乗るモビルスーツとして初の可変能力を持つ機体となったが、その開発段階でエゥーゴは連邦軍のカンダムMk-Ⅱを捕獲しており、その機体の技術解析から、実用的なムーバブル・フレームと変形機構を習得したと考えられ、それがゼータ・カンダム完成への道筋を開いたといえる。

しかしダブルゼータ・カンダムの基本構想は、既にゼータ・カンダムの開発中にスタートしていた。しかもダブルゼータ・ガンダムはモビルスーツの機体そのものの変形よりも、RX 78以来のコア・ファイター構想の発展として、戦闘機3機の分割・合体と、戦闘機の変形によって、高加速性と機動性を実現することを目指していたので、モビルスーツとしての変形能力を必要 ▸▸

Earth Federation Forces NRX-044 ASSIMAR

U.C.0085

アッシマーの実用化は、ガンダムMk-IIに先立つこと2年。既存技術の応用で可変機構が実現できることを証明した機体ではあるが、ムーバブル フレーム機ではないため、機体は大型であった。

とする範囲は狭く、ムーバブル・フレームは限定的な部分に採用されただけであり、ダブルゼータ・ガンダムはムーバブル・フレーム技術に大きく依存する必要がなかった。言うなればAE社としては、不慣れなムーバブル・フレームに頼らずに、心得のある技術を進歩させて開発することができたのである。

もちろんそれでダブルゼータ・ガンダムの開発に技術的なネックがなくなったわけではなく、機体の3分割と合体のメカニズム、そのための強度確保や、分割機体による各種システム・機能の重複と、それによる重量増加や必要エネルギーの増加への対処、分割機体それぞれのコントロールやエネルギー・マネージメントのシンクロナイズなど、困難な技術課題は山積していた。その意味では、ダブルゼータ・ガンダムはAE社にとっても、それまでの同社のモビルスーツ技術と開発能力の集大成であったということができよう。

ゼータ・ガンダムでは搭乗予定のパイロットが設計に関与するという幸運があり、それが開発の迅速化を助けて、複雑な機体の早期の完成と、実戦での大きな戦果を生むこととともなった。しかしダブルゼータ・ガンダムの開発にあたって、AE社は、さまざまな技術的難関を予想して、むしろ慎重な手順を踏んでいった。たとえば戦闘機への分割・合体機構については、ひとまずその実用を先送りして、モビルスーツ状態での運用性を実証するための先行試作機を作っている。特にダブルゼータ・ガンダムでは機体強度と生残性について当初から不安があり、それを解消するために装甲強化型、いわゆる「フルアーマー」化のアイデアが早い段階で生まれていた。このダブルゼータ・ガンダム先行試作機ではこのフルアーマーの概念試験も行われており、AE社はそれらのテストと試験的な運用の成果を踏まえたうえで、ダブルゼータ・ガンダムの製造に至ったのであった。

Earth Federation Forces RGM-79SP GM SNIPERII

所属：地球連邦軍　建造：地球連邦軍　全高：18.0メートル(59.0フィート)
本体重量：45.0トン(99208ポンド)　全備重量：61.0トン(134481ポンド)
ジェネレーター出力：1390キロワット
スラスター総推力：102000キログラム(224871ポンド)
センサー有効半径：8700メートル(5.41マイル)
装甲材質：チタン・セラミック複合材
武装：ビーム・ライフル、ビーム・サーベル×2、
シールド、狙撃ライフル

U.C.0079

幸運のモビルスーツ?

それでもダブルゼータ・ガンダムの完成はグリプス戦役には惜しくも間に合わなかった。結局、ダブルゼータ・ガンダムが実戦部隊に配備されたのは、グリプス戦役直後と第一次ネオ・ジオン戦争初期という混乱のさなかで、これを使用するエゥーゴもほぼ壊滅に瀕していた。ダブルゼータ・ガンダムは、十分なテストや運用評価を経ないままに実戦に投入され、実戦のさなかにさまざまな改修が加えられていった。RX-78 ガンダムもゼータ・ガンダムも、ともに十分な試験運用もない状態で戦闘に参加しており、その点でこのMSZ-010 ダブルゼータ・ガンダムも、偶然とはいえガンダムと名乗る機体につきまとう不思議な宿命を負っていたようである。

一つダブルゼータ・ガンダムで幸いだったのは、3分割・合体方式を用いたことで、中心的機体であるネオ・コア・ファイターから順次戦闘に参加できたことである。他の2機、通称コア・トップとコア・ベースの前線到着前から、ネオ・コア・ファイターは単独でネオ・ジオン(アクシズ)軍モビルスーツとの戦闘に投入され、パイロットの優秀さも手伝い、それなりの戦果をあげている。その後、コア・トップ、コア・ベースも実戦部隊に到着し、実際に3機が合体して、モビルスーツ形態で戦闘を行ったのは、これら戦闘機の配備からしばらく後のことであった。この実戦投入の様態を見ても、ダブルゼータ・ガンダムでもう一つ幸運だったのは、偶然の成り行きから選定されたパイロットが、初期からほとんど奇跡ともいうべき操縦能力を発揮したことである。しかもパイロットはまったくモビルスーツ戦闘の訓練も受けていなかったにも関わらず、実戦戦闘中にモビルスーツ形態に初めて合体し、敵ネオ・ジオン軍モビルスーツを撃破している。

こうしてダブルゼータ・ガンダムは完成直後に実戦部隊に配備され、そのまま戦闘に投入、戦果をあげるという、これもまたガンダムの名を背負うモビルスーツらしいデビューを飾ることとなった。ダブルゼータ・ガンダムの目覚ましい実戦デビューは、グリプス戦役後に大幅に兵力を減じ、組織的な戦闘が困難となっていた時期のエゥーゴにとっても非常な幸運であったといえるだろう。

しかしその幸運は、ダブルゼータ・ガンダムを稼働状態に保ち、出撃を可能にした整備員たちの想像を絶する苦闘によって支えられていたのである。

ダブルゼータ・ガンダムのパイロットはいかに奇跡的な操縦能力の持ち主であったとはいえ、戦闘に関してはまったくの素人であり、しかもダブルゼータ・ガンダム自体が非常に複雑な機体で、操縦と機動は比較的容易であったとしても、運用の際の全般的な取り扱いは決して簡単ではなかった。いきおい、戦闘での損傷や不具合はほとんど出撃のたびに発生することとなり、整備員はその修理や整備、調整に忙殺されることとなった。ダブルゼータ・ガンダムの実戦行動の初期において、戦闘機各機が分離して行動することが多かったのは、足りない戦力を水増しする苦肉の策であったとする理由以外にも、おそらく合体・分離メカニズムの損傷や不調が多かったためではないかと思われる。さらに実戦投入初期であったことを考えると、合体してモビルスーツとなる場合のシンクロナイゼーションの調整にも整備員は手を焼かされたことは想像に難くない。

ダブルゼータ・ガンダムの実戦運用、特にその初期段階においては整備や調整にマンパワーが必要となることは、どうやらエゥーゴ側もメーカーのAE社も予想していたようで、資料によればダブルゼータ・ガンダムの配

Anaheim Electronics MSZ-006 ZETA GUNDAM

所属:エゥーゴ　建造:アナハイム・エレクトロニクス社
モビルスーツ形態
全高:19.85メートル(65.12フィート)　頭頂高:18.7メートル(61.4フィート)
ウェイブライダー形態
全高:24.32メートル(79.79フィート)　頭頂高:18.61メートル(61.05フィート)
本体重量:28.7トン(63300ポンド)　全備重量:62.3トン(137300ポンド)
ジェネレーター出力:2020キロワット
スラスター総推力:112600キログラム(248200ポンド)
センサー有効半径:14000メートル(8.7マイル)　装甲材質:ガンダリウム合金
武装:ビーム・サーベル×2、60ミリバルカン砲×2、ビーム・ライフル、
2連装グレネード・ランチャー×2、シールド、ハイパー・メガ・ランチャー

可変モビルスーツ開発プロジェクトの完成形
宇宙空間から重力下までの連続運用を可能とする機体

U.C.0087

備から間もなく、母艦と[illegible]いたアーガマに[illegible]ーゴの工作艦ラビアンローズから10人の整備員が移乗している。ラビアンローズは、本来的には艦船の補修と支援を任務とする艦であり、モビルスーツの整備支援のための要員はあまり多くなかったはずである。そのことから、これら10人の整備員は月のグラナダ、AE社から派遣された技術員であったと考えることもできそうである。

ただしそこでも一つ幸運な要素があり、ダブルゼータ・ガンダムがネオ・コア・ファイター、コア・トップ、コア・ベースに3分割可能で、それぞれが独立して運用可能だったために、各機で一部のシステムや機能が重複していたことである。そのためたとえばコア・トップのシステムに不調な部分があっても、他のネオ・コア・ファイターとコア・ベースでその部分を補完することがある程度可能だった つまりダブルゼータ・ガンダムは、たとえ十全な状態でなくても出撃可能とすることができ、しかも素人のパイロットは、機体の調子がいささか不十分であっても、それを深刻に気にすることなく任務を遂行してしまったのである。3機の合体・分離構想はいわば諸刃の剣で、運用上の多くの問題の原因ともなったが、それとともに問題を克服する要因ともなったと見ることもできよう。

これがゼータ・ガンダム系統のような精緻な機体で、しかもその性能を100パーセント駆使するパイロットが搭乗していれば、常に機体は完全な整備・調整が求められることとなったろう。ダブルゼータ・ガンダムでは、そのような一種の鷹揚さが運用の基底にあったようである。

その鷹揚さ、あるいは大ざっぱさは、ダブルゼータ・ガンダムの特徴というよりも、状況から強いられたものでもあった 完成直後に急遽実戦投入されたために、戦いながらさまざまな改善が加えられることとなり、メーカーのAE社から新しい機体部品やソフトウェアが次々に送りこまれ、それが機体に組み込まれていった。多くの場合、新部品やソフトウェアの追加や交換にはテストと調整が必要なのだが、ダブルゼータ・ガンダムではその時間や機会が足りず、新部品がぶっつけ本番で実戦出撃に使われることも少なくなかった

また、現場から交換部品を要求しても、AE社では既に旧式となりつつある交換部品を送り出すよりも、技術開発陣の要望により新部品の完成を待ってそちらを発送することもあり、現場では頼んだはずの交換部品の代わりに、見たこともない、海のものとも山のものともつかない新部品を受け取らされることとなった。

こんな状況の下では、ダブルゼータ・ガンダムの機体を完全な状態に整備することは非常に困難でもあった この困難さは、ダブルゼータ・ガンダムの技術的な問題や整備員の能力によるというよりも、予備部品や改修部品の供給態勢というロジスティックス面での問題であったといえよう。ダブルゼータ・ガンダムの配備当初は、そもそも機体やシステムのティーシング・トラブル（初期故障）も解決していないまま、素人パイロットたちの乱暴な取り扱いで多くの故障や損傷が生じ、その交換部品の補給に加えて、次々に押し寄せる改修やアップデートが重なり、アーガマ整備部門にとってはダブルゼータ・ガンダム関連のロジスティックスと整備はきっと悪夢のような有様となっていたことだろう

しかしエゥーゴは、当時弱体化していたとはいえ、月やコロニーの企業のスポンサーで活動していた準軍事的な組織であったため、連邦軍やネオ・ジオンのような正統な軍隊に比べれば、それほど官僚主義が強くなく、さまざまな状況の変化にも臨機応変に対応できたようである ▶▶

Anaheim Electronics FXA-07GB NEO CORE FIGHTER

所属：エゥーゴ　製造：アナハイム・エレクトロニクス社
全長：11.8メートル（38.1フィート）　全幅：15.8メートル（52.1フィート）
全備重量：11.8トン（[illegible]ポンド）

異常な威力

それも一因となって、時を経るにつれてダブルゼータ・ガンダムの運用は次第に手なれたものとなっていった。これにはパイロットたちが機体の取り扱いに習熟し、機体を壊すことが少なくなり、場数を踏むことによって戦闘技術も向上し、戦闘による損傷も減っていったことも影響したはずである。

ここで一つ注目したいのは、ダブルゼータ・ガンダムの操縦応答性が、通常のモビルスーツ・パイロットの操縦習熟度グラフ（いわゆる"ラーニング・カーブ"）を上回る速度で向上していった点である。新開発の機体であっただけに、エゥーゴとAE社ではダブルゼータ・ガンダムの出撃ごとに戦闘データログのダウンロードを行っており、しかもそのコピーが今日まで比較的良好な状態で残っている。その中から拾い出したダブルゼータ・ガンダムの応答性や運動性の推移を見ると、パイロットが同じ操縦入力を加えても、時期を追うことに機体側の反応速度や精度が高くなっている傾向を読み取ることができる。極端に言えば、機体の応答がパイロットに歩み寄っていった、機体がパイロットの意を汲み取っていったかのように見えるのである。

この向上は、もちろん度重なる改修やソフトウェアのアップデートによるものと解釈することもできるが、一つの仮説としてダブルゼータ・ガンダムにはゼータ・ガンダムと同様の、あるいはそれよりもさらに高度な"バイオセンサー"機能が備わっていたと考えることができそうである。単に機体の応答性や操縦性だけでなく、当時の整備員もデータロガーの解析から、ハイパー・ビーム・サーベルのような装備武器が基本スペック以上のエネルギー出力や威力を発揮したと推測される、と整備・技術部門のメモに記録している。それが事実とすれば、バイオセンサー機能が備わっていたことの状況証拠と解釈することもできよう。

U.C.0088年8月。ネオ・ジオンは連邦議会のあるダカールを制圧するため、ついに地球に侵攻を開始した。アーガマはこれを阻止すべく、パリュートを用いて地球に降下。ガンダムチームと二手に分かれてダカール攻撃を目指した。

ダブルゼータ・ガンダムの[illegible]イオセンサー機能については、今日それを実証する資料は見つからず、真偽のほどは推測するしかないが、少なくともダブルゼータ・ガンダムはパイロットの操作に対する応答を改良していくプログラムがなされていたようで、それはまた機体にパイロットのクセがつくことともなった。実際、ダブルゼータ・ガンダムの運用が改善され、分離形態よりもモビルスーツ形態での出撃が多くなると、機体は自然にパイロットの操縦に馴染んでいったようである。そのため初期にはダブルゼータ・ガンダムの運用には3機の戦闘機にそれぞれパイロットが搭乗して、合計3名が必要だったのに対し、後の戦闘では1パイロット1名での出撃が増えている。これはパイロット以外の操縦者にとって、ダブルゼータ・ガンダムがどこかしっくりこない操縦性を持つようになったためであると考えられるが、慢性的にパイロット不足の状態にあった当時のエゥーゴ、特にゼータ・ガンダムや百式、ガンダムMk Ⅱと[illegible]った有力モビルスーツの配備を受けていたアーガマにとって、ダブルゼータ・ガンダムをパイロット1名で運用できるようになったことは、また一つ幸運なことでもあったろう。

しかしさらにダブルゼータ・ガンダムで奇妙なことは、機体の応答性・操縦性学習能力だけでもまだ説明の難しい戦果がしばしば記録されていることである。たとえばごく初期の、まだパイロットが機体の操縦にもモビルスーツ戦闘にも習熟していない段階で、ネオ・ジオン軍のサイコミュ搭載モビルスーツ（AMX-103 ハンマ・ハンマであったといわれる）を撃破している。その後もダブルゼータ・ガンダムはネオ・ジオン軍のAMX-004 キュベレイや、元連邦軍ティターンズのMRX-010 サイコ・ガンダムMk Ⅱなどのサイコミュ兵器搭載モビルスーツによる全方位・オールレンジ攻撃に幾度もさらされながら、致命的な損害を受けることなく、しばしば敵を撃破することに成功している。▶▶

このページに掲載されたモビルスーツは、第一次ネオ・ジオン戦争(ハマーン戦争)において実戦に参加したとされる機体である。ネオ・ジオン側のモビルスーツについては、そのほとんどについて記録が存在しない。また、機体も現存しないことから、これらわずかに残された写実資料は貴重である。

それ以外にも[illegible]タルセータ[illegible]戦果は群を抜いており[illegible]ハイロットは、何か超越的な能力があるのでは[illegible]と考える者がハーフマの整備・技術員の中にもいたと言われる。当時ニュータイプと呼ばれる、超越的な空間認識や状況認識能力と、それによる的確な戦術判断を示すさらには一種の予知能力やテレパシー能力まで持っていたという話もあるが)ハイロットの存在が知られており、ダブルセータ・ガンダムのハイロットもその一人ではないかと受け止められたのである。

グリプス戦役のエゥーゴでは、セータ・ガンダムのハイロットのカミーユ・ビダンがニュータイプといわれ、エゥーゴ指導者の一人、クワトロ・バジーナもニュータイプとされていた。しかしグリプス戦役後、カミーユ・ビダンは戦列を離れ、クワトロ・バジーナは行方不明となり、エゥーゴはニュータイプとして知られるエース・パイロット両名を失うこととなった。ダブルセータ・ガンダムのパイロットをニュータイプであろうとする見方には、弱体化したエゥーゴの中での、一種の救世主願望のような心理も働いていたのではないだろうか。

[illegible]ダブルセータ[illegible]の優れた実戦成績は、機体の特徴である強力な火力によるものもあった。ダブルセータ・ガンダムの武装であるダブル[illegible]ム・ライフルは、銃身を2つ並べ[illegible]によって威力を倍加しようという非常に画期的な武器で確かに威力は大きくなったが、重く、取り回しの難しい武器でもあったとされる。しかしダブルセータ・ガンダムは機体の駆動パワーの大きさと、応答性・操縦性の良さにものを言わせて、このダブル・ビーム・ライフルを不自由なく使いこなしている。またダブルセータ・ガンダムの最強武装、ハイ・メガ・キャノンも重要な局面で期待通りの威力を発揮し、ダブルセータ・ガンダムは第一次ネオ・ジオン戦争の要所要所で戦局を決定づける働きをすることができた。

しかし大火力には代償もあり、どちらの武器もエネルギー消費が非常に大きかった。それに対応してダブルセータ・ガンダムは格段に大きなジェネレーター出力を備えていたが、それでも長時間の戦闘では火器のエネルギー系統にオーバーロードやオーバーヒートを起こす恐れがつきまとったという。

Neo Zeon
AMX-011S ZAKUIII CUSTOM

所管 ネオ・ジオン　製造:ネオ・ジオン
全高・不明　頭頂高:21.0メートル(68.9フィート)
本体重量:44.3トン(97664ポンド)　全備重量:71.4トン(157410ポンド)
ジェネレーター出力:2860キロワット
スラスター総推力:211500キログラム(466200ポンド)
センサー有効半径:9700メートル(6.02マイル)
個甲材質:ガンダリウム・コンポジット
装備:ビーム砲×2、ビーム・サーベル×2、30ミリバルカン×2、ハイド・ボンブ投下機

ザクIIIに機動力や装甲強化といった
最新鋭戦闘用兵器を装備したモビルスーツ

U.C.0089

1	2
	3
	4

1、2＝ザクIIIは、第一次ネオ・ジオン戦争末期に投入された機体。ジオンはザクの"正統"な後継であると主張したとされる。／3＝試験的に実戦投入されたハンマ・ハンマ。／4＝対峙真鈴を取るドーベン・ウルフ。写真＝エゥーゴ

Neo Zeon
AMX-014 DÖVEN WOLF

所管:ネオ・ジオン　製造:ネオ・ジオン
全高:不明　頭頂高:22.0メートル(72.2フィート)
本体重量:36.8トン(81130ポンド)　全備重量 74.5トン(164244ポンド)
ジェネレーター出力:5250キロワット　スラスター総推力:87300キログラム(192400ポンド)
センサー有効半径:12000メートル(7.45マイル)　装甲材質:ガンダリウム・コンポジット
武装:ビーム・カノン、ミサイルランチャー、大型対艦ミサイル×2、インコムビーム、
30ミリバルカン砲×2、メガ粒子砲、グレネード弾用ランチャー×2、ハンドビーム×2、
肩シールド(ラカン機専用)、ビーム・サーベル、メガ・ランチャー無ビーム・ライフル

サイコ・ガンダムMk-IIを研究してネオ・ジオン軍が開発した
モビルスーツ。サイコミュ兵器の一般使用を可能とした

U.C.0089

アステロイドベルトに雌伏している間、アクシズは独自に多数のモビルスーツを開発、生産して地球圏への侵攻の準備を着々と進めていた。中でも、サイコミュ・システムを搭載したAMX-004 キュベレイは、副総帥であるハマーン・カーンの乗機として造られ、グリプス戦役と第一次ネオ・ジオン戦争を通じて第一級の機動性と攻撃力を示した。高性能のモビルスーツを象していたネオ・ジオンの戦略を象徴する機体であった。

特にハイ・メガ・キャノンは1回発射すると、火器エネルギーの大半を使ってしまい、エネルギー系統への負荷も極端に大きく、発射後のオーバーロードやオーバーヒートによって各所に故障が発生したようである。当然、ハイ・メガ・キャノンの使用は整備・補給面にも大きな負担を強いることとなり、ハイ・メガ・キャノン発射には運用上の制約もあったことだろう。あるいは主パイロットが整備員に「気を使って」、本当に必要な戦術局面以外でのハイ・メガ・キャノンの使用は控えたのかもしれない。ダブルゼータ・ガンダムの戦歴記録の中で、ハイ・メガ・キャノンの発射回数が意外に少ないのは、それらが理由だったと思われる。

ダブルゼータ・ガンダムは第一次ネオ・ジオン戦争の最終段階で大破し、それ以後実戦部隊に戻ることはなかった。しかしネオ・ジオン軍の可変型モビルスーツやサイコミュ搭載モビルスーツのほとんどすべてに勝ち、戦争をエゥーゴの勝利のうちに終結させるうえで大きな力となったことは間違いない。その功績でも、ダブルゼータ・ガンダムは当時の最強のモビルスーツであったといえよう。

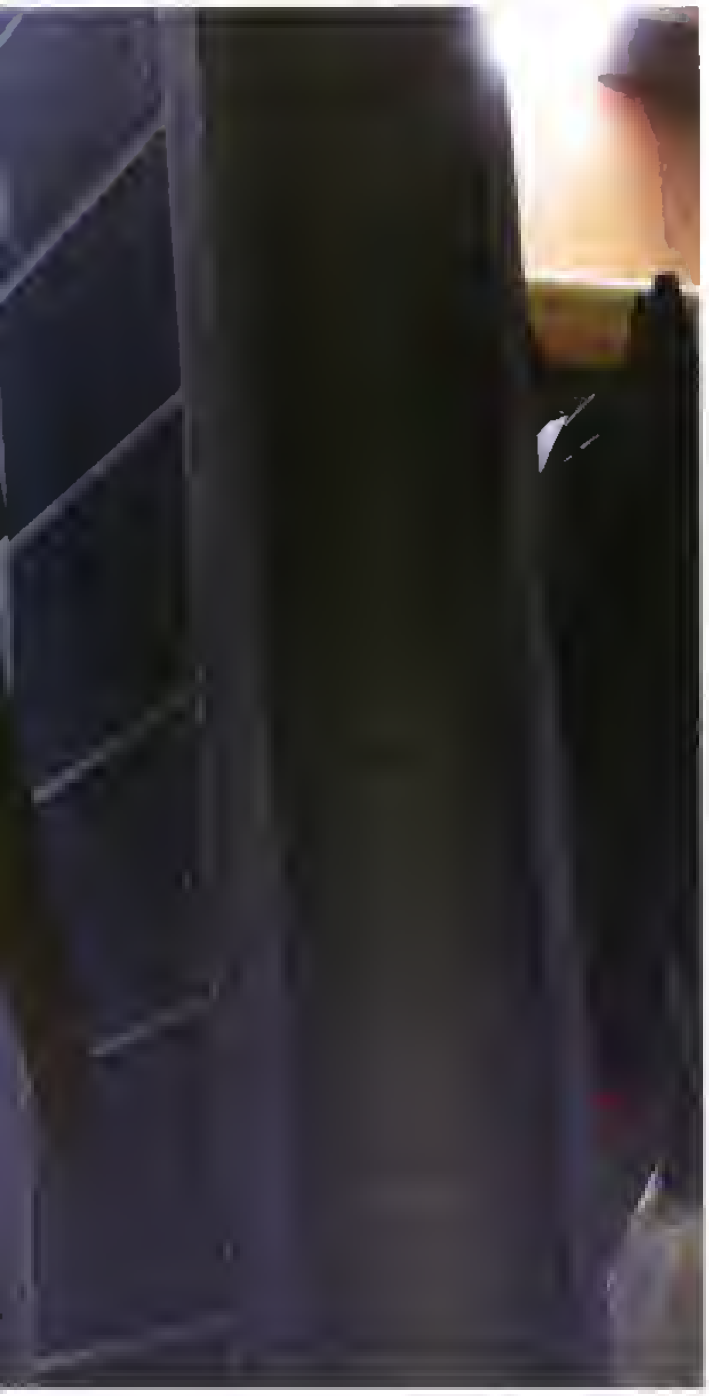
ダブルゼータ・ガンダムの後、AE社のモビルスーツ開発は、再びゼータ・ガンダム系の改良・発展の方向に戻って、ダブルゼータ・ガンダムのコア・ブロック構想も、分離・合体構想も後の機体に採り入れられることはなかった。強力なハイ・メガ・キャノンも、エネルギー消費と機体への影響の大きさから、後のモビルスーツの武装の主流とはならず、AE社も、よりエネルギー効率に優れ、柔軟な運用のできるサイコミュ兵器の開発へと傾いていくことになる。もし本当にダブルゼータ・ガンダムがバイオセンサーを装備していたと考えるならば、AE社はその成果を足掛かりにサイコミュ兵器の開発に踏み切っていったということもでき、そうであるとすれば、ダブルゼータ・ガンダムは当時のモビルスーツの到達点であるとともに、次世代のモビルスーツへの道を開いた機体であったとも言えるのではないだろうか。

ANAHEIM ELECTORONICS Group.

Our company has helped "Bridge over the Universe and Earth" of the achievement of a livable living inthe people in the earth and universe as a slogan when the U.C.0100.
It is a start to the future for a human race today who regains peace.
AE will assume the contribution to the human race by the technology of various fields that have been piled after it establishes to be uppermost pleasure, and go forward in the future.

ガンダム・チームが象徴していたもの

THE GUNDAM TEAM



Z計画の全貌とは

本書で扱うダブルゼータ・ガンダムは、[redacted]ネオ・ジオン戦争(ハマーン戦争)の折、同時期に[redacted]その他のガンダムタイプ・モビルスーツと連係した作戦行動を取っていたとされる。

ガンダム・チームと呼ばれるアーガマ艦載のこれらのモビルスーツたちは、外見上の特徴を初代ガンダムから受け継いだというだけでなく、フレーム技術や開発経緯においても繋がりを持っていたのである。

ここでは、ガンダム・チームのモビルスーツの開発経緯を検証することで、アナハイム・エレクトロニクス社(AE社)内における複数の開発プロジェクトの存在について掘り下げる。

注目したいのは、MSN-00100百式という個体である。

グリプス戦役中に、かのクワトロ・バジーナ大尉(シャア・アズナブル)の乗機として活躍した百式は、従来Z計画の一部に組み込まれた存在として語られてきた。すなわち、"全地球到達任務に耐えうる機体として、ウェイブライダーに可変する能力を持たされたゼータ・ガンダムの、テストベッドとして開発された。というものである。

現在までに明らかになっている事実を整理すると、百式はもともと、δ(デルタ)の開発コードを持っていたとされる。百式は、デルタ・ガンダムとして開発されていた機体なのだ。

このデルタ・ガンダムについては諸説あり、大きく分けると設計のみで実機は建造されなかったとする説、試作の実機が存在したという説の2つに大分される。前者については、ネット上のファンサイトで公開された"デルタ・カンダム"とされるモビルスーツのコンピューター・シミュレーション画像を含む情報によって流布され、混乱の中から生じた噂であった。だが、筆者はデルタ・ガンダムの実機は存在した可能性が高い、と考えている。

デルタ・ガンダムはゼータ・ガンダムの可変機構のテストのために建造されたが、機構の強度不足などの諸問題が露見し、結果として非変形モビルスーツである百式タイプを生み出すに至ったとされる。この時、もしその不具合がコンピューター・シミュレーション上で発見されたものだとするなら、百式は誕生しなかったはずである。ゼータ・ガンダムを成立させる重要なファクターとなったガンダムMk-IIのフレーム技術の導入か、仮に設計段階でもたらされたならば、デルタ・ガンダムは百式ではなく、可変モビルスーツ"デルタ・ガンダム"として成立していたに違いないからだ。

δ計画が最終的に百式に至ったのは、そこに既に可変モビルスーツとして完成しなかった実機が存在したからと考える方が自然である。

恐らくは、ティターンズの施策に異を唱える人々が増え、エゥーゴ側に続々とモビルスーツ・パイロットを含む戦闘者が流入していた時期に、エゥーゴが戦力の増強をAE社に打診した結果、その要求性能を満たすモビルスーツとしてδ計画の成果物を急遽、完成型へと仕上げる必要に迫られたからではないだろうか。

つまり百式とは、デルタ・ガンダムとして完成するはずだった個体(もしくは、その試作機のうちの1つ)を、"非変形"モビルスーツ、百式として仕上げたものだとする仮説である。

その時点で、百式は非変形モビルスーツとしては、当時の新鋭機だったγ(ガンマ)ガンダム(=リック・ディアス)以上の完成度を持つ高性能機として、クワトロ・バジーナ大尉専用機として納入された。研究中であったビーム拡散効果を持つ特殊コーティングを施されたことからも解るように、百式はダブルゼータ・ガンダムと同じく"実験的試作機"という共通した性格を有していたのである。

り、変形[illegible]成したゼ-[illegible]ンガンダムはどうたったのか

ゼータ・ガンダムは、その専任搭乗者であったリミーユ・ヒダンの発案によるもの、と当時のエゥーゴのリリースにはある 変形のコンセプトと Z(ゼータ)」の名が、ガンダムMk II 奪取作戦に協力し、ニュータイプの再来ではと期待さえされたカミーユのアイデアである、と喧伝することは、仮にそれが事実ではなかったとしても、プロパガンダとして利用するには都合が良かったであろう。

以前から指摘されているように、ゼータ・ガンダムにはガンダムMk II 奪取事件までにロールアウトした、複数のプロトタイプが存在したとされている。残された当時の資料から3機までが確認されているこのプロトタイプ・ゼータ・ガンダムは、いずれも非変形モビルスーツとして設計されていた

非変形の実験機が後にゼータ・ガンダムとして結実し、それとは別に変形モビルスーツとして準備されていたデルタ・ガンダムが、最終的に百式としてロールアウトしたという逆転の現象が同時期に発生したことは興味深い。

筆者の持つ情報ソースは(事情は明かせないが)、百式関係の資料が特に充実している そこで、百式に繋がる開発計画の内容を検証することで、Z計画の全貌に切り込んでみたい

百式を開発した天才

ここでは、百式の開発に関った人物たちについて俯瞰してみる。

百式誕生の礎となったデルタ計画には、まず外部のスタッフとしてIHシオン公国軍製モビルスーツの開発に携わった古林、アレクサントロ・ピウツスキがγ計画からスライドして総合技術オブザーバ として就任したという 変形システム、及びムーバブル・フレームの開発はゲルハルト、グルックやカツミー、エンュメルか、ジェネレーターや熱核ロケット シェットの開発は、オスカー・ライエルが手掛けたとされる。

彼らを奮起させたのは、一年戦争前後に地球連邦軍モビルスーツ開発局でムーバブル・フレーム的な構想を持ち、研究を行っていたグループ、通称 ペンタゴナ の存在にあった。

ペンタゴナのメンバーには、バンネンバー、ハヤミやフランクリン・ビダン、後にNRX 044 アッシマーを手掛けるO・クワラら錚々たる技術者がおり、戦後になってM・ナガノ博士も参加したと言われる。

百式は他のモビルスーツと異なり、開発主任であるM・ナガノの名前が前面に出ている稀有な機体であるのだ

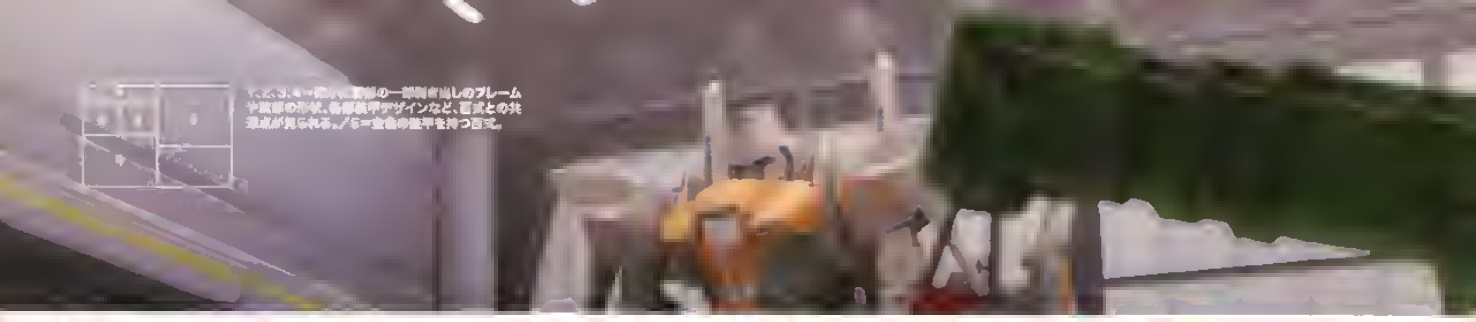
U.C.0083年に起きたデラーズ紛争によりAE社は多大な損害を出しており、カイリー、ジョンソンやピウツスキを中心にγガンダムを開発することとなった 彼らによるモビルスーツの外観やコンセプトを具現すべく、元ペンタゴナのメンバーであったナガノに白羽の矢が立ち、設計主任として抜擢されたのだ そして、彼は大御所を相手に奮闘し、リック・ディアスを完成させたのである。

この時の功績がAE社内でも認められ、新たに立ち上げられたδ(デルタ)計画の際に彼を主任とする第3開発局が設けられた。ここは後に別名 ナガノ技術部」とも呼ばれ、デルタ・ガンダムの開発までに零式試作機と呼ばれるδ・フレームの雛形を作っていたらしい。また、同フレームを利用して、開発コード ε(エプシロン) エプシィ・ガンダムを企画していたようだ これらは全てグリプス戦役の勃発に伴い、百式として整理されてこの機体の礎となった。

その後も、ナガノ技術部は新しく設立された第5開発局で進められたZ計画にも協力しており、MSZ 006 ゼータ・ガンダム

Anaheim Electronics DELTA GUNDAM

1、2、3＝これがデルタ・ガンダムの実機とされる写真である。これらの写真の入手元は不明だが、専門家によると少なくとも作業スペースの内装は間違いなくアナハイム・エレクトロニクス社の工場であるという。



のト地を用意したのである また δ 計画の外部スタッフは殆どそのまま Z 計画に組み込まれ、第5開発局へ移っていたようだ

一方で、UC 0085年当時から計画されていたモビルスーツ開発プランの一つが難航していた後に「ZZ計画」とも呼ばれるこの機体 θ（シータ）ガンダム の開発計画にも、ナガノは参加していたのである

とか、ナガノの時代は長くは続かなかった その存在を快く思わなかった（恐らくAE社内の） 派により、ナガノが第4開発局を通してティターンズに協力したとする風説が立ったのだこの醜聞により彼は表舞台から去った、最後に彼の機体として発表されたのは δ フレームの機体ではなく、γ 計画の発展機 RMS 099B シュツルム・ディアスであったという」

その後、MSN 00100 百式は、開発主任が代わっても改良が続けられ、当初クワトロ・バジーナ大尉用として独特のチューニングが施されたワンメイクマシンも、グリプス戦役の活躍からリック・ディアス同様にエース専用機として生産が可能なように改良されたという

中でもMSR 00100S 百式改は、百式の後継機でもあり、外装こそ大きく異なるものの内部パーツは共用規格化されていた

また、 部百式と同じ外装やバックパックを用いることでMSR 00100S 増産型百式改と呼ばれる機体が組み上げられたのであった

なぜ、これほどまでに百式が急遽 増産機として体系化するほどパーツが増産されたかと言えば、グリプス戦役でティターンズとの戦闘によって損耗したエゥーゴの戦力を立て直すために、新たに迎え入れる兵士たちに対し、ネオ・シオンとの対決姿勢を象徴化するガンダム神話が必要となったからであろう皮肉なことにシオン系のラインが強いγ・フレームのモビルスーツは、地球連邦の主流となったエゥーゴの機体としては敬遠されたらしくである（たたし 部のエース パイロット用は完成度の高かったγ・フレームを利用した新モビルスーツが急速建造され、優先的に配備されたこともあった）

こうして準ガンダム・タイプの百式は、百式改とのコンバーチブルモデルとして、かつてのリック・ディアスの位置付けで少数が追加生産されることとなり、エゥーゴ、カラバ問わずエース・パイロット向けに配備されたのである。

余談だが、ナガノが去った θ 計画は、その後コバヤシとレシルらへ引き継がれ、MSZ 010 ダブルゼータ・ガンダムとして花開き、ハマーン戦争を終結へ導くフラグシップ機となっている。

本誌でフィーチャーしているダブルゼータ・ガンダムの開発の系譜を"開発者"の観点から眺めると、同時代に並列、もしくは交差するように走るモビルスーツの開発計画の中に、このようにM・ナガノという一人の天才の姿を見出すことができるのである。

例えば、前項で述べたプロトタイプ・ゼータ・ガンダムの3機は、頭部がそれぞれネモ系、ディアス系、百式系であったことが確認されている。これも、初期のZ計画にナガノやデルタ・ガンダム建造に携わったスタッフたちが関わっていたことを裏付ける証拠となり得るものだ

だが、それが大きな誤解を発生させることにも繋がった。3機のプロトタイプ・ゼータ・ガンダムが百式に似たヘッドを持っていたこと、そしてナガノ博士が δ 計画に参画していた事実、この2点を単純に結びつけてしまったことで、百式があたかもゼータ・ガンダムの可変機構検証用のテストベットであったと広く信じられたのであろう。

次項では、さらに「ムーバブル・フレーム」と呼ばれるモビルスーツ建造の基礎技術について考察し、その裏付けを検証する。

Anaheim Electronics MSN-00100 100 SHIKI

所属：[illegible] 製造：アナハイム・エレクトロニクス社
全高：21.4メートル(70.2フィート)　アンテナ高：19.2メートル(63.0フィート)
頭頂高：18.5メートル(60.7フィート)
本体重量：31.5トン(69400ポンド)　全備重量：54.5トン(120200ポンド)
ジェネレーター出力：1850キロワット
スラスター総推力：74800キログラム(164900ポンド)
センサー有効半径：11200メートル(6.96マイル)
装甲材質：ガンダリウム合金
武装：ビーム・サーベル×2、ビーム・ライフル、60ミリバルカン砲×2、
クレイ・バズーカ、メガ・バズーカ・ランチャー

可変モビルスーツ開発プロジェクトで誕生した非変形機
パイロットはクワトロ・バジーナ大尉

U.C.0087

百式の最大の特徴である金色の装甲は、当時実用化されたばかりの対ビーム・コーティングが、この色でしか施工できなかったことに由来するとされている。"赤い彗星"シャア・アズナブルは、それを敢えて承知で新技術を受け入れたという。この金色は、肉眼で見る時、コンピューター・グラフィックで処理されたコクピット内モニターで見る時など、その光沢の様相を様々に変化させたとも伝えられる。

ムーバブル・フレームの開発史から見るZ計画

現在、ムーバブル・フレームと言えば、モビルスーツの内骨格程度の意味しかなく、被弾した場合の装甲の換装に優れるというメンテナンス面しか強調されていないのが実情である。

しかし、UC 0080年代半ばまでのムーバブル・フレーム採用機と言える機体群でも、実際には同じことがある程度可能だったようだ。テラーズ紛争時に投入されたオーガスタ系の機体であるRGM-79N ジム・カスタムやRGC-83 ジム・キャノンⅡでも部分的にムーバブル・フレームが使われていたのである。このフレームは別名オーガスタ・フレームと呼ばれ、後のグリプス製試作機RX-178 ガンダムMk-Ⅱやコンペイトウ製試作機RX-121 ガンダム、ニュータイプ研究所製のNRX-044 アッシマーやORX-005 ギャプラン等に影響を与えている。

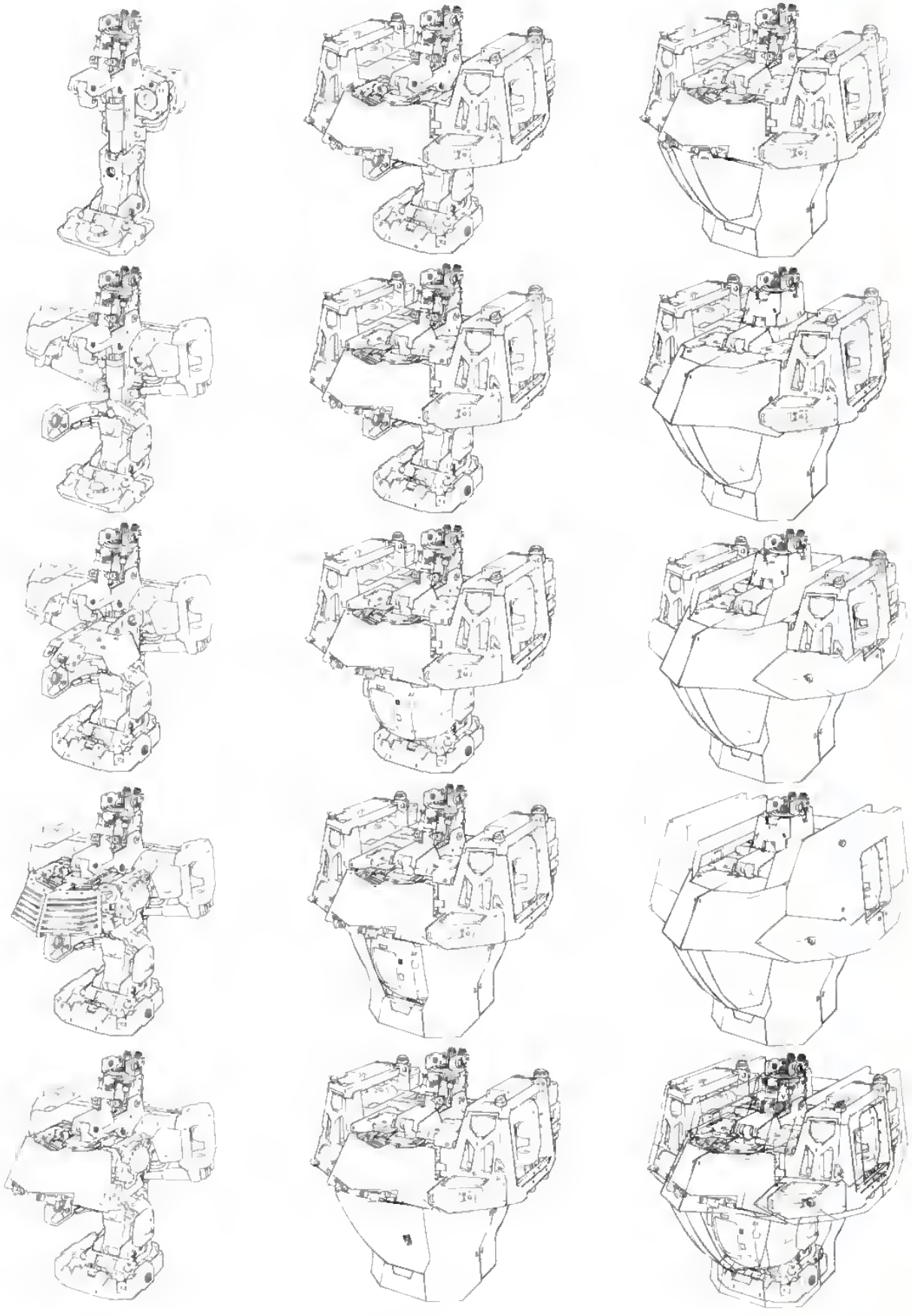
これに対し、AE社でもムーバブル・フレームの概念は研究されており、これは一部ではAE・フレームと総称されている。

このAE・フレームは、一年戦争当時、最強の正式採用機とも呼ばれたRGM-79SP ジム・スナイパーⅡのものがベースとなっており、その後ジオニック社やアナハイム社等の技術を吸収したことで独自の規格の幾つかが策定されることになった。また、ジオン残党勢力のアクシズからガンダリウムγ合金が手に入ったことで、RX-78以上の装甲を持つモビルスーツの開発が可能となったのである。

また一年戦争当時にシャプローの特殊兵器プラントで開発されたCAD・CAMシステムを戦後、AE社が導入したことも、飛躍的かつ多様な設計の萌芽に一役買った。このシステムは、V作戦のRXモビルスーツを短期間で開発するため用意されたツールで、コンピューター制御によって全自動設計・製作まで可能という代物だった。

これにより、AE社でも短期間でのモビルスーツの開発が可能となったものの、ムーバブル・フレームを採用した試作機の実機テストから正式採用機に至るまでには、様々なトライ&エラーを要したという。

AE・フレームは、この過程で幾つものパターンに派生した"ムーバブル・フレーム"として一括りにされているモビルスーツのフレーム機構には、実は系統ごとにそれぞれ異なる名称を持つと言われるほど、豊富な種類が存在するのだ。▶▶



重モビル・スーツ然としたAE・γフレームを使った機体として、RMS 099 リック・ディアスが建造され、この機体のフレームは、その後カラバ用のMSK 008 ディジェに応用されている

・方で Transformable Mobile Suit(TMS)を目指したAE・δフレームがある このフレームの機体は、後にMSN 00100 百式となり、エース専用仕様として採用されることになった

AE社では、こうした試作機同然のハイスペック機だけでなく、主力機として用意されたフレームを発展させ、RMS 108 マラサイやMSA 004k ネモⅢ、MSA 005K ガンキャノン・ディテクターといった後継機を開発している これは、それぞれハイザック・フレーム、ネモ・フレーム、メタス・フレームがベースになっている

UC 0087年、グリーン・オアシス事変が勃発し、エゥーゴの中核部隊であるアーガマ隊がグリーン・ノアよりガンダムMk Ⅱを奪取してきたことでAE・フレームに技術革新が起きる。

グリプスで開発されたガンダムMk Ⅱは、装甲材こそ旧来の材質を使っていたものの、ムーバブル・フレームが全身にくまなく使用されており、内骨格だけでモビルスーツの形を成す史上初の機体であったことが画期的である この機体のフレームを、特に'グリプス・フレーム'と呼ぶ また、このグリプス・フレームは、シリンダー・フレームを総合的なMASシステム(Movable & Armable inner Skeleton=武装と可動のための内骨格)にまで高めており、自己学習式の教育型コンピューターを改良したGundam Education Software(GES)と一体で運用されていたのである

グリプス・フレームの解析と同時にAE・δフレームやメタス・フレームを基に研究が続けられてきたAE・ζ(ゼータ)フレームが抜本から見直され、構造材にガンダリウム合金を使うことでムーバブル・フレーム自体の強度を引き上げたのである この時、GESも同時にコピーしており、この技術によりAE社は初の可変モビルスーツMSZ 006 ゼータ・ガンダムを完成させた

AE・ζフレームは、堅牢でコピーが容易たが、TMSであるがゆえに構造が複雑であり、大量のガンダリウム合金を使うことでコストが非常に高くなる弱点を抱えていたようだ

それでも、グリプス戦役やハマーン戦争を通して有用性が証されたMSZ-006は、その後継機が地球連邦軍で正式採用され、RGZナンバー機として主力部隊に配備されている

AE社はその後も様々な技術実証機を作るべくAE・ζフレームを基に可変分離機構を採り入れたθやι(イオタ)、κ(カパ)フレームを生み出すに至った

またグリプス・フレームやAE・ネモ・フレームを独自に改良したAE・フレームⅡを生み出し、シェザンを完成させ、地球連邦軍の主力機の座を一年近く守り続けているのだ

このように、ムーバブル・フレームは基本構造と制御技術の差違によって様々なバリエーションを持つ 単に外観上の問題ではなく、このムーバブル・フレームの応用の程度によって、'後継機種'といった区分けが可能になる。

もちろん、複数種のムーバブル・フレームを統合する形で新フレームが構成されることもあったはずで、その一例が先に挙げたζ・フレームと呼ばれるものだと考えることができる。

AE社内にはUC 0080年代初頭には既に、新型機開発のために複数の研究グループ・開発チームが置かれていたが、少なくともコンセプト決定の段階においては、これらは相互に連携するものではなかった その全てが優秀機としてロールアウトできなくとも、後においては相互補完も辞さない、といったレベルで、恐らく社内コンペのような形でそれぞれが独自の理想を模索していたことであろう。

筆者の考えでは、時期から考えて、リック・ディアスやメタス、ひいてはデルタ・ガンダム(百式)やダブルゼータ・ガンダムでさえも、ガンダムMk-Ⅱ奪取以前の段階で、フレームについてはある程度の完成型を開発していたであろうと推測される。当然、これらはフルスペックのムーバブル・フレームではなかった

ガンダムMk Ⅱの技術が流入したことを契機に、最も大きく設計変更を行ったのが、他でもないζ・フレームだったのだ、また、そのタイミングであれば、カミーユ・ビダンの「ゼータ・ガンダム」の設計思想を一部なりとも採り入れることが可能たったに違いない

最終的にゼータ・ガンダムは、プロトタイプ・ゼータ・ガンダムに使用されていたフレームや、アビオニクスを積極的に流用することで、ごく短期間でロールアウトすることになったのである。

Z計画の産物

AE社が目指していた技術革新は、開発計画のそれぞれが完成した新型モビルスーツをエゥーゴに納入することで、一定の成果を得たと判断された。一連の計画が、全体として"成功"を納めたことは、AE社にとっては無論のこと歓迎すべきものだった。

このことから、ガンダムMk Ⅱ奪取、及びゼータ・ガンダム建造に貢献したカミーユ・ビダンに敬意を表する形で、開発計画そのものが「Z計画」と呼ばれるようになったのではないだろうか。

ここまでで、「Z計画」についてほとんど全容を明らかにできたと思う。Z計画とは、ゼータ・ガンダムを中心とした、ゼータ・ガンダムのためにあった計画ではなく、この機体の成立に象徴される一連のモビルスーツ開発計画の総称に過ぎなかったのだ

最後にもう一つ、従来指摘されてきた、カミーユ・ビダンが「ゼータ・ガンダム」の命名者とされていることに含まれる矛盾について言及しておこう。

その矛盾とはすなわち、彼が元々「ζ」の開発コードを持っていた機体に、奇しくも「ゼータ」の名を付けたとされていることである。

カミーユがゼータ・ガンダムのアイデアをAE社に伝えた時期には、これまでに説明してきた通り、既にZ計画に含まれるモビルスーツ群の開発が進行していたことは明らかである。彼が具体的にゼータ・ガンダムの設計にどこまで関与したかは不明だが、その全ての設計が彼の手で行われたとするのは考えにくい。すると、カミーユはどこかの時点で「ζ」の計画を知らされたということだろうか?

説によると、少なくとも分割したフライングアーマーを左右の脇から機体前面に持ってくるアイデアは、彼の発案である

とされている。ゼータ・ガンダムは、ルウェイフライダーや変形機構など、ジャブロー攻略のために要求された仕様を盛り込んだ機体である。だが、フライングアーマー・システムを変形に組み込む際に、その質量の慣性モーメントが大きすぎ、これにフレーム強度が耐えられないことが障害になって完成が遅延していたとも言われている。

つまり、彼の着想によりそれがクリアされたことは、AE社の開発陣にとっては ゼータ・ガンダム建造の成功はカミーユの功績である」とするに充分な意味合いを持っていた、と考えるがどうだろうか。

デルタ・ガンダムで挫折した変形機計画が救われ、MSZ 006 ゼータ・ガンダムとして成立したことは、企業としての浮沈を賭けた計画を推進していたAE社にとっては、正に成功を象徴する出来事であったに違いない。

そう考えると、このゼータの後にロールアウトすることになるダブルゼータ・ガンダムが、「ZZ」と名付けられたことの重みもまた理解できよう。ダブルゼータは、成功作の象徴として"ガンダム"の名を背負った傑作機ゼータをも超える、との意味が込められていたということだからだ。

ガンダムMk Ⅱ、ゼータ・ガンダム、ダブルゼータ・ガンダム、百式の4機で構成されるガンダム・チームは、相互に密接な技術共有を行って生まれた、というわけでもなかった。だが、関わった技術者、フレーム技術といった側面から見ても、その関連性は極めて深いといえる。

不断の努力が実を結び、同時代にこれら優秀機を幾つも輩出できたAE社は、これをもって軍需企業としての地位を揺るぎないものとした。ガンダムMk Ⅱを筆頭とするアーガマのガンダム・チームこそ、それを決定付けた象徴的存在だったのである。

グリプス戦役の終結を象徴する百式の映像である。コロニーレーザー（グリプス2）内での戦闘により大破、漂流中のものをエゥーゴの艦艇が回収し、後にアナハイム・エレクトロニクス社に搬入したと言われている。この写真はその際、回収に当たったモビルスーツより撮影したものと思われる。開部のコクピットハッチは、発見された時点で既に開放状態にあった。生死不明であったシャア・アズナブルのその後は周知の通りである。また、第一次ネオ・ジオン戦争においてアーガマに再配備された百式が、この回収されたとされる機体をレストアしたものか、まったく別の再生産された機体であるかは今もって明らかではない。

THE BIG A.E.

アナハイム・エレクトロニクス社という企業

1＝あるモビルスーツ開発チームの技術者の机。Z計画において設計中の機体のモックアップらしきものが置かれている。写真＝アナハイム・エレクトロニクス社

我々は生活の中で、アナハイム・エレクトロニクス社（AE社）の製品を目にしない日はない。日常生活に必要なほんの些細な電化製品にしても、この宇宙で暮らす人であれば、人生において一度もこの巨大企業の商品を使わないということは、ほとんどあり得ないことだ。

だが、そんな我々の生活に密着した会社でありながら、AE社は平和的なそれとは別の顔を持っている。すなわち、兵器生産に携わる部門の存在である。もっと具体的に言えば、モビルスーツの開発・生産を行う唯一の民間企業なのだ。

ここでは、AE社のグリプス戦役前後のモビルスーツ開発における戦略について語ってみたい。

AE社は、グリプス戦役当時からエゥーゴ、ティターンズ両陣営にモビルスーツを提供するといった矛盾する行動を見せていた。これは単純に見れば、両軍へ武器を供給することで戦争そのものを活性化させ、自社の利益を追求する貪欲な行為にも映るのだが、真相はそれほど単純なものではなかった。

本社を地球に置きながらも、AE社は拠点を月面上に持っており、軍需産業だけにとどまらず家電などの民生品はコロニーを含んで広く地球圏に行き渡っている。"死の商人"という側面を持ちながら、一般社会に深く浸透しているのである。その影響力は一年戦争時において、同社の拠点の一つであるフォン・ブラウン市の中立宣言をジオンに侵害させないほどであった。

AE社がエゥーゴの直接の支援者であったことは周知の事実である。このことから、主としてスペースノイドには、AE社のブランドそのものは概ね好意的に受け取られていた。無論ティターンズのスペースノイドに対する弾圧的施策は、情報統制によって戦役半ばまでは公にされていなかった。エゥーゴで"クワトロ・バジーナ"と名乗り、自ら前線に立っていたジオンの遺児、シャア・アズナブルのダカール演説によって初めてそれらが明るみに出ることとなって、世論は一気にエゥーゴに傾いたのである。

その頃には、ティターンズによってAE社の工場があるフォン・ブラウン市の制圧戦・アポロ作戦やグラナダ市へのコロニー落としなども行われており、AE社は自社の保身と同時に、戦争を膠着状態に誘導するために実施していた戦力の供給を、ティターンズに対して行えないことになった。事実、RMS-108 マラサイがメラニー・ヒュー・カーバイン会長（当時）により無償提供されて以降は、ティターンズに正式に納入された主力モビルスーツは1機種もない。

ここに至って、ほぼ地球出身者（アースノイド）で固められたティターンズと、スペースノイドの対決の構図が完成する。

ここで注意しなければならないのは、手を結んでいるエゥーゴとAE社の`最終目標`は異なるところにあった、という点であろう。

企業としてのAE社は、自社の恒久的な利益追求のために戦争の長期化を望んでいたとされる。だが、エゥーゴがただ単純に"ティターンズ打倒"を目標として戦えば良かったのに対し、AE社には、`戦後`の経済状況をも織り込んだ戦略が必要とされていた。少なくとも、AE社の首脳陣はそのように考え、戦時中から既に体制のシフトを念頭に置いた経営を行っていたはずである。どれだけ長引かせるための方策を講じたところで、戦争はいずれ終結するのだ。

具体的には、地球連邦軍の弱体化・形骸化に伴い、一年戦争時のような大量戦力同士の激突が今後はほとんど起こらなくなるだろうと予測されたことが挙げられる。最大の顧客となり得る地球連邦軍からの大量需要が見込めないとすれば、量産機の生産よりも、少数の高性能なモビルスーツを必要としている部隊への集中的な売り込みを模索する方向へ進むことになるのは必然でもあった。

実際に、グリプス戦役の後は、大規模で長期間に渡る抗争はほぼ見られなくなった。直後の第一次ネオ・ジオン戦争（ハマーン戦争）においてさえ、せいぜい中規模の局地戦が行われたに過ぎない。この頃には、既に`少数の高性能機`に絞った開発の戦略は、実に的を射た結果として現れていたのである。量産機として第二次ネオ・ジオン戦争（シャアの反乱）の頃にロールアウトしたRGM-89 ジェガンがその後現在に至るまで用いられていることからも解るように、大量戦力の開発競争の時代は終焉を迎えていたのだ。

では、AE社の内部――具体的に言えば開発現場から見たモビルスーツ開発とはどういったものだったのであろうか。

前述の通り、AE社は少数の高性能機の開発を積極的に行う戦略への切り替えの時代に入っていった。グリプス戦役やハマーン戦争の折に幾つもの"傑作機`を誕生させた後は、これらをベースにした量産や発展・改良が多く生まれることになった。ハマーン戦争でエゥーゴの戦力の要として活躍した「ガンダム・チーム」を構成するモビルスーツたちの後継機は、それこそ枚挙にいとまがないほど生み出されている（例外なのはダブルゼータ・ガンダムくらいであろう）。

その下地は既にU.C.0080年代には作られており、AE社の開発陣はその時点での最高性能を持つモビルスーツを目標として活発に開発を続けていた。その根底にあるのは、やはり"ガンダム神話`であったろうと推測される。

エース・パイロットの乗る高性能機の象徴的存在であるRX-78 ガンダムは、実際にAE社の中でも代名詞的に使用されていた。開発スタッフの中には、個人的な信奉者も多かったという。それこそ無数の"ガンダム"が誕生し、その中には歴史の表舞台に出なかったものも多くあると聞く。

一年戦争終結後には、連邦系、ジオン系問わず、戦時中にモビルスーツ開発に携わった技術者たちが様々な開発拠点で情報交換をし合い、新機種開発の萌芽が地球圏全体で見られることとなった。そんな中でも、AE社の技術者たちは、特に自分たちが"ガンダム"を開発することに拘っていた。ありきたりの量産機ではなく、最高峰の一品を追求する。それはAE社が採った少数高性能機路線に合致していたのである。

結果として、AE社の作る量産機も、それら高性能機の運用データを反映することで、安定した能力を発揮するという副産物を得ることになった。AE社はブランド力をますます強めるとともに、着実に開発ノウハウを蓄積していくのである。

そしてシャアの反乱の際には、本来の`ガンダム`のパイロット、アムロ・レイの要請に応じ、急ぎRX-93 νガンダムを建造することになるのである。

さらに、もしかすればこのU.C.0109年の今でも、AE社は新たな`ガンダム`を黙々と設計し続けているかもしれないのだ。

AE社は、少なくともモビルスーツの開発・生産を通じて幾つもの抗争を牽引すると同時に、それを終結させるために技術の投入を惜しまなかった。その結果、AE社は戦後における自社の地位やシェアを揺るぎないものとしたが、それは同時に我々スペースノイドの生活の基盤を安定させることにも繋がっている。

AE社は既に、我々の生活に切っても切り離せない存在となっているのだ。

これは、アナハイム・エレクトロニクス社（AE社）が新機種の開発計画をプレゼンするために作成したパンフレットのコピーの一部である。本来ならば一般に出回ることのないこの資料たちは、恐らく自室にこれを保管したまま出撃し、その戦闘で死亡したパイロットの遺品に紛れる形で外部に漏れたものと推察される。

これらの貴重な資料は、ＵＣ0080年代後期における重要な顧客であったエゥーゴや、対ネオ・ジオンの内偵任務に就いていた地球連邦軍の外郭部隊に対して、AE社が積極的に新モビルスーツの売り込みをかけていた証拠となるべきものと考えられる。

無論、このコピーがマニアの"小遣い稼ぎ"のためのフェイクである可能性も否定はできない。また、パンフレットに使用されている画像は、CGやモックアップである場合がほとんどだが中には、人知れず建造され、実機が完成していたものも存在するかもしれない。

今回は、それらの中から、グリプス戦役で活躍した「Z計画」のモビルスーツの直系といわれる機体を取り上げてみよう。

All-in-one type to succeed excellence of Re-GZ

The Re-GZ CUSTOM was designed as a development type of Re-GZ. Re-GZ is a type to improve the productivity of ZETA GUNDAM that is the high performance machine, and the point to have abolished a simple, changeable mechanism by "Back Weapon System (BWS)" based on this is a big feature.
There was a disadvantage of disposable though BWS was necessary equipment for the cruise form.
This fault is improved in this machine. BWS is miniaturized and it is folded by the back of a Mobile Suit. As a result, it recurs to the concept as transformation Mobilsuits, and easiness (height and almighty) to use is achieved. In addition, thermal power that BWS is high will be able to be made the best use of.
The head shape is nearer Gundam than Re-GZ. It has enough high performance as ace pilot's special machine.

「リ・ガズィ・カスタム」

ゼータ・カンダムの生産性を高めたタイプである。カプを さらに改良のために設計変更したモデルが・ガス ィカスタムである。ユニフ トによれば モビルスーツ形態への移行時に投要する必要のあったバック・ウェポン・システムBWS を小型化した上 単独の変形システムに ユーザ たとしている。それだけでなく BWSの火力をそのまま活かした戦略が可能になる点が強調されている。

なおこのパンフレットは、時、地球連邦軍の外郭部隊であるテ ・ヘン隊に対して直接プレゼンされたもの ー部)で 記述の中にある エース ハイ ットとは 婉曲的にアムロ・レイ大尉のことを指していると考えられる。そのため ・ガスィ カスタムはアムロ専用機ではなくとする噂に繋がったようだ。

Additional parts that draw out potentiality of ZETA GUNDAM.

It is a proposal of an additional armor that draws out the performance as a Mobile Suit of ZETA GUNDAM further. It becomes advantageous by giving an additional armor to ZETA GUNDAM that is the excellence machine in the adjacent combat. An additional armor improves the phylactic power without ruining the movement of a Mobile Suit. In addition, installed arms can be increased. The charm of an additional armor can be detached in every case easily according to the strategy.

「フルアーマー・ゼータ・ガンダム」

ゼータ・ガンダムの強化案として提示されたのが、フルアーマー・ゼータ・ガンダムである。パンフレットの記述では、防御力の増強や搭載武装の追加装備により、近接戦闘に向いたゼータ・ガンダムの能力向上が図られる、としている。この機体の優秀な格闘戦能力をハード的に補完し、モビルスーツ形態での潜在戦闘能力を引き出す狙いがあったのだろう。外装を状況に応じて適宜パージできることもメリットとして挙げられている。

High performance that improves transformation mechanism. Direct line machine of ZETA GUNDAM.

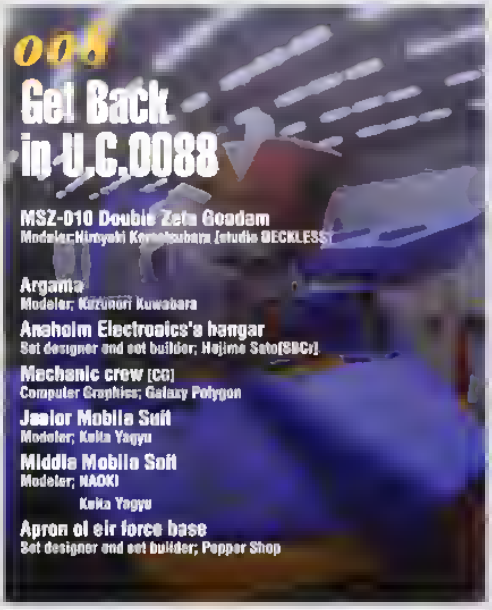
In ZII, the advanced level of the MSZ-006 ZETA GUNDAM that demonstrates a high performance is a model as it is by whom the transformation mechanism is made simple It has enough high performance as ace pilot's special machine The design of the ZETA GUNDAM is reflected, and it is the best for the flagship machine of A E U.G We will promise activity as the ace machine that pulls the force The transformation mechanism of simple METHUSS system Mobilsuits is adopted, and maintenance has been improved greatly The output improves about 5% compared with the ZETA GUNDAM After it transforms it, it becomes the form of the space fighter, and it has the domination to the enemy unit in the accelerating force, the kinematic performance, and the cruising range Compact to which the taking turning is done easily in the hangar of the mothership of 18.3m in height has been achieved It equips it with the Mega-Beam Rifle of the output improvement type as special arms. The beam saber, standard two is carried Moreover, special arms of RICK-DIAS and ZETA GUNDAM that is our company's products can be equipped by the option by sharing of a hard point.

「ZII」

顧客用に[illegible]
I は、MSZ 006 ゼ[illegible]の直系としてデザインを取り[illegible]、整備性を向上させた開発コンセプトが明示されている。変形システムは、メタス系のフレームの概念も参考にされているようだが設計自体はまったくの新規であると思われる。変形後は宇宙戦闘機形態を取ることから 速度重視型だったゼータ・ガンダムと比べて操縦性においても格段に扱いやすい機体とな たはずだ。また武装は専用のメガ・ビーム・ライフルが用意されることにな ていたが、その他は従来のモビルスーツの携行装備をそのまま使用できることが謳われている。

Resources.

studio RECKLESS
Hiroyuki Komatsubara
SOFTBANK Creative
Hajime Sato
Hajime Motokami
Takahiko Hara
Ryoma Koshiba



008 Get Back in U.C.0088

MSZ-010 Double Zeta Gundam
Modeler;Hiroyuki Komatsubara [studio RECKLESS]

Argama
Modeler; Kazunori Kuwabara

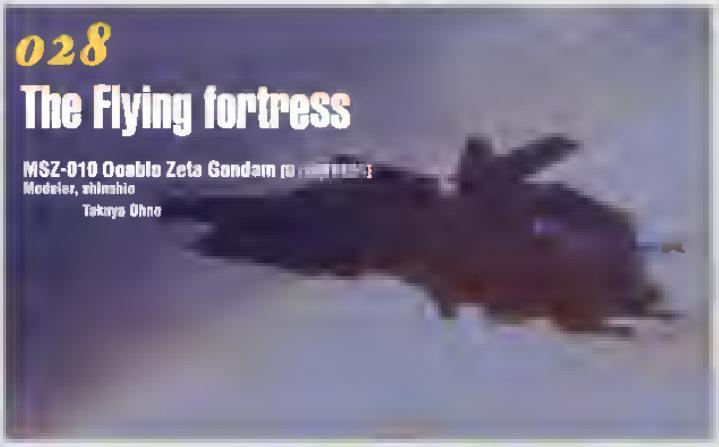
Anaheim Electronics's hangar
Set designer and set builder; Hajime Sato[SBCr]

Mechanic crew [CG]
Computer Graphics; Galaxy Polygon

Junior Mobile Suit
Modeler; Keita Yagyu

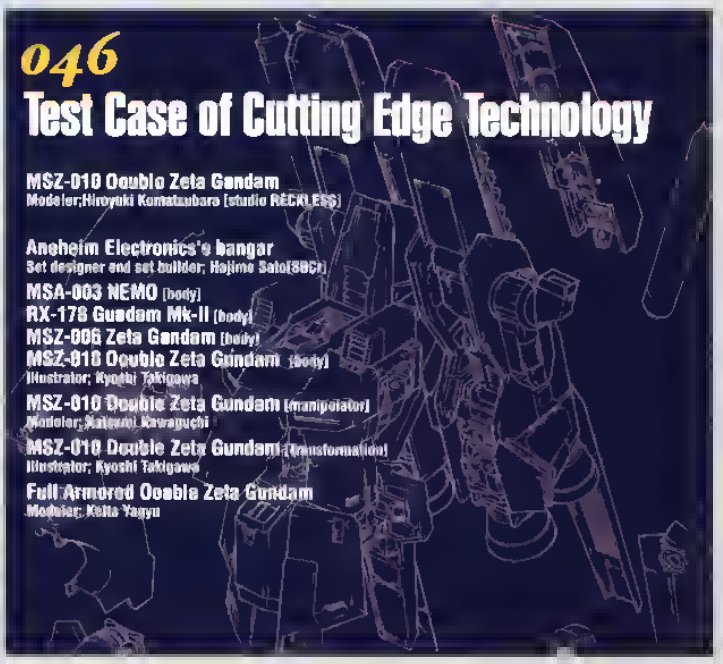
Middle Mobile Suit
Modeler; NAOKI
Keita Yagyu

Apron of air force base
Set designer and set builder; Popper Shop



028 The Flying fortress

MSZ-010 Double Zeta Gundam [G [illegible]]
Modeler, shimshio
Takuya Ohno



046 Test Case of Cutting Edge Technology

MSZ-010 Double Zeta Gundam
Modeler;Hiroyuki Komatsubara [studio RECKLESS]

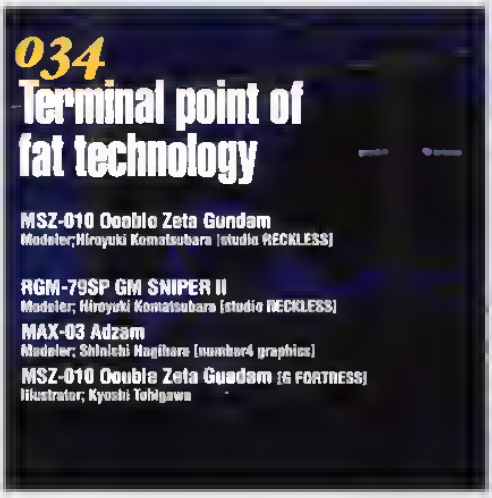
Anaheim Electronics's hangar
Set designer and set builder; Hajime Sato[SBCr]

MSA-003 NEMO [body]
RX-178 Gundam Mk-II [body]
MSZ-006 Zeta Gundam [body]
MSZ-010 Double Zeta Gundam [body]
Illustrator; Kyoshi Takigawa

MSZ-010 Double Zeta Gundam [manipulator]
Modeler; Katsumi Kawaguchi

MSZ-010 Double Zeta Gundam [transformation]
Illustrator; Kyoshi Takigawa

Full Armored Double Zeta Gundam
Modeler; Keita Yagyu



034 Terminal point of fat technology

MSZ-010 Double Zeta Gundam
Modeler;Hiroyuki Komatsubara [studio RECKLESS]

RGM-79SP GM SNIPER II
Modeler; Hiroyuki Komatsubara [studio RECKLESS]

MAX-03 Adzam
Modeler; Shinichi Hagihara [number4 graphics]

MSZ-010 Double Zeta Gundam [G FORTRESS]
Illustrator; Kyoshi Takigawa

002 Fake AD;AIRUNA
Designer, Shinich Hagihara [number4 graphics]

007 Fake AD;FLOWER STATION
Designer Hajime Sato [SBCr]

033 Fake AD;SUN Co.,LTD.
Designer Hajime Sato [SBCr]
Designer, Shinich Hagihara [number4 graphics]

051 Fake AD;TIGER BALM AirUNA
Designer, Hajime Sato [SBCr]

067 Fake AD;KAWS
Designer, Shinich Hagihara [number4 graphics]

105 Fake AD;ANAHEIM ELECTORONICS Group.
Designer, Hajime Sato [SBCr]

131 Fake AD;Colony public corporation
Designer, Hajime Sato [SBCr]

132 Fake AD;Weapon Stockker's
Designer, Hidemasa Yoshino [penigoo]

068
Nahel Argama
The Mothership of "GUNDAM"

Nahel Argama
Computer graphics;Shinya Ogura
Shiloich Hagihara [numbers graphics]
Hajime Sato [S8Cr]

073
Looking back Haman war

News Net[illegible] Papers [fake]
Fake writer; Ryuji [illegible]
Fake designer; Shiloich Hagihara [numbers graphics]

080
Double Zeta GUNDAM
requested in age

Full Armored Double Zeta Gundam
Modeler; Keita Yagyu
Junior Mobile Suit
Modeler; Tetsuya Saito (club-M)

088
From the Operation Side

MSZ-010 Double Zeta Gundam
Modeler;Hiroyuki Komatsubara [studio RECKLESS]

Nahel Argama's Mobile Suit Deck
Set designer and set builder; Hajime Sato [S8Cr]
Argama's hangar
Set designer and set builder; Pepper Shop
RX-178 Gundam Mk-II
Modeler; Keita Yagyu
MSA-005 METHUSS
Modeler; syujyu
MSZ-006 Zeta Gundam [for Roux Louka]
Modeler; Hiroyuki Komatsubara [studio RECKLESS]
Middle Mobile Suit
Modeler; NAOKI
Keita Yagyu
MSN-00100 100 SHIKI
Modeler; Hiroyuki Komatsubara [studio RECKLESS]
NRX-044 ASSIMAR
Modeler; Takuya Kanamori [studio RECKLESS]
RGM-79SP GM SNIPER II
Modeler; Hiroyuki Komatsubara [studio RECKLESS]
MS hangar
Set designer and set builder; Pepper Shop
FXA-07G2 NEO CORE-FIGHTER
Modeler; Shigeyuki Ninomiya
AMX-014 DÖVEN WOLF
Modeler; Shigeyuki Ninomiya
AMX-011S ZAKU CUSTOM
Modeler; Takuya Kanamori

106
THE GUNDAM TEAM

MSZ-010 Double Zeta Gundam
Modeler;Hiroyuki Komatsubara [studio RECKLESS]
RX-178 Gundam Mk-II
Modeler; Keita Yagyu
MSZ-006 Zeta Gundam [for Roux Louka]
Modeler; Hiroyuki Komatsubara [studio RECKLESS]
MSN-00100 100 SHIKI
Modeler; Hiroyuki Komatsubara [studio RECKLESS]
Argama's hangar
Set designer and set builder; Pepper Shop
Anaheim Electronics's hanger
Set designer and set builder; Hajime Sato [S8Cr]
MS hangar
Set designer and set builder; Pepper Shop
Delta Gundam
Modeler; Hiroyuki Komatsubara [studio RECKLESS]
Middle Mobile Suit
Modeler; NAOKI
Keita Yagyu
MSN-00100 100 SHIKI [crash model]
Modeler; Hiroyuki Komatsubara [studio RECKLESS]
MSN-00100 100 SHIKI [Movable Frame]
illustrator; Kyoshi Tokigawa
MSZ-005 Zeta Gendam [Transformation CG]
Computer graphics; Galaxy Polygon

122
THE BIG A.E.

MSZ-006 Zeta Gendam
Modeler; Yoichi Nishimura
HGZ-01B Re-GZ Custom
Modeler; syujyu
Full Armored Zeta Gundam
Modeler; shinshin
MSZ-008 ZII
Modeler; Shiro Sato [studio RECKLESS]

masterpiece of HUGE ARMS
Anaheim Electronics MSZ-010 Double Zeta Gundam

STAFF

WRITERS

岡崎昭行	Akiyuki Okazaki
小倉信也	Shinya Ogura
岡部いさく	Isaku Okabe
藤津亮太	Ryota Fujitsu
高橋昌也	Masaya Takahashi
橋村 空	Kuu Hashimura

MODEL WORKS

小松原博之	Hiroyuki Komatsubara (studio RECKLESS)
柳生圭太	Keita Yagyu
NAOKI	NAOKI
syujyu	syujyu
金亜拓也	Takuya Kanamori
西村友一	Yuichi Nishimura
桑原憲徳	Kazunori Kuwabara
shinshin	shinshin
大野卓也	Takuya Ohno
MAKOTO	MAKOTO (studio RECKLESS)
誠	Makoto (studio RECKLESS)
さとうしろう	Shiro Sato (studio RECKLESS)
高嶺拓海	Takumi Takamine (studio RECKLESS)
池田哲也	Tetsuya Ikeda (club M)
二宮茂幸	Shigeyuki Ninomiya (NYASA)
川口克己	Katsumi Kawaguchi

MODEL WORKS PRODUCER

小松原博之	Hiroyuki Komatsubara (studio RECKLESS)

CONCEPT & ORIGINAL DESIGNWORKS

ペッパーショップ	Pepper Shop

DOUBLE ZETA GUNDAM DESIGNWORKS

柳瀬敬之	Takayuki Yanase

ILLUSTRATORS

瀧川虎至	Kyoshi Takigawa

CG WORKS

ギャラクシーポリゴン	Galaxy Polygon

SFX PHOTOGRAPHERS

ハギハラシンイチ	Shinichi Hagihara (number4 graphics)
佐藤 始	Hajime Sato

PHOTOGRAPHERS

佐藤 元	Hajime Sato

COVER & DESIGN WORKS

ハギハラシンイチ	Shinichi Hagihara (number4 graphics)

EDITORS

佐藤 元	Hajime Sato
村上 元	Hajime Murakami
小芝龍馬	Ryoma Koshiba
原 毅彦	Takehiko Hara

SPECIAL THANKS

池田直美	Naomi Ikeda (Club M)
角田 治	Osamu Tsunoda
水森忠義	Tadayoshi Mizumori
石川雅夫	Masao Ishikawa (MMI)
チェ・ソヨン	Choi Sohyen
有限会社RCベルグ	RC BERG LTD
堀口 滋	Shigeru Horiguchi (サンライズ)
井上幸一	Koichi Inoue (サンライズ)
株式会社サンライズ	SUNRIZE inc

マスターピース ダブルゼータ・ガンダム

2009年3月25日 初版発行

編集 製作 GA Graphic編集部

発行人 新田光敏
印刷 錦明印刷株式会社
発行所 ソフトバンク クリエイティブ株式会社

〒107-0052 東京都港区赤坂4丁目13番13号
販売 TEL 03-5549-1201
編集 TEL 03-5549 1195

(C)創通 サンライズ
(C)SOFTBANK Creative Corp

ISBN978-4-7973-5265-6
Printed in Japan

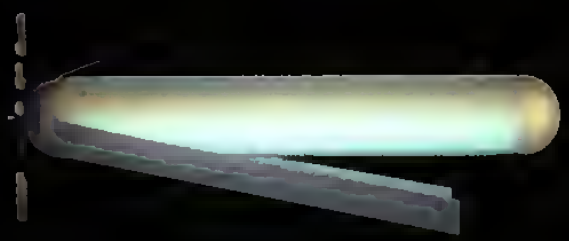
本書に関するお問い合わせは、平日の午後4時から午後6時の間に03 5549 1195でお受けしています。

http://gs.sbcr.jp/
本書をお読み頂いた感想、ご意見を上記URLからお寄せ下さい。

本書の無断複写 複製・転載を禁じます。
落丁 乱丁本は小社販売にてお取り替えいたします。定価はカバーに記載されています。

WE FLY YOU TO THE MOON
A

LIVES WITH UNIVERSE



The COLONY PUBLIC CORPORATION makes the base of the life of the human race by a certain technology that has the history for 100 years or more.

Colony public corporation

masterpiece
of HUGE ARMS

ダブルゼータ・ガンダムの機体を詳細に検証したことから得られる結論は、これが数々の"実験的装備"を投入された、試作途上にある機体であったとおぼしき事実である。しかし、同様に試作機であったRX-78ガンダムが大地に立ったその時点で示していた完成度と同じものを、ダブルゼータ・ガンダムはその戦果をもって示していると考えるべきである。

設定考証・小倉信也

©創通 サンライズ

マスターピース
ダブルゼータ・ガンダム

ガンダム世界における「巨大兵器の専門書」をテイクアウト！この本は、架空の兵器であるモビルスーツを実際に存在する機体として捉え、高度な造型技術を投入した模型特撮と詳細に考証されたテキストによって、"時代が必要とした機体"ダブルゼータ・ガンダムを掘り下げる。

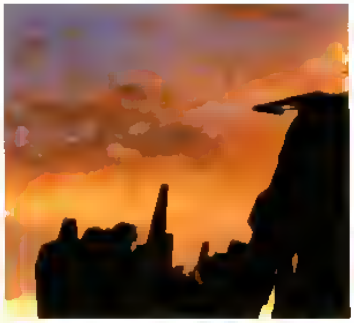
9784797352856

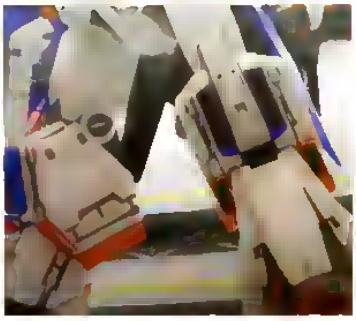
ISBN978-4-7973-5285-6

C0076 ¥2400E

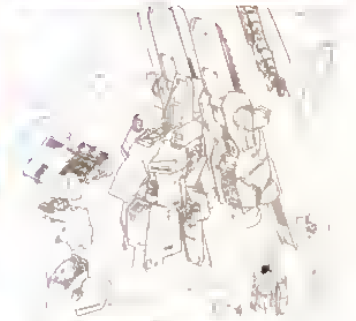
1920076024009

定価 本体2,400円 +税





集結したスタッフの“想い”が、20メートルの巨大兵器＝モビルスーツが実在している「機動戦士ガンダム」の世界を緻密に再現する。ガンプラという枠を遥かに超えたハイクオリティな模型特撮で描かれた宇宙世紀がここに!



masterpiece of HUGE ARMS

Anaheim Electronics MS7-010 Double Zeta Gundam

マスターピース ダブルゼータ・ガンダム

SoftBank Creative

masterpiece of HUGE ARMS

The language used is JAPANESE 日本語版

Published in REAH side 08 | Commentary on Military and Technology | 巨大兵器のマスターピース | JAPANESE

アナハイム・エレクトロニクス MSZ-010 ダブルゼータ・ガンダム

Anaheim Electronics MSZ-010 Double Zeta Gundam

U.C.0109

FRANCHESKA in REAH 8H 75C KAMIGUSA in REAH 8H NAUDELEAN in REAH 8H 20C NEW MADERA in REAH 8H 20C ONTARIO in REAH 8H UKRAINA in REAH 5H 10C

PALDA in REAH 5H 10C/ RIBO in REAH 5H 20C/ (Excluding tax)

Brought to you by SOFTBANK CREATIVE

Zeon's Major Plate

12.25 kuro

Size H16mm / W52mm

MS Emblem

8.25 kuro

no week is necessary by the time the port regains a past state | Size H38mm / W20mm

Zeon's Major rank

12.25 kuro

no week is necessary by the time the port regains a past state | Size H38mm / W50mm

B.Wiseman Jacket Emblem

you either have JavaScript turned off or an old version of Adobe s Flash Player. Get the latest Flash player. Channel Icon. Subscribe.

Size:H120mm / W126mm

10.00 kuro

Limited!

15.25 kuro

Cyclops Force

no week is necessary by the time the port regains a past state | Size H58mm / W44mm

Very Valuable!!

Limited!

28.75 kuro

High Embroidery Made

Zeon's Major Rank

Size:H92mm / W92mm

Force Badge on my hands!

You also obtain that crest!

It can be said that only the badness in a situation not amusing was avoided on the ninth though damage big as a private shuttle exists in the combat airspace, too occurs. However, it is said that one week is necessary by the time the port regains a past state because it made the port unavailability by using the transport craft to which the Neo-Zeon is damaged seriously by the combat on the 8th.

Sale!

Federal Forces Series

1.5k kuro

Second lieutenant

3.00 kuro

Lieutenant's Badge

5.75 kuro

Captain's Badge

no week is necessary by the time the port regains a past state | Size all H38mm / W50mm

G-4 Force Pirot Emblem

you either have JavaScript turned off or an old version of Adobe s Flash Player. Get the latest Flash player. Channel Icon. Subscribe

Size.H120mm / W126mm

30.00 kuro

...more Junk item sales!

Palsar Company Bullet [1 Carton] 12.00 kuro

no week is necessary by elegant state

Chain Main Bomb 40.50 kuro

no week is necessary by elegant state

Misha's "Damage" Hip flask 80.45 kuro

no week is necessary by elegant state

ASCOT VIDEO GAMES

Stalking Crisis

30.95 Nell

Mega Hit! 120,000 sales

Weapon Stockker's.

Call Now! 006-5-0080-6876

It can be said that only the badness in a situation not amusing was avoided on the ninth though damage big as a private shuttle exists in the combat airspace, too occurs. However, it is said that one week is necessary by the time the port regains a past state because it made the port unavailability by using the transport craft on which the Neo-Zeon is damaged seriously by the combat on the 8th.

F.A.0079

ASCOT